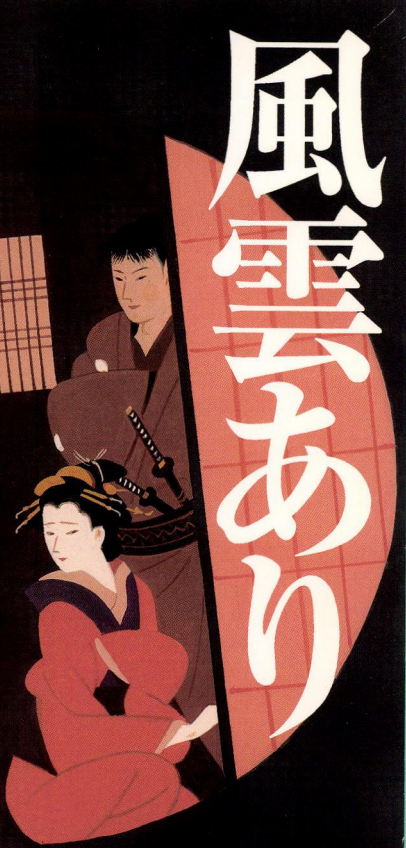
風雲あり

御家人風来抄

六道慧



幻冬舎文庫

幻冬舎文庫



御家人風来抄

風雲あり

六道　慧

御家人風来抄

風雲あり

六道　慧



幻冬舎文庫

御家人風来抄

風雲あり

目次

第一章　春の嵐　7
第二章　財宝娘　62
第三章　月に叢雲　112
第四章　死の呟き　162
第五章　大切なもの　214
第六章　三笠付　263
第七章　罠　324

第一章　春の嵐

一

あの女は何者なのか。
緒方弥十郎は考えている。
初めて逢ったのは、かれこれひと月前、いや、そうではない。雛祭りの後だったから、半月ほど前のことだ。深川の馴染みの居酒屋〈瓢六〉で意気投合し、そのまま船宿に流れて、わりない仲になっている。三度、逢瀬を重ねたが、いまだに千春という名前しかわかっていなかった。
——そこがまたいいんだよ。
などと思い出し笑いをしている自分に気づき、また苦笑した。
「なに笑ってんのさ」

隣の若い女郎が顔を覗きこむ。

「どうせ別の女のことでも考えていたんだろ。顔に書いてあるよ。旦那も好きだねえ、あたしみたいな美い女が隣にいるってのに」

「おれが考えていたのは、おもんのことさ。臍をまげるなって」

と、傍らのおもんを抱き寄せた。場所は薄暗い布団部屋、二人ともしどけない長襦袢姿で横たわっている。なにをしていたのかは言うまでもない。弥十郎は充ちたりていたが、おもんは不満げに唇を尖らせた。

「どうでもいいけどさ、旦那。両替してきてもらった銭がやけに少ないんだよ。ちょろまかしたんじゃないだろうね」

年は十八、この稼業に入ってまだ日が浅いため、顔色もよく、元気いっぱいという感じがする。弥十郎が物思いに耽っている間中、敷き布団の上に広げた銭を勘定していたのだ。一両の両替を頼まれて、使い走りの役目を終えた後、なんとなくこの布団部屋で、なんとなくそういう場を持つに至っている。いかにも成り行きまかせの弥十郎らしい展開だが、笑える話ではなかった。

「そいつぁ、聞き捨てならねえな、ええ、おもんよ。おれはおまえさんに両替を頼まれてだ、両替商に行き、銭に替えてもらって、それを懐紙に包み、『ほらよ』と渡したんだぜ。銭が

幾らあったのかも知りゃしねえよ。四十一俵二人扶持の貧乏御家人とはいえ、まがりなりにもお上より禄を賜る身。そのおれがだ。苦界で働く女の銭をごまかしたりするかい」

「冗談だよ、本気にならないでよ」

首をすくめた後、ふふっと小さく含み笑った。

「でも、旦那って怒ると可愛い顔になるんだね。あたし、惚れ直しちゃった」

「いっぱしの口ききやがって」

鼻を鳴らして、煙管を吹かす真似をする。煙草はおろか、喉を潤す茶すらない。呆れたようにおもんが言った。

「煙草を吸っているつもり、茶を飲んでいるつもりの『居残さん』かい。そうだよねえ。銭勘定に細かけりゃ、花代が足りなくなる前に引き揚げるよねえ。剣術の方は凄い腕前らしいけどさ、算術はからきしなんだね」

「うるせえ。よけいなこと言うんじゃねえや」

答えて弥十郎は、ぽんと灰を落とす真似をした。五日前、裏の稼業で金が入った勢いで、ここに繰り出して丸二日、飲めや歌えの大騒ぎ、ところが金を払う段になって「あれ？」となったのである。

二分一朱と百文、足りなかったのだ。

それじゃ身体で支払いましょうと、居残ったことから、ついた渾名が『居残さん』。落とし噺のようだが、弥十郎はけっこうこれが気に入っている。朝から晩まで女たちに囲まれているうえ、ときには今のような嬉しい余禄もあるからだ。

「おれは遊女屋の主になりてえ」

本音まじりの呟きに、おもんもかなり真面目な顔で答えた。

「あたしはね。『ねがはくは小判の下にて』だよ。どうせ死ぬんだったら、押し潰されるほどのお宝に埋もれてさ、死にたいよ」

「ほう」

弥十郎はちらりと目を走らせる。

「なんだよ、その目は」

「いや、学があるんだなと思ってよ」

「お客の受け売りだよ。なんとかって言う偉い坊さんの歌なんだろ。ええと、『ねがはくは』、ええと、なんだっけ？」

「『ねがはくは花のもとにて春死なむその二月の望月のころ』さ。西行法師が詠んだ歌だ。まさか、おまえさんの口から出るとは思わなかったぜ」

「言っただろ、客の受け売りだよ。旦那ったら、ひとりで煙草、吸ってずるいじゃないか。

あたしにも煙管、貸してよ」
　奪い取る真似をしたおもんに、慌てて告げた。
「おっと、もう灰を落としちまったぜ」
「あ、そうか」
　笑い合って、布団部屋の熱い一時ふたたびとなりかけたが、
「お」
　弥十郎は障子の隙間から覗く目に気づいた。
「無料で覗くとは太えやろうだ。そのいやらしい目つきは主の幸蔵殿だな。なに遠慮してやがる。ここは自分の見世だろう。遠慮しねえで、入れや」
「だれが遠慮いたしますか」
　主の幸蔵が勢いよく障子を開ける。将棋の駒のような角ばった顔をした男で、年は四十前後。冷ややかに弥十郎とおもんを一瞥した。
「ちょいと姿が見えないと思えば、こんなところに二人でしけこんで。いいご身分でございますねえ、緒方様」
「誤解しねえでくんな。話をしていただけさ、なあ、おもん」
「そう、そうだよ。旦那に『ねがはくは』って頼まれてさ。叶えてやったところなんだ、と、

いけない。あたし、そろそろ上に戻らないと」

ばつが悪そうに目を逸らして、おもんは、丸めてあった着物を羽織り、主の横をすり抜ける。後に残された弥十郎は、悠然と着物をまとった。

「緒方様。『早くお戻りくださいませ』と、お屋敷から幾度となく、お使いが来ておりますよ。薪割り、掃除、文の代筆、遊女たちの使い走りと、この三日間、本当によく働いてくださいました。もう充分でございます。お帰りくださいませ」

「今もおもんと話していたんだがよ。おれはな、主殿」

弥十郎は帯を締めて、幸蔵の前に座る。今度は茶を飲む真似をして、続けた。

「おまえさんと代わりてえぐれえなのさ。つくづく思ったね、おれは生まれる場所を間違えたんだと。遊女屋の主こそが、おれの天職。朝は遅くていい、好きなときに気に入った女を抱ける、酒は飲み放題、日銭が入ると、いいことずくめよ。どうだい。おれと入れ替わらねえか」

本音まじりの言葉が出る。幸蔵はわずかに唇をゆがめた。

「ご冗談を」

「いや、話だけでも聞け。おれの家はここよりもっといいぜ。なにしろ借金まみれで、口うるさい山姥付きだ。ついでに言うとこの山姥はだな、我儘で贅沢、美食家で男好きときてる。

とうに六十を超えている媼だろうが、年ははっきりしねえのさ。妖怪と暮らすってのもなかなかおつなもんだぜ」

「言っておきますが、緒方様。酒は飲み放題ではございません。さらに気に入った女を抱いておりましては、商売になりません。布団部屋にしけこんで、遊女を無料で抱くのは、緒方様ぐらいのものでございますよ。それにしても、この匂い」

主は大袈裟に顔をしかめ、布団部屋の障子を開け放った。

「練り香でもお使いなのですか。悪い薫りではございませんが、いささかきつうございますな」

「おれは使ってねえが」

くんくんと鼻をうごめかせる。

「言われてみりゃ、確かに香の薫りだぜ。しかもこりゃ相当、値の張りそうな……季節を先取りして蓮の花の練り香でも使ったか。おもんのやつ、西行法師の歌といい、香の薫りといい、油断できねえや。上客を摑んだようだな」

「若くて器量も悪くございませんからね。さ、緒方様。そろそろ午になります。先程も申しましたように、『居残さん』は本日にて御役御免。お帰りくださいませ」

「つれないこと言うなよ、なにかまだやることがあるんじゃねえのか。知ってのとおり、お

れは用心棒としても……」

不意に女の悲鳴が響きわたる。

「そら、言った先からこれだ」

弥十郎は幸蔵を押しのけ、玄関に走った。おもんが廊下に引き倒されて、男にのしかかられている。両手で首を絞められていた。

「おまえが、おまえのせいだ。大丈夫だと言ったから」

「ぐ、あ、あたしはなにも」

「言ったじゃないか、大丈夫だと！」

さらに首を絞めようとした男の腕を、弥十郎は軽く摑み、握りしめる。急所を押さえられて、男は大声をあげた。

「いたたたた」

腰を浮かせた男を強く引っ張る。弥十郎は六尺（約百八十センチ）近い大男、対する相手は、多少、肉付きはよいものの、小柄な方である。赤児のように軽々と男を床に放り投げた。鈍い音をたてて、尻から床に叩きつけられる。

「うぐっ」

顔をしかめながらも、ぐっと弥十郎を睨みつけた。

「あ、あんたは」
年のころは四十なかば、豊頬で品のよさそうな商人といった雰囲気がある。中店あたりの主かもしれない。
「おれか？」
弥十郎は答えた。
「本所の御家人、緒方弥十郎。風の吹くまま、気の向くままの風来屋よ。喧嘩の仲裁、謝り仲人、御家騒動の肝煎役と、頼まれればなんでもやるが、今はそうよな。仲裁役を兼ねた用心棒ってとこか」
「用心棒」
男はとたんに落ち着きをなくして、おもんや他の遊女たちに目を向ける。男衆も集まって来て、玄関先は昼さがりの修羅場といった様相を呈していた。
「なにがあったのか知らねえが、出直して来い。頭を冷やせば、おもんもちゃんと話をするだろうさ。いきなり首を絞めるってのはまずいと思うぜ」
「……」
男は目を逸らして、立ちあがろうとしたが、思いのほか腰を強く打ったのかもしれない。呻き声を洩らした。

「すまなかったな。力は入れなかったんだが」
弥十郎が差し出した手を邪険に振り払い、土間に降りる。腰を押さえながら、蹌踉(そうろう)とした足取りで出て行った。
「ありゃ、だれだい」
問いかけに、主の幸蔵が答えた。
「本所緑町(ほんじょみどりちょう)で下駄屋をやっている喜伝次(きでんじ)という男です。中店ですが、商売はうまくいっているとか。おもんが来たその日に、目をつけたようでして。以来、五日に一度ぐらいでしょうか。通って来るようになりました」
「緑町か。おれの家からさほど遠くねえな」
さりげなく奥に行こうとしたが、それより早く主に袖(そで)の下を摑まされる。
「用心棒代でございます。ありがとうございました。おや、ちょうどお迎えが来たようでございますよ」
ほっとしたように幸蔵が玄関先を見やった。
「旦那」
悪友の秋山宗順(あきやまそうじゅん)が、媚(こび)を含んだ笑顔を向ける。坊主の姿をした大男に、秋波を送られても嬉しいわけがない。本人だけがいいと思っているその笑みに、苦笑いを返して、弥十郎は土

間に降りた。

「ちっ、早々に御役御免か。また来るぜ」

天保元年（一八三〇）三月。

布団部屋に籠もっていた弥十郎は、眩しげに目を細める。江戸の町には、初夏を思わせる陽射しが降り注いでいた。

二

「おめえが迎えになんぞ、来るからよ。おれの『ねがはくは』が叶いそこねちまったじゃねえか」

歩きながら、つい文句と愚痴が出る。江戸の南端、永代寺と富岡八幡宮の門前町には、数多くの遊里が建ち並び、気怠げな空気が漂っていた。昼見世に足を運ぶほどの暇人はそう多くない。弥十郎は名残惜しげに〈桔梗屋〉を振り返る。

「うまくいきゃ今宵もとなるかもしれなかったのに、惜しいことをしたぜ。礼がてらの閨には、いっそう気持ちがこもって」

いてっと大きな声をあげた。宗順に腕をつねられたのである。二人は同い年の二十五歳。

負けず劣らずの体軀を持つ悪友は、冷ややかな目をくれた。
「丸五日ですよ、五日。何度、使いを出してもなしのつぶて。金が足りなくなって『居残さん』とは、呆れてものが言えませんよ。算術が苦手なのは知っていますが、おまえさん、花代の勘定もできないんですか」
「いや、足りると思ったんだがな。何度、考えても合点がいかねえのさ。どうして、足りなかったのか」
「いかにも考えるふりをしているように見えますが、ごまかされませんよ。下手したらあのまま〈桔梗屋〉の男衆になりかねない様子だったじゃありませんか」
口調はきついが、一緒に歩くだけで嬉しいという顔をしていた。「惚れた旦那のためならば」が口癖の坊主は、二十俵二人扶持の表坊主。御城で大名諸侯の世話をするのがその主な役目だ。緒方家よりも禄は低いが、袖の下や付け届けといった余禄がある。まして両親もすでにいない独り者となれば、弥十郎は怨み言のひとつや二つ、言わずにいられない。
「見損なうんじゃねえ、男衆じゃねえや。おれが狙っていたのは主の座よ」
「と威張って言うようなことじゃないと思いますが」
「いいじゃねえか、夢見るぐれえはよ。ああ、おれは幸蔵になりてえ。毎日、女に囲まれてだ、毎日、酒を浴びるように飲んでも、だれにも文句を言われないんだからな。心底、羨ま

しいぜ」

　おい、と、富岡八幡宮の鳥居の方へ足を進めた宗順に呼びかける。

「八幡様になんの用事があるんだ。綺麗所であればともかくも、てめえと二人で社詣りなんぞ、したかねえぞ」

「お忘れですか、今日は二十一日ですよ。永代寺の山開きの日じゃありませんか」

「なにを言ってやがる。永代寺じゃなくて、富岡八幡宮の山開きだろ」

「ああ、もう、これだから、おまえさんは……いいですか。そもそも永代寺というのは、長盛法印という高僧によって、砂村の八幡宮をこの地に移したことに始まるんです。これが富岡八幡宮なんですよ」

　いかにも坊主らしい蘊蓄に、うんざりしたが、聞かないとよけい面倒なことになる。渋々先を促した。

「それで？」

「はい。永代寺は、その別当寺、わかりますか、寺務を生業とする別当の住まいですね。住まいとして、永代寺が建てられたんですよ。正式名は、大栄山永代寺金剛神院。ですから山開きと言った場合、永代寺の山開きが正しいんです。山開きはしばらく続きますが、どうせなら初日にお詣りしたいと思いましてね。そろそろ午近くですから、二軒茶屋の前の料理屋

あたりで、中食をいかがですか」
「二軒茶屋で中食とは、やけに豪勢じゃねえか。下々は食うのもやっとってのによ。景気がいいな、城勤めの坊主は」
鳥居の前で立ち止まり、弥十郎はしみじみ悪友の顔を見た。どこかうきうきとした様子に見えるのは気のせいだろうか。却って警戒心が湧いていた。
「なぜ、わざと『の前の料理屋』という部分を抜かすんですか。どうでもいいですが、こんなところに大男が二人、突っ立っていると、邪魔になるだけです。ほら、行きますよ」
「なにを企んでいるのやら」
小声で呟き、宗順の後に続いた。鳥居から三、四町の間は、両側に茶屋や料理屋がずらりと並んでいる。そういった見世の前に、甘酒や団子、子供向けの手車売りや飴細工などの屋台が連なり、いつも以上の賑わいを見せていた。
そして、そういった見世の向こうに、富岡八幡宮の美しい庭が広がっている。少し離れた場所には、人工の富士山も見えていた。四季折々に咲き誇る花を楽しみにしている者も少なくない。今は藤棚の藤が、ほころび始めていた。
「藤の花の薫りでしょうか。いい薫りが漂ってきますねえ」
「宗順」

賽銭箱の前で、弥十郎は、試しに右手を差し出した。

「駄目ですよ。お賽銭ぐらいは自分で出さないとご利益がありませんよ」

などと言いながらも、言葉とは裏腹に、銭を載せてくれる。ますます気持ちが悪くなってきた。案内される料理屋の一室には、すでに床がのべられているのではないか。今日こそはと気合いを入れているのではあるまいか。

――それともご加増でもあったのかね。

ちらちらと疑惑の目を向けつつ、賽銭箱に銭を投げこみ、型どおりのお詣りを済ませる。ふと思い出したように、宗順が言った。

「そういえば、さいぜんの騒ぎですけれど、原因はなんだったんですか。遊女の手練手管に堅物男が騙されて、というところでしょうか」

「おもんと喜伝次か。さあてな、詳しいことはわからねえや。『おまえのせいだ。大丈夫だと言ったから』なぁんてことを言ってたがね。袖にされた腹いせに、あることないことわめくのは、珍しいことじゃねえ。いちいち気にしてたら、遊女屋の主は務まらねえだろうぜ」

「すっかり主になった気分ですね。では、風来屋の旦那。今日は日頃、お世話になっているお礼のつもりでございます。さささ、どうぞこちらの二階へ」

示された料理屋は、本当に〈二軒茶屋〉の向かいにあった。ここも決して安くはない見世

である。

「いいのか？」

薄気味悪さ半分、いや、全部かもしれない。昼日中から、まさか自分を押し倒すことなどありえないとは思うのだが、あまりにも上機嫌であるため、二の足を踏んでいる。

「遠慮する柄ですか。ほら、ほら、どうぞ上に」

背中を押されて、弥十郎は見世に入った。予約をしていたらしく、すぐ二階に案内される。鳥居から続く賑やかな参道が見渡せる座敷だった。

「いい眺めだな」

目を細めて、参拝客を見おろした。開け放たれた窓から流れこむ風は、爽やかで、早くも初夏の訪れを感じさせる。二度、三度と杯を空ければ、先刻までの疑問はどこへやら、とたんに気持ちが盛りあがってくる。

「いいねえ、昼酒は本当に旨いぜ」

「特に人に奢られる酒はじゃないんですか」

宗順の言葉に、唇をゆがめた。

「違えねえや」

「ですが、近頃は、あたし以外のどなたかにも、無料酒を振る舞われているご様子。あちら

こちらの船宿で逢瀬を重ねているとか。ちらりとお姿を拝見いたしましたが、あれは、どこのどなたでございますか」

そうきたか、と、弥十郎は昼の宴に招待された意味を悟る。

「おまえは、おれを見張ってやがるのか」

悪態を返したが、無料酒をだいなしにするつもりはない。

「怒鳴りつけたいところだが、そう訊きてえのは、おれの方なのさ。名は千春、年のころは二十一、二。わかっているのはそれだけだ。逢うときは決まって、藤色の着物を着て来る。ゆえにおれは『藤壺の宮』と名付けたが」

酒が入ったせいだろうか。謎めいた女のことが浮かんでいた。使いが来るのは、いつも夕方。届けられた藤色の文に記された船宿に行くと、千春が待っている。生娘ではなかったが、さりとて遊び女でもない。町人なのか、武家なのか。閨をともにしながらも、弥十郎は千春のことをなにも知らなかった。

〝よけいなことは訊かぬとお約束してくださいまし〟

これが初めて床をともにした後、告げられた言葉である。気にならないと言えば嘘になるが、野暮な詮索をしないのが風来屋流。しかし、流石に三度となれば、日に日に好奇心が高まってくる。

「鼻の下を伸ばすんじゃありませんよ」
宗順に手をつねられて、小さな声をあげた。
「いてっ」
「まったく、あたしが付いていないと、おまえさんはどうなるかわかりませんね。『藤壺の宮』などという風雅な異名が似合う相手とはとうてい思えませんよ。風来屋目当てに違いありません。無料で使おうという魂胆が見えみえじゃありませんか。断れない状況を作っておいて、難題を吹っかける。よくある策ですよ」
ずけずけとした物言いに、なんとなくほっとしたが、次に出た言葉は、ありがた迷惑なものだった。
「あたしにまかせていただきましょうか」
軽く胸を叩いて、続ける。
「四度目の逢瀬の文が来たときには、あたしがそっと付いて行きます。事が終わるのを待って、千春とかいうあの女が出て来たら、後を尾行ける。そうすれば、すっきりするじゃありませんか」
「またおめえは、そういう風情のないことを言いやがって」
手酌に変えて、参道の眺めにふたたび目を向けた。正直なところ、知りたいという気持ち

もある。が、今のままでいいという気持ちがあるのもまた事実。素性がわかったとたん、謎の女は普通の女になってしまうに違いない。そのときを少しでも先に延ばしたいと、弥十郎は思っている。

「どんな裏があるのか、わかったもんじゃありませんよ。抜き差しならなくなる前に、いえ、もうそうなっているかもしれませんがね。せめて、相手のことを調べておかないと」

「ふん」

不満げに鼻を鳴らしたが、逆の立場であれば、同じことを言っただろう。案じるがゆえの言葉であるのはわかっていた。以心伝心、悪友同士、通じるものがある。

「では、そういうことで」

宗順が鋭く表情を読んだ。運ばれて来たお銚子を傾け、杯に注いでくれる。ちらりと意味ありげな目をくれた。

「千春さんでしたか。あれだけの美人ですからね。ま、旦那の気持ち、わからなくもありませんよ」

「……」

ぞくりと、悪寒が走る。なぜ、こんなにも機嫌がいいのか。千春との逢瀬が終わる間、待つとまで言うその親切心に、うそ寒さを覚えていた。何度目かの疑問は、口にせずにいられ

ない。

「なにかいいことでもあったのか」

「え？」

「いや、今日はやけに機嫌がいいからよ。ちょいとこのあたりが」

弥十郎は首の後ろを掻きむしる。

「疼いちまってな。どうしたんだろうと思ったわけさ。さしずめご加増だろうと、おれはふんだがね。どうだ、図星だろうが」

「残念でした。自慢じゃありませんが、ご加増になるような手柄はたてておりません。恙なくご奉公するのが精一杯。風来屋のお手伝いをさせていただくのが、なによりの楽しみなんですから」

「今度はおれの機嫌取りか」

「いえいえ、そんなつもりはありません。いいことですか、そうですねえ。あるとすれば、これからじゃないでしょうか」

「これから」

わけがわからなくて、弥十郎は首を傾げた。一年に一度あるかないかの宗順の笑顔、いったい、なにを企んでいるのか。問いかけの眼差しに、今度は意味ありげな答えを返した。

「『月に叢雲花に風』と言うじゃありませんか。名月は雲が隠し、花には風が吹く。とかくよいことは邪魔が入りやすく長続きしないものですよ。それを思いますとね。今のこのときを大事にしなければ、なんてことを思いまして、おや？」

悪友は、ふと向かいの〈二軒茶屋〉に目を留める。

「あれは……辰吉姐さんじゃありませんか」

「辰吉？」

三

視線を転じた弥十郎は、〈二軒茶屋〉から出て来る辰吉を見た。芸者姿ではない、藤色の小紋を着けている。『藤壺の宮』かと思い、一瞬、どきりとしたが、まぎれもなく辰吉だった。

――相変わらず、美い女だぜ。

つい見惚れていた。参拝する男たちは、ほとんど例外なく、辰吉を振り返って行く。辰巳芸者は素顔と気っ風のよさで勝負するのが常だが、今日はうっすらと白粉をつけ、紅をさしていた。手持ち無沙汰な様子で佇み、料理屋の奥にちらちらと目を走らせている。連れがい

るのかもしれない。

「ずいぶんと、めかしこんでやがるな」

弥十郎の呟きに、宗順がすかさず答えた。

「そりゃそうでしょうね。どうやら見合いのようですから」

「え？」

別の意味で、ふたたびどきりとする。少し遅れて若い男が見世から出て来た。垢抜けた品いやしくない風情で、鰡背という言葉をそのまま姿にしたような感じがする。不気味なほど上機嫌の宗順、料理屋の宴、辰吉の見合いときて、ようやく得心した。

――宗順め。知っていやがったな。

これを見せるために、昼の宴をもうけたのだ。先刻までちりちりしていた首の後ろの疼きが、今はぴたりとやんでいる。宗順のねじ曲がった性根について、今更、あれこれ言っても始まらない。

「それで？」

弥十郎は促した。知っていることは、すべて吐き出しやがれ、という威嚇を視線にこめている。悪びれたふうもなく、宗順は告げた。

「名は後藤龍吾、年は二十五、あたしや旦那と同い年です。幕府お抱えの大工の跡継ぎだと

か。もちろん棟梁の跡継ぎですよ」

「ほう、幕府の大棟梁の後藤家か」

思わず驚きの声が出る。公儀大棟梁の後藤家は、百石と拝領屋敷を賜る身分。他の大棟梁家も名字・帯刀を許されており、全部で十一家あるとされている。貧乏御家人など比べものにならないほど恵まれている家だ。

「そいつはすげえや。似合いじゃねえか。辰吉、いや、お優羽か。気っ風のいい辰巳芸者だが、あいつは身持ちが堅えからよ。良縁だな」

ぐいっと杯を空ける。弥十郎たちに気づいた様子もなく、辰吉と龍吾は、〈二軒茶屋〉を後にして、鳥居の方に歩いて行った。互いの二親と仲人役だろう。後ろに六人の男女が続いている。

「ありゃ、男の方がホの字だぜ」

遠目であるにもかかわらず、龍吾が辰吉に向ける熱い眼差しが見て取れた。後ろのおまけがいなければ、手を握りしめていたかもしれない。辰吉に食いいるような眼差しを向けている。

「流石は旦那、恋の道には通じておられますねえ」

「『恋の道には』ってのはなんだ、気に入らねえな。おれは剣の道にも通じているんだよ。

いちいち癇に障るやろうだぜ」

「あたしにからまないでくださいよ」

肩をすくめて、宗順も鳥居の方を見やる。

「旦那が仰るとおり、見合いの相手は、お座敷帰りの辰吉姐さんを見て、ひと目惚れ。どうしても嫁にほしいと訴えたとか。芸者なんぞを嫁にできるかと、父親は反対したようですがね。調べてみると、これまた旦那の仰るとおり、男の噂などついぞ耳にしない。それではということで、今日の見合いになったと聞きました」

「本日はお日柄もよく、絶好の見合い日和ってか」

皮肉っぽく言い、唇をゆがめたが、声にはどことなく力がない。堂々と肩を並べて歩く二人が眩しかった。辰吉は遠離って行くのに、その美貌とうなじの白さが眼前にちらついている。自嘲するような言葉が洩れた。

「それにしても、百石の御用達大工とはな。恐れ入ったぜ。嫁入った後は、おいそれと口はきけねえや」

「なにを仰いますやら。緒方家はかの家康公より、御感状を賜りしお家柄。たとえ百石と雖も相手は町人ですからね。恐れ入るのは、向こうですよ」

慰めるように、宗順が言った。

御子孫永く疎略之儀これ有るまじく候

これが御感状の内容である。将軍であろうとも、勝手に改易できないことになっているが、はたして、今もそれが通用するかどうか。風呂の焚き付け程度にしかならない代物であることを、弥十郎はだれよりもよく知っている。

「は。御感状を掲げたところで、洟もひっかけられねえや。なんの役にも立ちゃしねえよ。十両で買うというやつがいたら喜んで売ってやらぁ。そんなことより、酒だ、酒。おーい、熱いの持って来い」

大声で告げ、鳥居の方をもう一度、見た。が、辰吉の姿は人波にまぎれてしまい、もうどこにいるのかわからない。

「いずれにしても目出度い話だ。祝いをやらねえと……しかし、あのはねっかえりが、おとなしく御内儀におさまるかね。威勢のいい男衆の手綱を取るのは、どうってことねえだろうがよ。あいつの手綱を取るのは、なかなか骨が折れると思うぜ」

「いいんですか」

探るように、宗順が目を覗きこむ。

「なにがだ」
「とぼけても駄目ですよ。旦那と辰吉姐さんが、わりない仲になっていたのは、承知の助。逢えば悪態をつき合っていましたが、逆にそういう仲だっていうふうに見えましたよ。気づかぬふりをしていましたがね。おまえさん、内心、穏やかじゃ……」
「宗順」
弥十郎は鋭く遮る。
「いいか、一度しか言わねえからよく聞け。妙な噂が立つと、せっかくの話が流れちまうかもしれねえだろ。つまらねえ話は二度と口にするな」
いつになく真剣な表情になったかもしれない。宗順も真面目な顔になる。
「わかりました。仰せに従いますよ」
と答えた後、「ですが」と話を蒸し返した。
「調べなくていいんですか、見合いの相手について。もしかしたら、性悪女でも囲っているかもしれませんよ」
「あったとしても、綺麗に片づけるさ。辰吉にぞっこんという感じだったからな。案ずることねえよ。おめえがよけいなことをすると、逆に向こうが怪しむかもしれねえ。なにもしねえことだ。それが一番さ」

「へえぇ」
宗順は、含みのある目を投げた。無理に抑えこんでいる苛立ちを刺激されて、弥十郎は爆発寸前となる。
「なんだ、その目は。言いたいことがあるなら言え」
「別になんでもありませんよ。ただ」
「ただ？」
「ずいぶんと、あっさり引くと思いましてね。ちょいと意外な気がしたんです。せめて、男の女関係ぐらいは、調べるんじゃないかと」
「辰吉も馬鹿じゃねえ。それぐらいはわかるだろうさ」
運ばれて来た熱燗を、銚子ごと取って、一気に流しこむ。
――『月に叢雲花に風』か。
いいときは長く続かない。本当にそうだと思っていた。

四

「それでは、旦那。あたしはここで失礼しますよ」

本所の屋敷近くまで来たとき、宗順が暇を告げた。時刻は八つ半（午後三時）ぐらいだろうか。かなり飲んだのに、弥十郎は妙に頭が冴えている。

「寄ってかねえのか」

「はい。野暮用を思い出しまして。明日にでもまた参りますよ。あ、そうそう。ひとつお訊きしたいんですが、〈桔梗屋〉においでになったのは、ひさかたぶりのことですか」

なにやら含みのある問いかけを聞き、とたんに警戒心が湧いた。

「今月は初めてだが……また蒸し返すつもりか、宗順よ。『藤壺の宮』にうつつをぬかしていたから、〈桔梗屋〉への足が遠のいたんだろうと、皮肉を言いたいのかもしれねえがよ」

「いえ、そうじゃありませんよ。ちょいとね。気になったもんですから」

「なにがだ」

弥十郎の問いかけには答えず、宗順は会釈を返して、離れて行った。今宵また千春からの文が届くかもしれない。探索役を買って出た割には、執着していないのが、引っかかっていた。

「ま、覗き屋まがいの供なんぞ、いねえ方がいいけどよ」

それでも少しの間、立ち去って行く悪友の後ろ姿を見るとはなしに眺めていた。辰吉が見合い、近いうちに祝言、その後は人妻。それらの事柄が繰り返し浮かび、いつになく気分が

沈んでいる。とはいえ、こんなところで黄昏侍をやっているほど暇ではない。

「さあて、稼がねえとな」

声になったのは、自分を鼓舞するためだろう。とりあえず、一度、屋敷に戻ることにした。母――多香女の小言と仏頂面を考えるだけで、廻れ右となりかけるが、顎を撫でる度に無精髭が指に引っかかり、不愉快になる。おまけに丸五日、同じ着物を着ているのだ。伊達男としては、すでに我慢の限界を超えている。

よし、と気合いを入れ直して、表門の横の潜り戸を開けた。

「母上。ただいま戻りました」

「お帰りなさいませ、弥十郎様」

玄関先を掃き清めていた下働きのおよねが、まず出迎える。ふだんなら亭主の徳兵衛も顔を出すのだが、使いにでも行っているのか、姿が見えない。二人とも多香女が初めて嫁いだとき以来、下働きとして奉公しているため、齢七十を過ぎていた。

「いつもご苦労だな」

さりげなく言って、弥十郎は、屋敷の奥を顎で指した。

「機嫌はどうだ？」

「多香女様でございますか」

と、およねは、掃除の手を止める。
「朝早くにお出かけになられました。小石川のお屋敷でございます」
「なんだ、いねえのかよ。それを早く言ってくれ」
とたんに勢いづいて、慌ただしく雪駄を脱いだ。多香女がいぬ間にと焦っている。さっさと身支度を整えて、さっさとここを出るのが得策。奥に駆けこもうとしたが、座敷から出て来た人影に気づき、足を止めた。
「兄上。お戻りになられましたか」
櫻井菜生が、やわらかな笑みを浮かべる。年は四つ下で二十一、昨年、腰物方の旗本に嫁ぎ、櫻井姓になっていた。弥十郎にとっては、まさに弁慶の泣き所。急いていた気持ちもさまざまな憂悶も、菜生の顔を見た瞬間、どこかに消えている。
「菜生、来ていたのか」
ほっとして、腰の物を手渡した。
「はい。京の干菓子を戴いたものですから、母上にも味わっていただこうと思いまして、ご機嫌伺いがてら参りました。兄上に母上からのお言伝がございます。戻り次第、小石川の屋敷に来るようにとの仰せでございました」
「これからか」

諦めまじりの呟きが出る。疑問の調子にならなかったのは、多香女の言伝は絶対だからだ。

笑って、菜生は申し出る。

「着替えのお手伝いをいたしましょう」

「そうしてくれると助かるが」

弥十郎は、妹の腹のあたりを見おろした。

「具合はどうだ？　悪阻などはひどくないのか？」

父の十兵衛が亡くなって早十二年、緒方家の若き主となって、母と妹を守ってきた。菜生が無事、嫁いだときには、腑抜けのようになってしまい、多香女に心配されたほどだが、先月、身籠もったことがわかり、緒方家は名実ともに春の訪れを迎えている。父親代わりを務めてきた身としては、当然のことながら、妹の体調が気になるところだ。

「少し悪阻はございますが、大丈夫でございます」

菜生は笑みを絶やさない。

「およね、お湯を沸かしてください。兄上、急がれた方が宜しかろうと存じます。小石川までは遠うございますので」

「うむ」

急かされて、渋々座敷に足を向けた。このまま菜生と一緒に、ゆっくりしたいのだが、そ

れをすれば多香女の怒りを買うのは必至。五日間、留守にしたという負い目もある。仕方なく支度を始めた。

さて、緒方家の家系は、いささか込み入っている。

母の多香女は緒方家に落ち着くまで、四回、嫁したことがあるのだ。それぞれの家に長男を残して、多香女の方から離縁するという、かなり身勝手なことを繰り返している。つまり緒方家は五度目の嫁ぎ先なのだが、惚れて、惚れて、惚れぬいた主人――緒方十兵衛が亡くなった後は、珍しく独り身を守っていた。

小石川の屋敷というのは、三度目に嫁した山田家がある場所。ちなみに夫たちは一度目に嫁した家、北町奉行所の与力を務める田中家の隠居、田中朝之助以外はみな早世している。女傑の多香女に精を吸い取られたというのが、弥十郎の考えだった。

「ご亭主殿は息災か」

髭を剃り終えて、問いかける。多香女は五男一女をもうけたわけだが、菜生はたったひとりの女子とあって、弥十郎だけでなく、他の兄弟たちもこの妹を慈しんでいる。亭主のことなど、さして知りたくはないが、無関心というわけにもいかない。妹を慮るがゆえの問いかけを発していた。

「はい。兄上にくれぐれもよしなにと申しておりました。また近いうちに、兄上が行きつけ

の〈瓢六〉で一杯、飲りたいと。今日は御役目でございますゆえ、お目にかかれないのが、まことに残念だと言うておりました」

腰物方というのは、将軍家の刀剣類を掌るのが主な役目である。菜生の夫の櫻井右近は、酒は飲らない、煙草も喫まない、さらに遊女を買うなど以ての外という、信じられないほどの堅物なのだが、「兄上、兄上」とうるさいほどに慕ってくれるのがいいのか悪いのか。

「お気遣い、いたみいると伝えてくれ。わたしより二つ年上であるものを、右近殿は、いつも緒方家をたててくれる。ありがたいことよ」

満更、世辞とは思えない言葉が出た。家格としては、あきらかに櫻井家の方が上。それでも右近の気配りのお陰で、菜生は惨めな思いを味わわずに済んでいる。こうやって気楽に実家を訪れられるのも、夫の理解があればこそ。まずまず順調といえるだろう。

「はい、お伝えいたします」

「初めての子は、実家で生むのが慣わし。そなたのためにも、腹の子のためにも、稼がねばならぬ」

「あまりご無理をなさらぬよう」

不安げに見あげた菜生は、輝くばかりに美しい。親馬鹿ならぬ、兄馬鹿の弥十郎は、天下一の美女と、心の中で呟いていた。

「そなたの美しさに心奪われて、右近殿は御役目がままならぬのではあるまいか」
「まあ、兄上ったら……大丈夫でございます。お酒を飲んでお帰りになられたことは、母上には内緒にしておきますゆえ」
くすくすと笑われてしまい、弥十郎は慌てた。
「そんなに臭うか」
「小石川に着く頃には抜けましょう。お待ちください。今、白湯をお持ちいたします。それとも酔いざましには、柚子湯の方が宜しいでしょうか」
「さよう、柚子湯の方がよいやもしれぬな」
「畏まりました」
「あ、待て、菜生。わたしに、文か使いが来なかったか」
「参りました」
何度目かの微笑には、菜生ならではの上品な色香が加わっている。女の方からの文でございましょう、わかっておりますよ。という意味ありげな笑みになっていた。
「文は確かに参りました。ですが、母上がお持ちになられましたので、ここにはございませぬ」
「どうしても、わたしを迎えに来させようという魂胆か。いや、待てよ。そうか、宗順のや

つ……なるほど、そういうわけか」

帯をきつく締めながら、ひとりごちる。おそらく宗順は、多香女が文を持ち去ったことを知っていたに違いない。小石川まで往復するとなれば、今宵の逢瀬は無理と判断し、さっさと姿を消したのだろう。

「そういえば、秋山様はいかがなされたのですか」

「どこに行ったのやら、わからぬ。供のお供役をするのは面倒だと思ったのであろう。どこかの巣穴にでも潜りこんだか。わたしも宗順にならいたいところだが」

「いえ、兄上、それはなりませぬ。徳兵衛の供だけでは、わたくしも案じられます。近頃は、なにかと物騒でございますゆえ」

淑やかに一揖して、台所の方に行った菜生を、笑顔で見つめている。秋口には出産、つまり、金が要るのだ。ともすれば浮かびそうになる辰吉の白い貌を彼方へ追いやり、煙草盆を手に取った。

「おう、也寿」

縁側に腰をおろす寸前、裏口から也寿が入って来た。年は二十、与力の長男、田中市之助の小者なのだが、弥十郎と気が合い、一緒に動くことが多い。

「ちょうどよかったぜ。稼がなきゃならねえと考えていたとこさ。それは風来屋に用って面

だ。違うか」

煙草盆を置いて、縁側に座る。也寿も隣に腰をおろした。

「そのとおりでさ。向島の三囲神社の近くに住む隠居なんですがね。ひと月ほど、だれかに用心棒を頼めねえかと持ちかけられまして」

「竹屋の渡しの近くか」

「へい。もとは鼻緒問屋を営んでいたとか。小金を貯めこんでいるんでしょう。一月の末に一度、盗人に入られたことがあるんでさ。たまたまいなかったらしくて、無事だったようですがね。どうも近頃、だれかに見張られているような気がすると言いまして」

「願ってもないと言いたいところだが」

煙草に火を点けて、訊いた。

「幾らだ」

「二日で一分でさ。ま、相場じゃねえかと」

「ひとり暮らしなのか」

「違いまさ」

也寿は奥を見やってから、声をひそめて言った。

「ふるいつきたくなるような女っぷりの妾が一緒でさ。大年増ですがね。まあ、旦那好みの、

そりゃもう、へへへ、色っぽい女で」
　両手で悩ましげな曲線を描き、足りない表現を補おうとしている。弥十郎はつまらなさげに鼻を鳴らした。
「おまえの話は信用できねえ。三十年前の大年増なんじゃねえのか」
　口ではそう言いながらも、心はすでに傾いている。隠居の目を盗んで、あのあたりの船宿でしっぽりというのも悪くない。どんな女だろうと、にやにやし始めていた。
「へへ、決まりのようで」
　読まれてしまい、多少、臍を曲げる。
「まだ決めたわけじゃねえ」
「引き受けてくださいよ、頼んます。明日にでもご案内いたしますんで」
「ひと月ってのがな。長すぎるような気がしなくもねえ」
「昼間はいなくてもいいと言ってるんでさ。旦那の足なら、さほどかかりませんや。夜だけですぜ。色々と物入りなんじゃ、あ、菜生様」
　慌て気味に、也寿は立ちあがり、ぺこりと頭をさげた。
「おいでになられていたんですか」
「ええ、母上のご機嫌伺いです。どうぞ」

置かれた湯飲みからは、柚子のよい薫りが立ちのぼっている。也寿がくんくんと鼻をうごめかした。

「この時期に柚子ですか」

「柚子の皮をだな、からからに干して、擂り潰すのさ。お袋は億劫がってやらないが、菜生はまめやかゆえ、右近殿は幸せ者よ。我が家もお裾分けしてもらい、こうやって、柚子湯が飲めるというわけだ」

これから小石川か、と、考えるだけで、うんざりしてきた。動きたくないという気持ちを、無理に奮い立たせる。

幸せのお裾分けをもらったつもりになって、重い腰をあげた。

五

小石川の山田家は、母にとっては、三度目の嫁ぎ先になる。

三男の山田三左衛門は三十五歳で通称、三左。妻の里尾は三十歳。二百俵十五人扶持の馬預という御役目を賜っている。厩方役人の配下で若年寄の支配下に置かれているが、ご多分に洩れず、暮らし向きは厳しい。

――そのうえに、子沢山ときてやがる。

弥十郎は、山田家の門前で足を止めた。時刻は六つ半（午後七時）ぐらいだろうか。火がついたように泣く子供たちの声を聞き、潜り戸を開けるのを躊躇している。子供は確か十歳を頭に、五人、いや、六人だったか。そう、去年の暮れにまたひとり生まれたから、全部で六人だろう。男だったか、女だったか。弥十郎はろくに憶えていない。

「弥十郎でござる。失礼つかまつる」

声を張りあげたが、赤児の泣き声に掻き消されてしまい、だれも出て来なかった。仕方なく自分で潜り戸を開け、中に入る。母屋からはひっきりなしに、子供たちの叫び声が聞こえていた。まるで嵐のような騒ぎである。

――どうせ、また、くだらねえ相談事に決まってるのさ。

玄関先で呼び掛ける気になれず、裏庭の方にまわった。そこでも赤児の泣き声が、響きわたっている。月明かりに照らされて見えたのは、赤児を背負い、井戸で褌らしきものを洗う男の姿だった。

「よしよし、泣くな、今、取り替えてやるゆえ、ちと待て。これを洗うておかぬと、明日の褌が間に合わぬ。父も頑張っておるのだ、おまえも耐えろ」

山田家の主、三左衛門が、ぶつぶつ言いながら、洗濯に勤しんでいる。中肉中背、弥十郎

とは血の繋がりをまったく感じられない凡庸な容姿の持ち主だ。武術は大の苦手、取り柄は襁褓洗いが上手いこと、ぐらいかもしれない。

「三左殿」

小声で呼び掛けると、はっとしたように顔をあげた。

「弥十郎」

鬢を乱したその姿には、所帯やつれがくっきりと刻まれている。絶対にこうはなりたくないという侍の姿であろう。実際の年よりも、十ほど老けて見えた。

「来てくれたか。母上が、今か、今かとお待ちになられておる。緒方家の主が来るまではと申されたゆえ、なにも話しておらぬのだ。いや、母上はおまえを大事にしておるな。羨ましいことよ」

三左衛門は、多香女の裏をまったく読めない男。面倒なことはすべて弥十郎に押しつけようという、母の考えには気づいていない。

「まあ、大事にされすぎていると言えなくもありませんが」

自嘲気味の言葉を返したが、通じる相手ではなかった。

「近頃は、ますます十兵衛殿に似てきたではないか。それゆえ、母上は愛おしくてならぬのであろうな」

よっこらしょ、と、立ちあがる様子がまた爺くさい。見かねて、弥十郎は背中の赤児を抱きあげた。

「わたしが」

「お、すまぬ」

おぶい紐を外して、三左衛門はぐぅっと腰を伸ばした。後ろに背中を反らしながら、自分で肩や腰を叩いている。弥十郎が抱きあげたとたん、赤児はぴたりと泣きやんでいた。三左衛門が苦笑まじりに呟く。

「こやつ、面食いのようじゃ。色男に抱かれるやいなや、泣きやむとはな。そのうち『弥十郎様のところへお嫁に行く』などと、言い出すやもしれぬ」

「ほう。この子は女子でござるか。確か六番目のお子でございましたな」

「七番目だ」

と、答える表情が哀しげであった。子を作るぐらいしか楽しみのない男と、自虐気味に思っているのかもしれない。実際のところ、そうなので、返す言葉がなかった。

「ははは、七福神にあやかって、七人でござるか。賑やかでよいではござらぬか」

「賑やかすぎて、困るほどよ。実はな、弥十郎。折り入って相談したき儀があるのじゃ。里尾をまじえての話の後、二人きりで話したい。よいな」

「は」

いやだが、頷くしかない。三左衛門は腰を叩きながら、ふたたび井戸端に屈みこんだ。

「わしは、これを洗い終えてから行く。おまえは先に中へ行っていろ。ああ、ついでにその子の襁褓を取り替えておいてくれ。いずれはおまえも子を持つ親になるであろう。我が家で稽古をしておくのも悪くあるまい」

「はあ」

これまたいやだったが、仕方なく赤児を抱いて、勝手口から中に入る。座敷の方から台所に来た里尾が、大きく目を見開いた。

「まあ、弥十郎様」

手を口もとにあて、艶然と笑みを浮かべる。夫は所帯やつれしているが、妻は今からでも二、三人、生めそうな力に満ちていた。精力的で野心家、ついでに言うと浮気性。赤児を抱きかかえる弥十郎の手に、そっと手を添えた。

「弥十郎様がおいでになられて、喜んでおりまする」

だれが喜んでいるのか、濡れたように光る目に、ぞくりときた。

「襁褓を取り替えろと、三左殿に」

弥十郎は板場にあがって、里尾に赤児を手渡した。今度はきつく手を握りしめられたが、

素知らぬ顔で訊ねる。
「母上はどちらでございますかな」
「奥におられます」
ちらりと奥を示してから、小首を傾げて、流し目をくれた。無意識なのかもしれないが、こういった仕草のひとつにも、男を誘うような媚が感じられる。弥十郎が応じればすぐにでも、となるかもしれない。
――山田家は、代々、男が早死にする家系やもしれぬ。
そんなことを思いつつ、奥の座敷に足を向けた。あちらからも、こちらからも、幼子の叫び声や泣き声が、わんわんと響いてくる。その声に掻き消されてしまい、わからなかったが、多香女の声もまざっていた。
「ええい、座らぬか。これ、筆で遊んではならぬ。なにをしておるのじゃ、墨を舐めては、ああ、やめぬか、これ、大事な半紙を破いてはならぬというに」
破れた半紙が宙を舞い、墨が障子や畳に飛び散り、墨だらけになった子供が右往左往して、座敷は惨憺たる有様になっていた。多香女は書の達人であり、その書は一枚、三百両の値がつくとも言われているのだが、幼子相手では、ただの子守婆である。
「お婆様。もっと半紙をください」

「あたしは墨を摺りますから、お婆様、墨をくださいませ」
子らの言葉に、眉がぴくりとあがる。
「何度、言うたらわかるのじゃ。わたしは『お婆様』ではのうて、『多香女様』じゃ。三左と同じで憶えが悪いのう。よいか。二度と言うてはならぬ。二度とその呼び方をしてはならぬ。わたしはそなたたちの……」
「お婆様！」
全員の声が綺麗に揃った。
「……」
流石の多香女も、黙りこむしかない。笑いを嚙み殺している弥十郎に気づき、怒りの矛先を向けた。
「遅いではないか。なにをしていたのじゃ」
「申しわけありませぬ」
仔細は語らず、深々と頭をさげる。里尾が入って来て、墨だらけの子らに告げた。
「さあ、そろそろ寝む時刻ですよ。こちらへおいでなさい。多香女様と父上は、大事な話があるのです」
はーいと答えて、ひとりずつ多香女に暇を告げる姿は、本当に可愛らしい。が、応じる方

は楽ではないようだった。
「やれやれ、この家は疲れるの。一気に年取った気分じゃ」
ぼそりと呟く。すかさず弥十郎は返した。
「気分ではなく、お年でございますれば、お疲れになるのは当然かと」
「……」
睨みつけた多香女の目を、怖れるふうもなく受け止める。推定年齢、六十四、そろそろ本当の年を正直に仰られてはいかがでござるか。真っ向勝負をかけられては、ごまかすしかないと思ったに違いない。
「蓮の花の薫りじゃ」
露骨に話を変えた。ひくひくと鼻をうごめかしている。
「今はまだ三月、ちと早すぎるような気がしなくもないが、かなり上等な香のようじゃ。姿を消していた五日の間、我が倅殿は頑張っていたようじゃな」
右手を突き出して、催促する。目や耳は言うに及ばず、文字どおり、鼻が利くのだ。よけいなことを嗅ぎつける傾向がなきにしもあらずだが、今回は見込み違いという感じがする。
「いつも、いつも、わたしの懐に小判が入っていると思わないでください」
軽く母の掌を叩き、「それにしても」と続けた。

「母上は本当に鼻が利きますな。若さの証でございましょう。感服つかまつりましてございます」

「ふん。小判がないゆえ、世辞でごまかそうという腹か。そなたがどこぞで蓮の花の薫りに埋もれている間、我が家の米櫃は空になってしもうたわ。ひもじくてたまらぬゆえ、こうやって三左の夕餉に呼ばれたのよ。倅の稼ぎが少ないと、母はしなくてもよい苦労をせねばならぬ」

「母上は人の三倍ほど召しあがられますからな。稼いでも、稼いでも、追いつきませぬ。いっそここに、子守婆として住みこまれてはいかがでござるか。楽ではないとはいえ、山田家は二百俵十五人扶持。貧乏御家人よりも、ましなのではなかろうかと」

「子守女じゃ」

しっかり言い直したうえで、ふたたび睨みつけた。

「世の中のことに疎い倅殿は知らぬようだがの。物が高直になっておるのじゃ。わたしがよく食べるからではない」

「そういうことにしておきましょう」

聞き流そうとしたが、そうはさせじとばかりに、多香女は懐から藤色の文を取り出した。

弥十郎は素早く取りあげようとしたが、

「ならぬ」

まさに紙一重の差で、母は懐に戻した。

「今時、わざわざ染めた紙、さよう、料紙を使うとは、なかなか風流な女子じゃ。近頃、度々、届いておるようじゃが、さあて、倅殿はこれをどうするかの」

文がほしければ銭を出せと、もう一度、右手を突き出した。この親にして、この子あり、か。白旗をあげ、弥十郎はわずかな銭を母の掌に載せる。

「たったこれっぽっち？」

「下々のような言葉づかいをなさらないでください。それが五日間の稼ぎです。物の値があがっているとなれば、節約が大事。無駄づかいなさらぬよう、お願い申しあげまする」

「今の言葉、そのまま、そなたに返すぞ」

ぴしゃりと言われてしまい、多香女に軍配があがる。この母に勝てるのは、泣く子だけかもしれない。奥座敷から聞こえてきた泣き声を遮るように、多香女は叫んだ。

「ええい、三左、早うせぬか。話がないのであれば、われらは帰るがよいか」

激しい苛立ちで、こめかみに青筋が浮かびあがっている。三男一家の相談事など放っておいて帰りたい。母子は同じことを思っていた。

六

「そなたは、内気で気張りがないうえ、要領が悪く、口下手。ようも御役目が務められるものじゃと、わたしは常々不思議に思うている。まあ、身体だけは丈夫じゃがの。子作り以外の取り柄はなし、と、八人目ができたという話ではなかろうな」

多香女は不機嫌さをあらわにしている。

「母上。いささかお言葉がすぎるのではないかと思う次第。もっとも、また子ができたという話であれば、すぐに帰りますが」

窘めるつもりが、弥十郎もつい言葉がきつくなっていた。藤色の文に記されていた逢瀬の刻限は、とうに過ぎている。邪魔をされて、母以上に虫の居所が悪くなっていた。

「はは、ははは、いや、母上も弥十郎もお疲れのご様子。さりながら、御役目に関しましては、ご案じなさいませぬよう。近頃は上役への報告書すらまともに書けぬ者が多うござってな。それがしの書の腕前が役に立っているのでござる。これすなわち、母上のご指南の賜物と思い、ありがたく思うておる次第」

三左衛門は深々と頭をさげた。が、多香女は鋭く睨み返している。ありがたいと思うなら

態度で示せと、その眼光に切迫した緒方家の状況をこめていた。

「失礼いたしました」

いち早く里尾が気づき、さりげなく多香女に手渡した。そのやりとりを見て、三左衛門は遅ればせながら得心したような顔になる。すべてにおいてこれでは、多香女ならずとも厳しい言葉が出ようというものだ。それでも金の包みを懐に入れて多少、落ち着いたのかもしれない。

「それで」

多香女が促した。

「此度は何用じゃ」

「実は」

そう言ったきり、俯いてしまった夫に代わって、里尾が横から口をはさむ。

「奉公に出たいのでございます。『御乳持』の御役目でございます。幸いにもわたくしは、あふれるほどに乳が出ますゆえ」

誇らしげに胸を張ったが、弥十郎と多香女は顔を見合わせずにいられない。

――またか。

どちらからともなく吐息をついていた。『御乳持』の奉公先は、大名家や旗本で、呼び名

のとおり、生まれた赤児にお乳を与える役目である。世話をするのは御乳人と呼ばれる女であるため、御乳持は乳母ではない。雇われることが決まった暁には、年四十両五人扶持が与えられて、さらに衣裳代が十五両、支度金が十両と、台所が厳しい旗本にとっては、割のいい仕事なのだった。毎年のように子を生んでいる里尾は、今までにも二度、御乳持役を務めたことがある。

「借金がまだ残っているのです。わたくしも三十になりました。『御乳持』が務められますのも、これが最後になるやもしれませぬ。今一度、ご奉公をして、少しでも借金を減らしたいのです」

山田家のためなのだと、必死に訴えていた。だが、弥十郎と多香女は知っている。二度のご奉公が、二度の不倫騒ぎを招いたことを。

「わたしはこの家の主ではない」

多香女は、冷たく突き放した。弥十郎も頷きたかったが、それでは相談役にならない。金子の分ぐらいの役目ははたさねばと、風来屋の気持ちになって問いかける。

「三左殿にお訊ねしたい。母上とわたしを招いたのはすなわち、あまり気乗りしないからだと思いますが、いかがでありましょうや」

そうだと答えやすいように、三左衛門が口にしにくい部分を敢えて問いかけに変えた。た

ったひと言、告げればいいだけであるのに、それができないのか。

「う、いや、そ、それは」

口ごもり、落ち着きなく目を泳がせる。本当は奉公に出したくないが、借金を減らしたいという欲もあるため、悩んでいるのだろう。とても多香女の子とは思えない。優柔不断とは無縁の母は、忌々しげに舌打ちする。

「そなたがなさけないゆえ、里尾殿は」

流石に憚られたらしく、そこで言葉を止めた。また浮気するのではないか。奉公先の主や家臣と男女の仲になって騒動になるのではないか。はっきり言ってやりたいが、これまたそれを言ってはというやつである。

「いつから奉公するおつもりなのか」

弥十郎は、里尾に視線を向けた。

「来月でございます。いえ、まだ奉公できると決まったわけではございませんが、内々にお知らせを受けております」

内々と言っているが、ほぼ決定ということであるように思えた。月が変わるまで、あと十日ほどしかない。ぎりぎりになって相談の場を持つのは、型どおりであるように思えてならなかった。

「ご奉公先は？」

気のない問いかけになった。多香女は隣でそっぽを向いている。すでに決まっている話を、今更、相談してどうなるのか。態度で不満を示していた。

「はい。此度の奉公先は、水戸家に縁のある家でございまして、年五十両という良い条件をいただきました。支度金も十五両、頂戴できる由にございます」

「ほう、水戸家とな」

御三家の名を聞き、母の顔に皮肉な笑みが滲む。

「よい話ではないか、三左。働き者の嫁女を持って、そなたは幸せ者よ。多少のことには目をつぶり、さっさと借金を返すがよい。さすれば里尾殿も、奉公がどうのこうのと言えなくなろう。よし、それで決まりじゃ」

「い、いえ、母上」

弱々しい訴えは、ひと睨みされて、終わる。ちらちらと弥十郎に視線で助けを求めていたが、反対しても無駄であるのは、里尾の表情に表れていた。とはいえ、お灸を据えておく必要がある。

「里尾殿には、証文を書いていただきたい。もし、万が一、以前のような騒動が起きたときには、三左殿に二百両、払っていただくというのはいかがでござろうか」

「に、二百両!?」

驚いたのは受け取る方で、払う方はさらりと答える。

「承知いたしました。騒ぎなど起きるわけがありませぬ。ゆえに、千両でもかまいませぬ。どうせなら一万両とでも記しましょうか」

これではとうてい太刀打ちできない。山田家の主は項垂れるしかなかった。話が終わったと見るや、多香女が腰を浮かせる。

「駕籠を呼べ。わたしは帰るぞ」

「今からでございますか。今日はこちらで厄介に……」

弥十郎の訴えは、赤児の泣き声に遮られた。里尾が急いで奥座敷に向かい、多香女は渋面になって、立ちあがる。帰るという意思を示すためなのか、そそくさと玄関の方に向かった。

「弥十郎」

三左衛門が、なさけない声をあげる。

「わたしはいやなのだ、里尾を奉公になど出したくない。されど……実は、高田馬場において、流鏑馬の稽古をするよう、通達がなされてな」

ぼそぼそと愚痴まじりの話を口にした。馬預が馬に乗れぬでは話にならぬ、弓を使えぬようでは侍とは言えぬ。上様の御前にて、勇姿をご披露しようではないか。

「と、新しいお頭様が仰せになられたのじゃ」

陰々滅々たる声音と表情に、聞いている方まで、気持ちが暗くなってきた。三左衛門は馬を操るのが大の苦手、弓においては、ろくにさわったこともないという文官である。先刻は書の腕前で恙なく奉公していると答えたものの、頭役が変われば、今までどおりとはいかなくなることもあるのだろう。母には話せぬ事柄だったに違いない。

「袖の下を使うしかありませぬな。そのうえで、病届けを出して、奉公をしばらく休むしかありませぬ」

打開策を提案した刹那、弥十郎は「なるほど」と得心していた。それゆえ、里尾の奉公を認めるしかないという話なのだ。袖の下を稼ぐため、御役目のため、御家存続のため、妻の浮気には目をつぶり、と、奉公も楽ではない。

「どうすればいいのであろうな」

泣きそうな三左衛門の代わりとでも言うように、奥座敷で赤児が大きな泣き声をあげる。と同時に玄関の方から多香女が駆け戻って来た。

「雨じゃ、弥十郎。雨が降ってきてしもうた」

拳を握りしめて、やり場のない怒りをぶつける。

「そなたのせいじゃ。もっと早う来れば、降る前に帰れたものを」

「申し訳ございませぬ」

とにもかくにも頭をさげねば、収まる話も収まらなくなる。雨戸を打つ雨音と赤児の泣き声が、次第に大きくなってくる。

春の嵐になりそうな予感があった。

第二章　財宝娘

一

雨がやむのを待ち、本所の屋敷に戻ったときには、夜が明けていた。

「疲れた」

いつになく、多香女はげっそりしている。月が変われば夏になるが、昨夜は大雨になったせいか、思いのほか冷えこんでいた。母子は順番に湯に入り、冷えた身体を温め、茶の間で朝餉を摂っている。

「しかし、あれですな。三左殿も苦労が多い。里尾殿の浮気癖は生来のもの。山田家の嫁女は、その道に達者なようで」

皮肉たっぷりの言葉を投げたが、動じるような母ではない。

「そなたはなにか勘違いしているようじゃ。わたしの場合は浮気ではない。いつも本気であ

ったわ」
「なるほど。ものは言いようで」
「なんじゃと？」
「いえ、こちらのことです」
と、三杯目のお代わりをしようとしたその手が宙で止まる。空の丼を見る多香女の目に、殺気が走ったからだ。
「相変わらず、よう食べるのう。昨夜、そなたから貰うたわずかばかりの銭は、みな米代に消えてしもうたわ。その大事な米がみな、そなたの腹に消えるわけか。明日からなにを食べればよいのであろうな」
「……」
弥十郎は箸を置くしかない。せめて、茶だけでもと思ったが、ふたたび睨みつけられてしまい、早々に腰をあげる。では、食後の一服と煙草盆に手を伸ばしかけたが、いち早く多香女が煙草盆を押さえた。
「稼がぬ者に憩いなし」
自己流の格言で、追い出そうとする。
「行け」

「一服ぐらい、よいではありませんか。也寿が来るんですよ。二日で一分の用心棒の口があると言うておりましたので」

「来るのを待っているようでは、明日の米などままならぬ。也寿の家に行かぬか、さあ、稼いで来るのじゃ。早う行け」

蹴り飛ばされるようにして、弥十郎は外に出た。大雨の後ゆえ、青く澄みわたった空が美しい。とはいえ、まだぬかるんでいる道を歩くのは、難儀なことであった。

「ふん、だれが也寿の家になんぞ、行くか」

思い出すのは、藤色の文。昨夜は逢瀬がはたせず、弥十郎は母以上に機嫌が悪いのである。懐手になって竪川の河岸をそぞろ歩いた。

――昨夜こそ、なにか頼み事をするつもりだったのかもしれねえ。

千春と名乗る女は、いったい、なにが目的なのか。宗順同様、弥十郎も風来屋への依頼ではないかと思っている。だが、名前も本名なのかどうかさえわからない。千春は言うまでもなく春を示す名。四月になると、千夏とでも名乗るのではなかろうか。

「そして、狐に化ける、か」

唇をゆがめて、二ツ目之橋を渡った。千春のことを考えているはずなのに、なぜか足は深川常盤町に向いている。小名木川に向かって、ぶらぶら歩きを続けていた。中小大名屋敷や、

旗本屋敷が多い区域だが、その隙間を縫うようにして、町屋が建ち並んでいる。表向きは船宿、あるいは料理屋の看板を掲げているが、密かに遊女を置くような、隠れ宿が多い区域でもある。あまり人気がいいとはいえない。

「まあ、弥十郎様」

角を曲がったとき、前方で声が響いた。船宿〈藤乃家〉の女将、おふじが、見世の前に立っている。船で出て行く釣り客を見送っていたのかもしれない。年は四十前後、芸者時代をしのばせるような華のある色香の持ち主だ。

「おう、女将。朝から忙しそうじゃねえか。商売繁盛でいいな」

「釣りに出るお客様のお見送りですよ。昨夜はこのひと組だけで、繁盛にはほど遠い有様です。三月に入ってから急に客足が落ちましてね。いやになっちまいますよ。弥十郎様こそ、どうしたんですか、こんな朝早くに」

おふじは、青い空を見あげて、続ける。

「また大雨になるかもしれませんね」

「うちの山姥に有り金残らず奪われたうえ、家を追い出されて宿無しよ。すまねえが、茶を一杯、くれねえか」

「お茶ぐらいでしたら、いつでもどうぞ」

見世に入った女将に続き、弥十郎も一階の帳場に腰を落ち着ける。こんな朝早くに、と、弥十郎も思っていた。

――辰吉が来るわきゃねえやな。

それでも気がつくと、つい玄関先を見やっている。そんな心を知ってか知らずか、

「富岡八幡宮に芝居小屋が出ているんですけどね。昨日が口開けだったんですよ。これが、まあ、初日から凄い評判のようで」

茶を運んで来たおふじは、巷の噂話を口にする。宮地芝居と呼ばれる芝居小屋で、三座の大芝居に対して、小芝居とも呼ばれるものだ。神社、つまりお宮の境内で興行するため、宮地芝居の名がついたとされる。櫓は上げられず、花道や廻り舞台の設置も認められず、引き幕の代わりに緞帳の使用だけが許されていることから、緞帳芝居とも言われた。

「人情ものか」

弥十郎は気のない問いかけを投げる。

「時代もののようですが、人情話も組み込んで、なかなか面白いとか。主役を演っている役者が、美丈夫だとも聞きました。昼前に一度、昼過ぎに一度、演っているようなんですけどね。噂が広まって、女客であふれているらしいですよ」

「お袋には、聞かせたくねえ話だ。好きだからなあ、美丈夫。宮地芝居だろうが、墓場芝居

だろうが、行きたいと叫ぶのは間違いねえ。いっそ墓場芝居の主役になってくれりゃいいのによ。顔を見りゃ、金、金、金だ。お袋にはおれの顔が、小判に見えるらしいぜ」

「墓場芝居なんてものが、あるんですか」

「真顔で訊くなよ、女将。冗談さ。墓場芝居の主役はすなわちってわけだ。お迎えが来てくれりゃ、おれも楽になるのによ」

苦笑した弥十郎につられて、おふじも笑ったが、二人とも今ひとつ話に身が入らない。口にしていいものかと、互いに慮っているようなところがあった。辰吉の見合い、相手は幕府お抱えの大工、じきに祝言となるのかどうか。

「女将」

「弥十郎様」

声が重なり、今度は二人とも苦笑した。

「先に言ってくれ」

「いえね、たいしたことじゃないんですよ。白魚のことなんですが、佃島のあたりでは、さっぱりだとか。今年は獲れないらしくて、大川の漁師と、諍いが起きているようなんです。ご存じかもしれませんが、白魚漁を許されているのは、ごくわずかな漁師だそうで」

「へえ、そうなのかい。ぜんぜん知らなかったぜ」

弥十郎の正直な言葉に、女将は少しだけ唇の端をあげる。

「実は、あたしも最近、知りました。佃島の白魚漁師は、大川や浅草川での漁はできない決まりらしいんですよ。佃島の白魚漁師の縄張りは、佃島周辺から千住大橋までと、定められているとか。でも、獲れないもんだから、佃島の漁師は、ついつい大川に行っちまうわけです。そこで諍いが、となるらしくて」

風来屋に仲裁の頼みかと思ったが、おふじは意外な話を持ちかけた。

「そこでご相談なんですが、多香女様に一枚、書を書いていただくわけには参りませんでしょうか」

急に言葉づかいが丁寧になる。

「噂によれば多香女様の書は、『千変万化、幽玄を招ぶ』と言われているとか。『鶯』と書けば、どこよりも早くお屋敷に鶯が舞い降りて鳴くそうじゃありませんか。『白魚大漁』とでも書いていただけば、佃島でも白魚が獲れるようになるんじゃありませんかね。白魚は今が旬、儲けどきなんですよ。多香女様の書を掲げれば、あるいは、と思ったんですけれど」

「お袋が招べるのは、死んだ亭主たちぐらいだと思うがな」

鼻で笑って、煙草の火を点けた。多香女は『墨相見』なる怪しげなことも時々やっている。墨の濃淡や筆の勢い、全体の雰囲気などを観て、昔や明日を当てるのだが、弥十郎はあまり

信じていない。

「ものは試しと言うじゃありませんか。佃島の漁師は、ほとほと困り果てているようなんですよ。藁にも縋る思いなんでしょう。多香女様の噂を聞いて、うちに相談に来たというわけです。いかがでしょうか。多香女様に、お話だけでもしてはいただけませんか」

「話ぐれえはしてもいいが、礼金を吹っかけられるぜ。自慢じゃねえが、おれの家の米櫃は空でな。礼に白魚をと言われても、肝心の飯がねえときてる。おい、女将、笑い事じゃねえんだよ」

「いえ、笑うつもりはないんですけど」

と言いながら笑っていた。

「弥十郎様が、面白可笑しく仰るから」

「笑うしかねえだろ。秋口には、妹のお産が控えているってのによ。いつも以上に金欠病だ。なんでもいいから仕事をしなきゃならねえんだが」

「ごめんなさいよ」

がらりと戸が開き、辰吉が入って来た。早朝であるにもかかわらず、芸者姿で、袋に入れた三味線を小脇に抱えている。心を表すような綺麗な眸と、匂い立つような色香が、いつも以上に胸に迫ってきた。

宙で目が合い、弥十郎は思わず見つめている。

二

「おや、旦那。珍しいじゃござんせんか。こんな朝早くに、帳場で主のような顔をして、あ、それとも昨夜はここに泊まったんですか」

ふだんどおりの変わらぬ口調に、なんとなくほっとする。

「いつも、いつも女将の厄介になれるかよ。たった今、来たばかりだ。たまにはお天道様を浴びねえとな。育つものも育たなくなっちまうからよ」

「身体だけでなく、おつむの方も育てていただきたいものですね。慣れないことをなさると、せっかくのお天道様が、隠れちまうかもしれませんよ。せっかく晴れたってのに」

「ああ、そうかい。雨が降るのも、物が高直になるのも、米櫃が空になるのも、おれのせいってか。なんとでも言ってくれ。どうせ風来屋は疫病神よ」

「あらまあ、どうしたんですか。すねるなんて、旦那らしくもない」

辰吉はにこやかに笑みを浮かべ、視線をおふじに移した。

「姐さん、すみませんが、向島まで船をお願いします。三囲神社近くの料理屋に招ばれてい

るんですよ。お大尽の娘さんが、『紐解』のお祝いとかで、豪勢な宴を開くらしいんです。昨夜の大雨で足もとが悪いでしょう。駕籠よりも船の方がいいだろうと思いまして」

紐解とは、幼児用の付け帯をやめて、普通の帯を着ける祝いのことである。いずれにしても、風来屋には縁のない宴といえた。

「いいねえ、昼から酒の飲み放題か。おれも招ばれたいぜ」

「なんなら幇間でもしますか」

「辰吉姐さんのお望みとあらばだがよ。ま、できるのは、せいぜい船頭役ぐれえだろうな。おい、女将。船頭は呼ばなくてもいいぜ。おれが辰吉を送って行ってやらあ」

「え、旦那が？」

一瞬、辰吉の眸に、喜びの色が湧いた。しかし、それはすぐに消えて、皮肉めいた笑みへと変わる。

「よほど困っていらっしゃるようですねえ。ですが、代金は決まった額しかお払いいたしませんよ。姐さんにたかって、礼金をせしめようなんて腹でいるなら……」

「中食を馳走してくれりゃいい。かまわねえだろ、女将」

「ええ、そりゃ、あたしは別に……でも、大丈夫なんですか、弥十郎様。船なんか操れるんですか」

「船頭、荷担ぎ、振り売りと、なんでもござれの風来屋よ。猪牙船を操るのなんざ、朝飯前さ。そら、行った、行った」

三和土に降りて、辰吉を外に追いやる。おふじの声が追いかけてきた。

「そうそう、弥十郎様。いただきものの嫁菜が沢山あるんですよ。嫁菜飯を作っておきますから」

「う」

と、弥十郎は戸口で立ち止まる。

「どうしたんですか」

辰吉が怪訝そうに振り返った。

「いや、なんだか胸のあたりが、ちくりとな、痛んだ」

「あら、なぜ？」

斜め下から見あげる辰吉を、我知らず抱き締めそうになる。朝陽を受けた桜色の頬と、薄く紅を引いた唇が、誘うように輝いていた。危うく動きそうになった両手を、弥十郎はかろうじて抑えつける。

「なんでもねえ。女将、旨い中食を頼むぜ」

おふじから渡された腰紐で、着物の袖を襷がけし、裾を尻はしょりして、見世から飛び出

した。船着き場に繋がれている猪牙船に、身軽に乗り移って、辰吉からまず三味線を受け取る。

「そら、揺れるから気をつけろ」

手を差し出して、辰吉を船に導いた。

「気持ちが悪いですよ、旦那。やけに優しいじゃありませんか」

「そうかい」

わざと揺らせば、小さな悲鳴をあげる。

「きゃっ」

「おっと、危ねえ」

にやりと笑い、辰吉を支えた。照れたようにつんと横を向くその顔が、また可愛らしい。握りしめた手にそっと力をこめたが、

「いつまで握ってるんですよ」

邪険に振り払われてしまい、弥十郎は仕方なく船頭役となる。おふじが不安げに船着き場で見送っていた。

「弥十郎様、大川に出るんですか」

「そのつもりだ」

「危ないですよ。昨夜の大雨で、大川は流れが速くなっていますからね。東に行って、横川から行った方が」

「おれは、大川から行きてえんだ」

おふじの忠告に逆らい、小名木川を西に進んで行った。風は穏やかで、振り注ぐ陽射しが目に眩しい。煌めく川面に川岸の山吹が映り、ところどころ水面を黄色く染めあげていた。行き交う人々は、みな忙しない足どりだったが、船の上にだけは心地よい静寂が満ちている。

――本当なのか。

弥十郎は心の中で訊いていた。

――辰吉。嫁に行くのか。あの男と夫婦になるのか。

深川永代寺の料理屋から出て来た若い男。辰吉と並んで歩く姿は、今の陽射しのように眩しかった。だれが見ても似合いの二人、町人ではあるものの、百石の公儀大棟梁の大工となれば、暮らしに困ることはない。

「上手いじゃありませんか」

辰吉が言った。

「船がひっくり返るんじゃないかって、姐さん、案じているふうでしたけど。旦那はなんでもできるんですね」

「言ったじゃねえか、おれは風来屋。頼まれれば、なんでもやるさ。幇間だって、なんだってやるぜ」

「あれは冗談ですよ。お侍様にそんな真似させられません。本当なら船頭役だって、畏れ多いことなんですから」

身分違いだと暗にほのめかしている、ように思えた。そんなことはない、どこかの旗本にでも仮親になってもらえば、辰吉は立派な武家女。緒方家に嫁入ることだって、ありえないことでは……。

「大川に出るぞ。つかまってろ」

声を掛け、ぐっと棹に力をこめた。流れに逆らわなければならないことに加えて、おふじの言葉どおり、昨夜の大雨によって水嵩がふだんより増している。細長い猪牙船はいったん速さに乗ると気持ちよいほど走るが、均衡を取るのがむずかしいうえに、舳先がわずかでも横を向いたら制御できなくなる。まずは慎重に新大橋の下を通り抜けて、両国橋へと進んで行った。

「ねえ、旦那」

辰吉が小声で呼び掛ける。

「なんだ？」

棹を操りながら、肩越しに振り返ったが、返事はない。辰吉は川面に目を落としていた。煌めく陽射しを受けた横顔は息を呑むほどに美しい。が、見惚れている余裕はなかった。思いのほか流れが速く、ともすれば、均衡をくずしそうになる。

「見るのとやるのじゃ大違いだな」

本音まじりの言葉に、辰吉が大声をあげた。

「ええっ、もしかすると、船を操るのは初めてなんですか」

「そんなとこだ」

「そんなとこだ、じゃありませんよ。風来屋と心中なんて、あたしはご免ですからね。世間様になんて噂されるか……ああ、信じるんじゃなかった。自分の間抜けさがいやになりますよ。いつも、いつも、騙されちまって」

その素直さが可愛いのさ。と、これまた心の中でのみ呟いた。右手に見えてきた寄州と呼ばれる中州にぶつからぬよう、細心の注意を払って、船を心もち左側に寄せる。すでに棹を操るコツのようなものを憶えていた。

「ええ、どうだい、おれの腕前は。なかなかのもんだろ」

得意げに振り向いて、どきりとする。辰吉の熱い眸に気づいたのだ。弥十郎の背中に注がれていた想いがあふれる……眸。

――辰吉。

弥十郎の視線を察したのだろう。

「自惚れないでくださいな」

ぴしゃりと言った。

「ほら、よそ見しないで、あっ、危ない。揺れるじゃありませんか。しっかりしてくださいよ」

「わかってるよ。お袋みてえに、ぎゃんぎゃん喚くな。早く老けるぜ」

「お言葉ですけれど、多香女様は、お若いですよ。太っ腹で面倒見がよく、気さくなお人柄だと評判です。お屋敷がお救い小屋のようになることも珍しくないとか。遊び歩いているどなたかとは、月とスッポンでございますね」

「は、冗談じゃねえや。だれのお陰で、お救い小屋ができると思っているんだよ。陰で泣いている『どなたか』がいるのさ。忘れるなってんだ」

「またむきになって」

くすり、と、辰吉の口もとがほころぶ。目の端に映っただけだが、唇に添えられた手の白さが瞼に焼きついていた。おそらく辰吉は、この綺麗な手のまま生きていくのだろう。自ら台所に立つのではなく、人を使う女主になるに違いない。

「ちょいと寄り道するぜ」
有無を言わせぬ口調で告げ、棹を操る手にいっそう力をこめた。
「え、どこ行くんですか、困りますよ、旦那」
辰吉の訴えは無視する。無言で両国橋の下を通り抜けると、河岸沿いに船を進めて行った。右手に石原橋が見えたところで、ぐっと右に曲がる。小さな石原橋を潜り抜けて、堀割のようになっている場所に船を運んだ。
右岸には武家屋敷の塀が続き、左岸には町屋が連なる場所である。
「行き止まりじゃないですか」
不満げに言った辰吉の眸が、左岸に留まる。大きな藤の木が二本、優雅に枝を広げていた。だれかが植えたのかもしれない。片方には藤色、そして、もう片方には白い花がちらほらと咲いている。
「まだ満開じゃねえが」
棹が流れないよう気をつけながら、弥十郎は腰をおろした。
「ずいぶんと大きな木ですねえ」
辰吉はうっとりと見惚れている。
「綺麗ですねえ。満開になったら、さぞ見事でしょう」

「その頃に、また『だれか』と来りゃいいさ」
と、弥十郎はだれかの部分に含みをもたせた。ごろりと横になり、辰吉の膝を枕にする。
「まあ図々しい」
そう言ったものの、動こうとはしない。行き止まりになった堀割は、大川のような急な流れもなく、静まり返っている。
ゆらゆら、ゆらゆら――。
船が揺れていた。

三

辰吉を送り、船頭役として、料理屋から膳の振る舞いを受けた弥十郎は、ふたたび猪牙船を操っている。
「本当に行きはよいよいだぜ。帰りはつまらねえや」
足りなかった朝餉の分は、料理屋の膳で補ったが、帰りはひとり。何度も名残惜しげに振り返っていた。
「三囲神社まで行くのならよ。也寿に用心棒の話をもっとよく聞いておけばよかったぜ。ま

たここまで来なきゃならねえ。難儀なこった」

いちおう鼻緒問屋をしていたという隠居の家を探してみたのだが、見つけられずに終わっている。それがよけいに徒労感を与えていた。辰吉がいなくなった船は、なにかが欠けた心のよう。弥十郎は面白くない。

「岡場所にでも行って、ぱーっと派手にいきてえところだが」

吉原と言わないあたりに、懐具合の寂しさが表れている。独り言ぐらい大風呂敷を広げてもいいではないか。自嘲せずにいられない。

「しけてやがら」

いっそ本当に船頭でもやって、幾ばくかの銭を得ようか。そんなことを思いつつ、吾妻橋に近づいたとき、河岸に人だかりができているのを見た。

「なんだ、なんだ、騒動か」

人の集まるところに稼ぎあり、弥十郎は急いで近くの船着き場に船を繋ぎ、河岸に飛び移る。手前に水戸家の下屋敷、小さな橋を越えて、武家屋敷がある場所だ。人だかりはその武家屋敷の前にできている。

「旦那」

野次馬の中から憶えのある呼び声が響いた。

「也寿」
弥十郎は駆け寄る。
「どうした、身投げか」
吾妻橋は別名、身投げ橋とも呼ばれる橋。夜の方が多いのだが、死にたいという衝動には、夜も昼もないのかもしれない。
「身投げじゃありません。刺された後、川に落ちたようで。田中様もじきにおいでになるんじゃねえかと思います」
集まっている野次馬を、也寿は「どけ」と十手で追いやる。左右に分かれた人垣を抜けて、弥十郎は亡骸のそばに屈みこんだ。
「まだ若えな」
年は二十二、三といったところか。身なりは町人ふうだが、堅気という感じには見えなかった。背中と胸に傷痕がある。背中から刺されたか、胸から刺されたか。血は洗い流されたらしく、あらたにあふれ出てくるようなことはない。死んでから時が経っていることを示していた。
「見覚えは？」
弥十郎は訊いた。

「見かけねえ顔でさ。後ろから刺されたんですかね」
「そうかもしれねえな。背中の傷痕の方が大きい。匕首かなにかが、根本までぐさりと突き刺さったのかもしれねえ」
どけ、どけ、と、別の小者の声が響き、田中市之助が現れた。中肉中背で年は四十五、北町奉行所の与力だが、おっとりとした気質で、なににつけても今ひとつ反応が鈍い。そのくせ口を開けば小言が飛び出すという、弥十郎にとってはいささか厄介な長男である。
「弥十郎」
弟の姿を見て、亡骸にちらりと目を向けた。
「おまえの知り合いか」
「違いますよ。たまたま船で通りかかっただけです。人だかりができていましたんで、覗いてみただけです」
「こんなところを、ふらふらとうろついていないで、母上のお世話をしろ。知っておるぞ。五日も屋敷を空けたそうではないか。お上より禄を賜る侍が、そんなことでどうする」
小言爺の本領発揮。だれよりも母を敬愛している市之助から見ると、弥十郎の大雑把な気質には、許しがたい部分があるのかもしれない。とはいえ、大雑把なればこそ、あの母と暮らせるのだ。さらに続きそうな文句を視線で遮る。

「兄上。まずは御役目を」

畏まって、頭をさげた。ちなみに弥十郎が「兄上」と呼ぶのは、この市之助だけである。どうせなら、おれも与力の家に生まれたかった。そうすればこんなに苦労しなくても済むのにと、いつも思っているのだが口には出さない。

「む」

市之助がひとまず、亡骸に気持ちを向けたので、弥十郎は野次馬のひとりになる。待ってましたとばかりに也寿が隣に来た。

「お屋敷においでにならなかったんで、〈藤乃家〉に行ったんですよ。へへ、聞きましたぜ、旦那。辰吉姐さんと船遊びに出られたそうで」

「船遊びなんて、優雅なもんじゃねえや。船頭役よ」

「ま、そういうことにしておきますよ。大川を船で流しておいでになる様子を、ちらりと拝見いたしましたが、言わぬが花ということで。それにしても、辰吉姐さんの話、本当なんですかねえ」

也寿は意味ありげに言い、弥十郎を見あげた。優に頭ひとつ分以上、背丈の差がある。市之助よりはずっと目端（めはし）の利く小者を、忌々しげに見おろした。

「おれが知るか」

「相手は乗り気だそうですぜ。明日にでも結納をと言っているらしいですがね。辰吉姐さんの方が、今少し時をくれと言っているとか。〈藤乃家〉の女将も気を揉んでいましたよ。どうするつもりなんだろう、と」

「辰吉も、もう二十だ。世間じゃ立派な年増女よ。話が来るうちに、決めた方がいいのさ」

さらりと言い、話を変える。

「そんなことより、用心棒の話だ、也寿。辰吉を送って、ちょうど三囲神社の近くまで行ったんだぜ。名前だけでも聞いておきゃよかったと、後悔していたところよ。稼がなきゃならねえからな」

市之助が立ちあがり、こちらに来る気配を見せた。話が長くなるのは避けたいというのが本音である。が、緒方家の主として、口にしなければならないこともあるのだ。

「兄上」

「なんじゃ」

「このような場でする話ではないことは、重々わかっております。されど、腹が減ってはなんとやら、まことに申し訳ないのですが、その、ちと米を都合していただけないかと思いまして。わたしはともかくも、母上にひもじい思いをさせたくありません。どうかお願いいたします」

小声でそっと囁いた。市之助は母想いの男、渋面になったが、否とは言わなかった。
「わかった」
「助かります。いつも申し訳ありません。なにかありましたときには、この弥十郎。及ばずながらお力に、あ、兄上。呼んでいますよ」
頼みさえ聞いてもらえれば、あとは用無しとばかりに、手をあげた小者の方へ背中を押した。と、目の端を白い貌がよぎる。千春が、微笑しながら会釈した。今日も藤色の着物姿で、武家女のような、町家の若女将のような、どちらとも言えない雰囲気を漂わせている。
「也寿」
弥十郎は言った。
「へい」
「すまねえが、家まで使いを頼む。お袋に伝えてくれねえか。『白魚大漁』という書を、仕上げてもらえねえかとな」
「白魚大漁？」
也寿は怪訝そうに眉を寄せる。
「なんのことですか、旦那。白魚ってのは、あれですかい。大川で獲れる魚の白魚ですかい」

「それ以外に白魚があるのかよ」
「いえ、ねえと思いますが……白魚のような手なんてことを言うんじゃねえか、なんてことを、あ、すみません。どうでもいいことですね。お屋敷には戻らねえんですかい。あっしは、多香女様が苦手なんですよ。できれば、使いの役目は」
「頼んだぜ」
「いえ、ですから、あの、旦那」
ぽんと肩を叩いて、也寿から離れる。目で誘われるまま、千春に付いて行った。弥十郎が繋いでおいた猪牙船の方に歩き、船の前で立ち止まる。
「お姿をお見かけいたしましたもので」
と、笑った。
「目立ちましたよ。弥十郎様は上背がおありになられるので、岸から見ても、すぐにわかりました」
船を目で指して、自分も乗りたいというような素振りを見せた。
「わかっているだろうが、この船は借り物でな。そろそろ返しに行かなきゃならねえ。深川常盤町までなら乗せてもいいが」
「かまいません。お願いいたします」

頷いた千春を乗せて、弥十郎はふたたび船頭役を務める。初夏を思わせる強い陽射しの中、船を出した。

四

「昨夜はすまなかったな。ちょいと野暮用ができちまってよ。文を読んだときには、日付が変わっていたというわけだ。せっかくの誘いだったってのによ。すまねえ」

棹を操りながら詫びた。行きは流れに逆らう運航だったが、帰りはその逆になる。しかし、流れに乗るのも簡単ではない。ともすれば思わぬ方向に流されそうになる船を操るのは、かなりの技を必要とした。内心、ひやりとしたりもするのだが、そんな不安はおくびにも出さず、涼しい顔を造りながらの船頭役となっている。

「お気になさらずに。なにか御用ができたのだと思うておりました。女子との約定（やくじょう）は、めったなことでは破らぬとお聞きしておりますから」

「ふん、つまらねえ噂が広まっているようだな」

いつものように、どこかの船宿でといきたかったが、手元不如意で誘えない。我ながらなさけない話だ。

——行きは辰吉、帰りは千春か。

いずれ劣らぬ美女であるのはあきらか、辰吉はさしずめ艶やかな牡丹、千春は着物の色を思わせる藤の花。ふだんであれば、たとえ船頭役であっても心弾む場面だったろう。が、珍しく気分が高まらない。

「……様、弥十郎様」

何度か呼ばれて、はっとした。

「お、すまねえ。ちょいと流れに気を取られちまってよ。なんだい」

肩越しに笑みを返したが、千春に軽く睨みつけられる。

「あの芸者さんのことでも考えておいでになったのですか」

切れ長の眸に、ほんの少しだけ嫉妬のようなものが湧いていた。楚々とした風情に見えるが、言うことだけはしっかり言い、あとは深くこだわらない。弥十郎はそんな印象を持っている。

——似たような台詞を昨日も言われたな。

苦い自嘲が滲む。〈桔梗屋〉のおもんに言われた言葉だが、あのときは、千春のことを考えていた。そして、今は辰吉のことを考えていて、図星を指されたわけである。これまたなさけないと思いつつ、答えた。

「いや、考えていたのは、千春と名乗っている女のことさ。本名なのか、年は幾つなのか。住んでいるのはどこなのか、とね。あれこれ考えていたってわけだ。おっと、わかってる」

口を開きかけた千春を、素早く制した。

「なにも訊かないという約束だ。言いたくなければそれでいい」

「まあ」

ふふふ、と笑い、続ける。

「先程、そのことについて、お訊ねしたんじゃありませんか。どうして、なにも訊かないのですか、気味悪くはないのですか、と。そうしたら、なにもお答えにならなかったので、呼び掛けたんです。本当に聞こえていなかったのですね」

「すまねえ」

弥十郎は苦笑を返すしかない。いかに上の空だったかを、自ら露呈したようなものだった。先刻、辰吉と藤の花を眺めた石原橋の近くに差し掛かり、よけい複雑な気持ちになる。

「どうも昨日から調子が出なくてな。ざまあねえや」

くだけた口調で言い、美しい芸者の面影を遠くに追いやる。石原橋を通り過ぎて、両国橋の方に船を進めた。

「もう一度、お訊ねいたしたく思います」

千春があらためて同じ問いかけを発する。

「確かにわたくしは、なにも訊かないでほしいと言いましたが、本当に気にならないのですか。どこの、だれかもわからぬ女子と」

曖昧に消えた語尾には、「閨をともにして」という言葉を続けたかったのかもしれない。

弥十郎は言った。

「気にならねえと言えば嘘になるかもしれねえが」

前置きして、告げる。

「おれは常々こう考えているのさ。男ってのは、生まれたときから母親という菩薩の掌に載っている。所帯を持てば今度は女房という菩薩の掌に移る。菩薩は仏だ。仏に逆らっても無駄だからな。じたばたしねえで、おとなしく流れに身をまかせるのさ」

それでいつも厄介事に巻きこまれるのだが、それもまた運命。無理に抗えば、よけい泥沼にはまる場合もある。女にはしょせん敵わない。

多香女と暮らすうちに、弥十郎が身につけた生き方だが、千春はどう思ったのか。

「一種の諦念でしょうか」

生真面目な言葉を口にした。

「は。そんなごたいそうなもんじゃねえや。二、三日、うちで暮らしてみるといい。おれの

気持ちがわかるだろうぜ。とにかくうちの山姥ときたら……」
「弥十郎様は」
千春が早口で遮る。
「関ヶ原の戦いで負けた豊臣家のことをご存じですよね」
意表を衝く問いかけといえた。なぜ、いきなり豊臣家の話が出るのか。常人であれば逆に問いかけるところだが、なにしろ多香女で慣れて、いや、慣らされている。
「ああ、普通程度にはな、知ってるぜ」
平然と応じた。
「もし」
千春はなぜか急に声をひそめる。大川を進む船の上だというのに、注意深くあたりに目を走らせた後、
「豊臣家の財宝が、どこかに隠されていると聞いたら信じますか」
ふたたび奇怪な問いかけを発した。話の流れはまったく読めないが、細かいことを気にしても仕方がない。
「信じねえよ」
と、唇をゆがめた。千春がさっと頬を強張らせる。

「ですが、もしかすると」
「あるかもしれねえな。宝の在処を記した絵図面でもあれば、まあ、探してみるぐれえはするかもしれねえが、と、待てよ」
ここで初めて、「もしや」と思った。
「千春殿。おまえさんの相談事ってのはそれなのか、ええ、豊臣の財宝の在処を記した絵図面でもあるってのかい」
思わず近づこうとしたが、ぐらりと船が傾いてしまい、慌てて元の場所に戻る。それでも低く腰を沈めて、千春の目に目を合わせた。
「そうなのか？」
「さあ」
どちらとも言えない笑みでごまかすのは、女の常套手段。財宝云々の話が出た時点で、すぐにぴんとこないあたりに、宗順曰く『笊男』の大雑把な気質が表れている。加えて黄金への執着心も浮かびあがっていた。緒方家の母子は儲け話に弱いのだが、懸命にそれを押し隠そうとする。
「興味がおありですか」
見透かしたような千春の言葉には、すかさず首を振った。

「いや」

そうだ、そんなもの、あるわけがねえ。そう思いながらも、「だが」と心が揺れている。本当に千春が、財宝の在処を記した絵図面を持っているとしたら……？

「この船は〈藤乃家〉という船宿のものなんだが、どうだい。白魚を肴に、一杯、飲らねえか」

あそこならつけがきくと、いじましいことを考えてもいた。なにをするにも金がかかる。そう、お宝を手に入れるためにも……。

「ご相伴いたします」

「よし、決まりだ」

現金なもので、とたんに、さまざまな憂悶が吹き飛んでいる。米櫃が空だと？　辰吉が嫁入りだと？　だから、なんだってんだ、矢でも鉄砲でも持って来いってんだよ。豊臣の財宝だぜ、お宝だぜ！

すでに半分、手に入れたような気分になっていた。小名木川に船を進ませて、鼻歌まじりに〈藤乃家〉の船着き場につける。

「女将、戻ったぜ」

船を繋ぎ、千春に手を貸して、船から降ろした。とそのとき、〈藤乃家〉の隣の船宿から、

五、六人の男たちが飛び出して来る。弥十郎と千春を取り囲んだ。

五

町人姿だが、目つきが鋭く、着物の袖から出た腕に彫り物をしている者もいた。町火消、あるいは鳶職といった気の荒い連中であるのは間違いない。

「なんだ、なんだい、人違いじゃねえのか、おい」

弥十郎は背中に千春を庇っている。見世から出て来ようとしたおふじに、来るなと目で合図した。

「おれは本所の御家人、緒方弥十郎だ。四十一俵二人扶持の貧乏御家人よ。おまえさんたちに怨みを買うような憶えはねえんだが」

言い終わらないうちに、全員が匕首を抜いた。間髪を入れず突き出された刃を、弥十郎は左に避けながら、手刀で相手の手首を打つ。と同時に膝で蹴りあげ、手荒く突き飛ばした。派手な音をたてて、男は川に落ちる。

「弥十郎様」

怯える千春を守り、次の刃を刀の柄で受け止める。すかさず鳩尾を突き、意識を失った二

人目を川に蹴り落とした。遣い手とわかって、残る四人は少し距離を空けたが、逃げる気はないらしい。弥十郎も鯉口を切り、前に出た二人に威嚇の一撃を浴びせかけた。

「女将、千春殿を頼む」

男たちが後ろへさがった隙に、千春の背を押して、女将の方に行かせる。女たちにも襲いかかるかと思ったが、四人の目はひたすら弥十郎にあてられていた。ひとりが無言で匕首を突き出して来る。

弥十郎は受け止め、弾き返しざま、男の手首を斬りつけた。手加減したつもりなのだが、深く切れたのかもしれない。

「ぎゃっ」

と、ひと声叫び、匕首を落とした。それを川に蹴り落としながら、次の男の刃を撥ねあげる。相手がさがったのを見るや、深く踏みこみ、横薙ぎに剣を振り払った。浅く斬りつけた一撃が、腹のあたりを切り裂く。切れたのは着物だけだった。

「……」

硬直した男の顔が、みるまに白っぽくなる。

「次は本気でいくぜ」

脅しが効いたのか。川に落ちた仲間を助けあげると、六人は薄暮に融けるように、姿を消

した。

「弥十郎様、お怪我は？」

おふじが駆け寄って来る。

「おれがやられるわけねえだろ」

刀を軽く一振りして、鞘に収めた。素早く周囲を見まわしたが、千春の姿が見あたらない。見世に目をやり、訊いた。

「おれと一緒にいた女は中か」

「あ、いえ、どうでしょうか。気がつきませんでしたけど、中に逃げこんだのかもしれませんね。見てきますよ」

弥十郎は念のため、連中が消えた方角に目を走らせる。やつらが戻って来るのではないか、さらに千春がそのへんに隠れているのではないか。二つの確認をするためだったが、近づいて来た人影は、およそ関わりのない人間だった。

「宗順」

「どうかしたんですか。やけに殺気立っているじゃありませんか」

女形もどきの坊主ではあるが、柳生心眼流という柔術の遣い手。現場に残った剣呑な空気を、一瞬で読み取ったのは流石といえる。

「てめえ、どこかで見ていたんじゃねえだろうな。終わるのを見計らって、出て来たような気がしなくもねえぜ」

「ずいぶんなことを仰るじゃありませんか。こう見えても、秋山宗順は男の中の男。そんな卑怯な真似はいたしませんよ。惚れた旦那のためならば、たとえ火の中水の中とね。飛びこんでお助けいたします。それで」

もう一度、気配を探るように首をめぐらせた。

「なにがあったんですか」

「鳶かなにかだろうぜ。気の荒そうな連中に襲われたのさ。おめえがもっと早く来ればよ。後を尾行けて、やつらの塒を突き止めることができたかもしれねえのに」

見世から顔を覗かせたおふじが、小さく首を振る。千春は騒ぎにまぎれて、姿を消してしまったようだ。

「おまけに十万両にも逃げられちまったぜ。どうしてくれるんだ」

「十万両とは、また大きく出ましたね。その逃げた十万両が、襲われたわけですか」

「さあて、どうだかな」

曖昧に答えて、〈藤乃家〉に入る。千春相手に差しつ差されつのつもりが、色気のない坊主相手となってしまい、楽しい宴とは言えない。それでもいつもどおり、二階に腰を落ち着

ければ、なんとなく浮きうきしてくる。遠くから聞こえてくる三味線の音に、耳を傾けながら、宗順の酌で杯を空けた。

「旦那、まださいぜんの返事を聞いておりませんよ。鳶のようだったという連中は、十万両目当ての賊だったんですか」

話を戻した悪友に、弥十郎は、考えながら答える。

「目当ては、おれだったように思えるんだがな。わからねえ。千春を脅すのが、目的だったのかもしれねえ」

「おや、十万両というのは、例の女のことだったんですか。それは残念。旦那の言うとおり、もう少し早く来ていれば、女の住まいや正体がわかったかもしれませんね」

「そういうことだ。女将、やつらの顔に見覚えはねえか」

肴を運んで来たおふじに話を向けた。

「いえ、あたしは……ですが、弥十郎様の仰るとおり、鳶のような感じでしたよ。何人かは彫り物をしていましたからね。年は二十二、三ぐらいでしょうか。いきなり匕首を出したので、吃驚しました」

「怖え思いをさせて、すまなかったな」

と答えた後、小鉢にいやでも目を吸い寄せられる。

「生の白魚じゃねえか」
「はい。佃島の漁師さんが届けてくれたんですよ。弥十郎様と入れ替わるようにして、船着き場から出て行きました。前金代わりだそうです」
「獲れねえと言っていたじゃねえか。そんな貴重な白魚を頂戴しちまっていいのかね」
「ご遠慮なく、どうぞ」
「その代わり、と続くのはわかってるぜ。也寿を使いにやったが、お袋は気紛れだからな。引き受けるかどうか」
「今度はなんの話ですか」
口を挟んだ宗順に、白魚騒動のことを話してやる。『千変万化、幽玄を招ぶ』と言われる多香女の書。はたして、白魚を招べるだろうか。
「なるほど。で、これが前金代わりですか」
宗順は、ちらりと意味ありげな目を投げた。前金代わりの部分を、一語一語区切ったそれが、皮肉まじりであるのを察している。
「なにが言いてえんだよ」
「いえ、別に、あ、そうそう。ここに来る途中、耳にしたんですがね。本所緑町の下駄屋、夜逃げしたらしいですよ」

「なに？」

訊き返しながら、記憶を探っている。本所緑町の下駄屋、さて、なんの話だったか。確かにどこかで聞いたような……。

「ああ、もう、これだから笊男はいやなんですよ」

焦れたように宗順が言った。

「昨日のことなのに、もう忘れちまったんですか。富岡八幡宮門前の〈桔梗屋〉で、女郎と一悶着あったじゃないですか。あたしは旦那から聞いたんですよ。それをけろりと忘れちまって」

「あ」

弥十郎はぽんと膝を叩いた。

「思い出したぜ、そうそう、〈桔梗屋〉だ。四十ぐれえの、名は、ええと、喜伝次だったか。下駄屋の主だ。そうか、夜逃げか」

手酌で酒を注ぎ、呟いた。

「逃げるってことはだ、借金だろうな」

「という話も耳にしましたが……まったく、もう、おまえさんは笊男だけでなく、木霊男でもあるんですね」

「木霊男？」
「これもわからないんですか。木霊ってのは、少し遅れるでしょうが」
「ああ、なるほど、それで木霊男か。おめえにしては、気の利いた異名じゃねえか。笊男よりはいいぜ」
　ははは、と笑ったその顔を、宗順はじっと見つめる。
「今度はなんだ？」
「いつも以上に鈍いと思いまして。よほど案じられる事柄がおありのようですね。心ここに非ずという感じですよ」
　冷ややかに睨めつけてから、耳もとに囁いた。
「やはり、気になっているんじゃありませんか」
「気になっているさ。豊臣の財宝と聞きゃ心が騒ぐってもんだぜ。十万両、いや、百万両かもしれねえ。宝探しは男の夢よ」
「美しい花嫁御寮こそが、真実の宝じゃないんですか」
　悪友に切り返されて、言葉に詰まる。珍しくまともな意見だったが、訊きながら弥十郎の真意を計っているようなところがある。本気じゃなかったのか、他の男に盗られてもいいのか。

「おれは黄金の方がいい」
自分に言い聞かせるような言葉が出た。
「千春を探してくれ、宗順。おめえもほしいだろ、黄金色のお宝がよ。面白くなりそうだぜ。まさか、あの女の口から、豊臣の軍資金云々という話が出るとは……」
「弥十郎様はおいでですか」
聞き覚えのある声が玄関で響いた。
「おう、徳兵衛。おれはいないよ」
とぼけた答えを返したが、多香女の使いとなれば、宴を切りあげるしかない。もったいないと白魚を食べてから、渋々座敷をあとにした。

六

またなにか騒ぎが起きているのかと思いきや、家は意外なほど静かだった。屋敷は闇と静寂に包まれている。しかし、弥十郎は用心深く、宗順に言った。
「様子を見て来てくれ」
「だらしないですねえ。自分の家じゃないですか」

裏木戸から中に入った宗順は、すぐに戻って来て、手招きする。特に問題が起きたわけではなさそうだ。

「母上。ただいま戻りました」

声を張りあげ、裏木戸の方から表門の方にまわる。夜になっても暖かく、いよいよ初夏という感じになっていた。開け放った座敷では、多香女が十歳ぐらいの娘に書を教えている。

「なかなか筋がよいのう。生きいきとして爽やかな字を書くではないか。まるでそなた自身のようじゃ。初世殿と申されたか」

「さようでございます、多香女様」

初世と呼ばれた娘は、はきはきと答えた。髪型や着物からして、武家の子であろう。弥十郎は廊下から座敷にあがり、二親の姿を探したが、それらしき者は見えない。が、手習いの邪魔をしてはなるまいと、座敷の廊下に腰を据えた。挨拶をしないことには、母の機嫌が悪くなる。

「あたしはあちらに」

茶の間を指した宗順に、無言で頷き返した。多香女と娘のやりとりは続いている。

「墨の美しさは、ただくろぐろとした黒さばかりではない。濃くても、淡くても、墨色の中に光がなくてはならぬ。その透明な光は、ちょうど子供の目のように、清々しく純粋でなけ

ればならぬのじゃ。そうでなくては、佳い墨とは言えぬ」

気持ち悪くなるほど優しい声だった。弥十郎は尻のあたりから悪寒が這いのぼるのを感じている。ものすごく機嫌がいいのか、おそろしく機嫌が悪いのか。こういう声を出すときは、このどちらかである。

――前者であることを祈るしかないが。

悪寒をこらえて、話が終わるのを待っていた。

「孔子曰く『思い邪しま無し』とか」

初世の言葉に、多香女は目を丸くする。

「いかにも、そのとおりじゃ。そなたの目は、まさにそれよ。あそこに控えている倅殿は、『邪しま』がありすぎて困るほどじゃがな」

視線を向けられたのを機に、頭をさげて、弥十郎は隣室に移る。茶の間で宗順と寛ぎたかったのだが、なんとなく多香女の目に、物言いたげな気配があるように思ったのだ。そんな姿を横目で見ながら、母はさらに続ける。

「さて、墨の話をしてきたが、書において一番大事なのは、墨ではない。さて、なんであろうな」

「紙ではありませぬか」

「さよう。やはり、そなたは賢いの。紙の中でも、わたしは特に唐の宣紙が気に入っておるのじゃ。そら、これよ」

畳に置いてあった一枚を取り、初世に手渡した。

「書に用いる紙は、古ければ古いほど使いやすいのじゃ。墨色が冴えて、紙にようのってくれる。ほのかに歳月の色を浮かべた紙というのが、墨にとっては最高の品。中でも唐の宣紙は、墨の色に敏感での。和紙ではとうてい出ない微妙な色合いや墨色の階調を、じつに忠実に出してくれるのじゃ」

「耳にしたことがございます」

初世は言った。

「唐の宣紙は、宣城で造られた紙という意味である由。藁から生まれるとも聞きました。造るのが非常にむずかしく、それゆえに貴重であるとも」

背筋をぴんと伸ばした姿は、まるでこの家の女主のよう。風格さえ感じられる。流石の多香女も押され気味だった。

「ほう、物知りじゃの」

ちらりと弥十郎を見たが、皮肉は出ない。

「わたしは、『無音の音』こそが、書の境地であると思うておる。音がない音という意味で

はないぞ、これは……」

「風の音、谷川の音、鳥や虫の声。これらは古来『無音の音』と言われているとか。善悪の考えがなにひとつない、そういう意味であると聞いた憶えがございます」

はきはきと初世が言葉を継いだ。弥十郎と多香女は顔を見合わせずにいられない。近頃の武家にしては珍しく、きちんと躾けられている。三男曰く「まともに報告書も書けない」という旗本に、爪の垢でも煎じて飲ませてやりたかった。

「さよう。先程、初世殿が言うた『思い邪しま無し』にも通じる境地やもしれぬ。わたしはちと倅と話があるゆえ、稽古を続けなされ」

「はい」

初世を置いて、多香女は置いてあった二枚の書を取り、こちらの部屋に来る。後ろ手に片側の襖を閉めた。全部、閉めると真っ暗になるため、明かり取りという感じで片方を開けておいたのだろう。

「也寿の言伝を聞いたゆえ、さっそくに仕上げておいた」

と、持っていた書を見せる。

「『白魚』と『大漁』でございますか。母上らしい豪快な字でございますな。白魚はまさに飛び跳ねているようで」

胃の腑のあたりを、つい押さえていた。食べたばかりの白魚が、飛び跳ねたように思えたのである。

「いかがしたのじゃ」

すかさず目を覗きこんだ母に、なんでもないと首を振る。自分ひとりで『前金』を腹に納めたことがわかれば、怒りを買うは必至。仕上がったばかりの書に話を向けた。

「なぜ、一枚の書にしなかったのでございますか。わざわざ二枚に分けたことに、なにか理由があるのでございますか」

「たかだか十両のはした金で、わたしの書を譲ることはできぬ。十両では貸してやるのがせいぜいじゃ。それゆえ色々と使いまわしができるようにと思うてな、二枚に仕上げた次第」

「……」

母の答えを聞いて、弥十郎はさっと頬を強張らせた。

――也寿め。また適当なことを言ったな。

礼金についてはいっさい告げていない。也寿もまさか白魚が礼金とは思わず、十両程度ではないかと踏んだのだろう。ここで真実を言えば、書を引っ込めるのは間違いない。

「色々と使いまわすと申されましたが、はて、どのように使うのでございますか」

書に気持ちを向けさせて、心の動揺や表情の変化を悟らせまいとする。いささか疑念あり

という目を投げたものの、仕上げた書を自慢したかったのかもしれない。多香女は得意げに胸を張る。

「鈍い倅を相手にすると、話が長うなって困るの。よいか。『白魚』を『鰹』に変えれば、今度は鰹の大漁を祈る書になるではないか。この方法であれば、『大漁』という書を何度も使える。どうじゃ、名案であろう」

「されど、墨を摺る手間、書く手間は、同じなのではありますまいか。さほどの倹約にはなりますまい」

「そなたは先を見る目がないのう。よう考えてみよ。一度、書けば、来年も使えるではないか。白魚だけではない、鰹や秋刀魚や鰯、鱚に鯛。大漁を願う気持ちは来年も同じじゃ。おお、我ながら名案じゃな、うん。書の貸し出し料を取れば、幾ばくかの銭が入る。そうじゃ、貸し出し料という策があったわ」

話しているうちに思いつくのは、多香女の癖。悪癖と言えるかもしれない。我が母ながら吝ん坊かつ俗物である。とはいえ、稼げない倅としては、下手な反論はせぬがよしと判断した。

「は。まことにもって、良い策であると」

神妙に畏まり、「それで」と隣室を目で指した。

「どちらのお子でございますか。まだ迎えが来ぬようですが、送って行かなくても宜しいのですか」
「なんじゃと？」
多香女は訝しげに眉を寄せる。
「初世殿は、そなたの知り合いであろう。わたしはそう聞いたぞ」
「とんでもない、初めて会うた娘御にございます。わたしはてっきり母上のお知り合いだとばかり思うておりましたが」
母子同時に、隣室に目が行った。当人たちは声をひそめているつもりなのだが、元々声が大きいため、ほとんど筒抜け状態。初世は筆を置いて、居住まいを正した。
「こちらは緒方弥十郎様のお屋敷と伺いましてございます」
「いかにも、さようでござる」
弥十郎も自然に背筋が伸びる。
「されど、初世殿には、それがし、憶えがござらぬ。どちらにお住まいでござろうか。これからお送りいたすが」
「いえ、わたしはしばらくの間、こちらにご厄介になります」
堂々と答えられて、二人はしばし言葉を失った。弥十郎は半分だけ閉めておいた襖を開け、

あらためて初世を見つめる。武家娘という感じだが、顔にはやはり憶えがない。多香女にも問いかけの眼差しを向けたが、首を振っただけだった。

「なにかの間違いではござらぬか。当方にはまったく憶えがござらぬ。ご無礼ながら、二親はどちらに……」

「千春、と申せばわかりますか」

不意に初世が意外な名前を口にした。

「え」

弥十郎はふたたび絶句する。謎めいた逢瀬、風来屋への依頼であろうと思いながらも、とうとう口にされなかった依頼。そうか、あれは『前金』だったのかと、ようやく思いいたる。

「どういうことじゃ」

険しい表情になった多香女に、曖昧な苦笑いで応じた。

「いえ、どうやら、わたしの知り合いのようで……申し訳ありませぬが、母上。しばらくの間、初世殿を我が家でお預かりするということに」

すでに前金を受け取ってしまった以上、断ることはできない。風の吹くまま、気の向くままの風来屋稼業だが、約定を違えたが最後、信用を失い、明日の糧を得られなくなる。

「世話になります」

初世は、鷹揚に告げた。緒方家の小さな女主といった威厳と風格をたたえている。どこのだれかもわからぬ娘、だがしかし、弥十郎の頭には、千春の話が甦っていた。

〝豊臣家の財宝が、どこかに隠されていると聞いたら信じますか〟

目の前の娘が、宝の在処を記した絵図面を持っているというのだろうか。まさかと思いながらも、もしやという思いを捨てきれない。

――財宝娘か？

一文の礼金もなく、初世を預かることになっていた。

第三章　月に叢雲

一

もしかしたら、かもしれない。豊臣家の財宝があるのかもしれない。

それを聞いた多香女は、弥十郎同様、まさかと思いながらも、もしやという思いを捨てきれなかったのだろう。初世をしばらくの間、預かることについて承諾した。

翌日の早朝。

弥十郎は長男――田中市之助の小者、也寿とともに家を出る。市之助が、昨夜のうちに届けてくれた米と野菜で朝餉を賄い、空きっ腹という最悪の状況は免れていた。とりあえずは食い扶持を賄えるとあって、足取りもそこそこ軽い。

「豊臣家の財宝ですか」

也寿が不審げに聞き返した。

「そんなものが、本当にあると思っていなさるんで」
「さあてな、わからねえよ。あれば面白えが、ま、これだろうぜ」
弥十郎は、眉に唾を付ける真似をする。二人は横川を右手に見ながら、河岸沿いに北へ歩き、すでに業平橋を渡って、小梅村に入っていた。三囲神社近くに住む隠居の用心棒役を務めるため、朝が弱い弥十郎にしては早出となっている。
「それにしては、多香女様の気合いの入り方が、並みではねえように感じましたが」
也寿はちらりと意味ありげな目を投げた。多香女は緒方家にしては豪華な膳を朝から調えて、初世をどこかの姫様のように扱っている。あわよくばお宝のおこぼれをという下心が見えみえだった。
「わかりやすくていいじゃねえか」
弥十郎は開き直るしかない。
「あるとは言えねえが、ないとも言いきれねえ。宗順も面白がってたぜ。夢を見られて楽しいと笑ってた。とりあえず千春の行方を調べてみると請け合ってくれたが、塒がわからねえからなあ。いくら宗順でも手がかりを摑むのは、むずかしいかもしれねえや」
「あの初世という娘ですが、財宝の在処を示した絵図面でも持っているんですかね」
「それだ。なにを隠そうこのおれも、気になっちまってな。今朝は早く目が覚めたってわけ

さ」

「訊いてみたんですかい、財宝のことを」

「いや、まだだ。今頃、お袋がやきもきしているかもしれねえな。どう切り出そうかと、ない智恵を振り絞っているかもしれねえ」

眩しげに目を細め、両側に広がる田畑を見やった。雲雀の囀りが降るように聞こえてくる。川面すれすれに飛び去った燕の行方を、追うとはなしに目で追いかけていた。足下にはイヌフグリの青い花が、ちらほらと見え隠れしている。のどかな田園風景の中に足を踏み入れて、案内役の也寿が進むまま、畦道のような狭い道を歩き続けていた。

「旦那を襲った賊ってのは、どこの、だれなんでしょうね」

千春と初世の話をしているうちに思い出したのか、也寿が独り言のように呟いた。昨日のことについては、一緒に朝餉を摂りながら、互いに情報交換している。

「それがわからねえから、宗順に調べてくれと言ったんじゃねえか」

「お心あたりはねえんですかい」

「ない。豊臣の隠し金と同じさ」

「へ？」

「あるような、ねえようなってことさ。千春が狙いだったのか、風来屋が狙いだったのか。

今ひとつわからねえ」

それはそうと、と、弥十郎は話を変える。

「吾妻橋の近くであがった土左衛門はどうなった。名や住まいはわかったのか」

「駄目でさ。なんの手がかりもありません。旦那をお送りした後は、あっしも賭場を中心にまわるつもりでさ。仲間うちの喧嘩のように思えますがね」

ひとつ話が終われば、もうひとつの話が浮かぶ。次から次へと色々な話が浮かぶのも多香女譲りか。

「本所緑町の下駄屋のことは知ってるか。宗順に聞いたんだが、夜逃げしたらしいじゃねえか」

と、訊ねる。

「そのようで」

也寿は小さく頷き返した。小者とはいえ、なかなか目端の利く男。縄張り内の事柄は、さすがによく摑んでいる。

「旦那のお知り合いですかい」

「知り合いってほどじゃねえが、富岡八幡宮門前の〈桔梗屋〉よ。あそこで騒ぎを起こしたその夜に、下駄屋の主、喜伝次は逃げたってわけさ。おれが間に入って止めたが、間違いな

く金だろうな」

いやでも喜伝次の言葉と顔が浮かんでいる。

〝おまえが、おまえのせいだ。大丈夫だと言ったから〟

血走った目で、おもんに詰め寄っていたあれは、入れあげた挙げ句の騒ぎではなかったのだろうか。

「旦那は『居残さん』だったんでしたね」

「ああ。山姥のことも、家のことも、借金のことも、なにもかも消えてよ。気楽でよかったぜぇ。遊女屋の主になりてえと思ったが、あれだな。『居残さん』の方がいい。機会があればもう一度、やりてえや」

懐手になって、にやにやする。が、也寿は急に真面目な顔になった。

「『おまえのせいだ。大丈夫だと言ったから』ですか」

弥十郎に問いかけの眼差しを向ける。

「なにが大丈夫だったんでしょうね。金儲けの話でも持ちかけられたんでしょうか。それで間違いなく儲かるから、なんてことを言われて全財産を注ぎ込んだ」

「おれに訊いてもわからねえよ。知りたきゃ、おもんに訊け。もっとも、すんなり喋るかどうかはわからねえがな」

「もちろん訊いてみますが……旦那。なにか気になったこととかありませんでしたかね。騒ぎを収める前のことでも、後のことでもかまいませんが」
「おもんのことでか」
「へい」
笊男の気質をよく知っている也寿は、念のためという目を返した。確かに面倒なことが多いので、依頼された事柄以外は、なるべく考えないようにしている。一昨日、布団部屋におもんとしけこんだとき、と思い浮かべて、「ああ」と思った。
「そういや、西行法師の歌なんぞを呟いていたな。ほら、あれだ。『ねがはくは花のもとにて春死なむその二月の望月のころ』というやつよ。おもんは小判の下で死にたい、みてえなことを言っていたが」
「はあ、西行法師」
短歌や俳句は大の苦手、也寿は困惑したように首を傾げる。弥十郎は自分なりの意見を述べた。
「らしくねえってことさ。おもんの親がなにをしていたのかは知らねえがよ。少なくとも優雅に歌を詠むような家にゃ生まれてねえはずだ。にもかかわらず、突然、西行法師の歌の一部を呟いたもんだからな。意外に学があるじゃねえかと、おれはからかったわけだ」

「おもんはなんと？」
「客の受け売りとか言っていたが……そうだ。気になることといえば、もうひとつ。蓮の花の薫りを漂わせていたのが、ちょいと引っかかっているのさ。上客を摑んだのかもしれねえな」
「ははあ、なるほど。蓮の花の薫りですか。高価な香の薫りはすなわち、その上客から贈られた品ではないかと、旦那は考えておいでになるわけで」
「そんなところだ。高価な香ってのも、深川あたりの岡場所には、いささか不似合いなものに思えなくもない。西行法師の歌ほどじゃねえが、ま、憶えたばかりのことや、もらったばかりの品を得意げにひけらかすってのは、珍しいことじゃねえやな。おれもあの年頃にはよくやったもんだぜ」
「旦那は今もじゃねえんですかい」
「そう、おれは今も時々ひけらかしすぎて、と、也寿」
立ち止まって睨みつける。
「てめえ、よくそんな口が利けるもんだな。だいたいがだ、てめえがよけいなことを、そうだ、思い出したぜ。『白魚大漁』の書についてだがな、おれは十両、もらえるなんて言ってねえぞ」

「あ、いや、すみません。多香女様の書ともなれば、本当は五十両ぐらいかなとは思ったんですが」

也寿は焦って言い訳した。告げた額が少なすぎたかと思ったに違いない。

「馬鹿」

弥十郎はこつんと額を叩く。

「いてっ、それじゃ、礼金は百両ですかい？」

「ぬかしやがれ。百両ももらえるんなら、おれの口から堂々とお袋に伝えらあ。白魚漁で細々と生計をたてている漁師が、百両も払えるかよ。礼金はだな、白魚だ、白魚。獲れたて、ぴっちぴちの白魚よ」

「え」

絶句して、也寿は立ち止まる。

「頼まれた書は、宗順に持たせてやったがな。礼金が白魚という話を、お袋にどう話したものかと……どうした？」

隣に気配がないのを感じて、弥十郎は振り返る。也寿が引き攣るような笑みを返した。

「いえ、へへへ、そういう話だとはついぞ知りませんで。旦那、お腹立ちじゃねえんですかい。あっしがよけいなことを言ったばかりに」

一発、殴られるのではないかと懸念していた。
「怒っちゃいねえよ」
「さようで」
心底、ほっとした様子で隣に並ぶ。
「礼金のことについては、言わなかったおれが悪いんだが、お袋は少なくとも十両の金が入ると思ってやがる。十両、稼ぐのがどれほど大変か、わかっちゃいねえのさ。金の生る木があるとでも思ってんのかね」
つい愚痴が出ていた。前金分の白魚は昨日、腹におさめてしまっている。宗順に書を預けて、〈藤乃家〉に届けさせたが、晴れやかな気分とはいかない。
「稼いでくださいよ、用心棒で」
也寿が景気づけるように尻のあたりを叩いた。
「二日で一分、こつこつと稼げば、いつか十両になりまさ」
「その前に御役御免じゃねえか。丸ひと月、用心棒役を務めたとしてもだ。十両には手が届かねえ。菜生のことで金が要るってのに」
弥十郎はふと目をあげた。畑の向こうに建つ大きな農家から怒声のようなものが響いている。

「也寿。これから行くのは、あの家か」
「さようで」
「おまえはここにいろ」
言い置いて、弥十郎は走った。間違いない。大きな叫び声が農家の方から聞こえている。

二

「右だ、右」
「避けろ」
「まわりこめ！」
農家の前庭で、五人の男たちが木刀を手に戦っていた。町人ふうだが、だれがだれを襲っているのかわからない。
「待て」
弥十郎はひとりの腕を摑み、木刀を取りあげた。振り向いたひとりが、木刀で小手を打ちこんで来る。弥十郎は下段に移した木刀で、その打ちこみを撥ねあげた。と同時に背後で動いた別の男を打ちつける。手加減していなければ肋が折れたかもしれない。上段に木刀を振

りかぶって襲いかかろうとした男は、そのままの姿勢で後ろによろめき、木刀を落とした。

「おれは、本所の御家人、緒方弥十郎」

挨拶はあらたな斬撃に掻き消される。男が胴を狙って打ちかかって来た。弥十郎は紙一重で後ろに跳び、すぐさま打ちこみに変化させる。充分に踏みこんで放った一撃が、相手の手を打った。

「いつうっ」

びりりっと痺れるような衝撃が走ったに違いない。男は木刀を取り落として、その場にうずくまる。息つく暇もなく、また別の男が木刀を叩きつけて来た。弥十郎は腰を落としてその一撃を撥ねあげる。すかさず木刀をひねるようにして、相手の胴に叩きこんだ。いささか力が入りすぎたかもしれない。

「ぐっ」

と、呻いて、男はその場にくずれおちる。木刀を構えたまま、弥十郎は座りこんでいる男たちを見まわした。

「挨拶の続きをさせてもらうぜ。風の吹くまま、気の向くままの風来屋よ。喧嘩の仲裁、謝り仲人、御家騒動の肝煎役と、頼まれればなんでもやるが、今はさしずめ仲裁役か。用心棒を頼まれたんだが、この家の主殿は」

「わたしでございます」
裏庭の方から、初老の男が姿を現した。慈姑頭に袖無し羽織という医者のような格好で、鬢にはかなり白髪が混ざっている。仏のように穏やかな顔をしているが、それだけに読み取りにくいともいえた。
「手荒い歓迎だな」
弥十郎は木刀を地面に放り投げる。
「腕試しか」
確認するような問いかけが出た。男たちにほとんど殺気が感じられなかったのはなぜなのか。さらに終わるのを待っていたような現れ方にも疑問が湧いている。
「お気づきでございましたか」
初老の男は答えた。
「申し訳ありません。てまえがこの家の主、佐兵衛にございます。ですが、腕試しだけではありませんでな。この者たちは、稽古をしていたのでございます」
怪我でもしたのか、右手に巻いた晒しに左手でふれている。弥十郎は頭から足もとまで、素早く目を走らせていた。
「稽古、ですかい、旦那？」

農家の前庭に及び腰で入って来た也寿に、大丈夫だと視線で知らせる。佐兵衛は座りこんでいた男のひとりに手を貸しながら言った。

「さようでございます。隠居後の楽しみに、本を書きましてな。知り合いの芝居小屋の座長がそれを読み、面白いからと芝居にしてくれたのでございます。〈梅若座〉と申しまして、この者たちは、そこの役者でございますよ」

「なんでもやるけどな」

ひとりが苦笑した。年は二十前後、色男の部類に入るだろう。甘い顔立ちではなく、粋な男前という感じの若者だ。

「大芝居の役者みてえに、楽屋でふんぞり返っていられねえからよ。舞台の準備や呼びこみ、大道具や小道具作り、看板書きまでやっているのさ。お侍様も見に来てくれ。深川の富岡八幡宮に芝居小屋を建てているんだ」

「ああ、あれか。今、評判の」

弥十郎は〈藤乃家〉の女将の話を思い出している。初日から大入りで、夜には女客が押し寄せたと聞いていた。

「すごい人気らしいじゃねえか。今日もこれからかい」

「へい。昼前に一度、昼過ぎに一度と、一日に二回、演ってます。今回の芝居はけっこう剣

術の腕が要るんでさ。話も少しずつ変わったりするんで、稽古がてら、佐兵衛さんの家に来ているんで」

「さあさあ、今日の稽古はここまでだ。早く行かないと間に合わなくなる。いい稽古になっただろう。いつになく気迫がこもっていたよ」

佐兵衛に言われて男たちは、埃を払って立ちあがる。痛そうに腹を押さえていたひとりに、弥十郎は詫びた。

「すまなかったな。ちょいと力が入りすぎた」

「いえ」

素直そうな目をした男たちを見送り、弥十郎は手短に挨拶した。也寿が世辞まじりの褒め言葉を並べたてて、無事、用心棒役となる。

「この家には、主殿ともうひとり、女子がいるとか」

弥十郎が家の奥に目を向けると、也寿が慌て気味に告げた。

「そ、それじゃ、旦那。あっしはこれで」

そそくさと後ろも見ずに飛び出して行く。佐兵衛が連れて来た『女子』を見て、也寿の狼狽えぶりが理解できた。

「おこまと申します」

主が紹介したのは、十になるかならないかの娘。初世と同じ年頃かもしれない。也寿は大年増と言っていたが、二十年後の大年増ということであろう。

――あのやろう。女がいなきゃ、おれが引き受けねえとでも思ってんのかね。

そのとおりでさ、と、也寿は間違いなく答えたに違いない。大人たちの思惑など幼い娘には関わりないこと。おこまは、くりくりした大きな目で、弥十郎を見あげた。

「おじいちゃんを守ってください」

年相応の言葉と笑顔につられて微笑する。

「あいわかった」

請け合いつつ、初世もこうでなければと思っていた。多香女に褒められるような娘など、ろくなものではない。小賢しいか、己の愚かさを知らぬかのどちらかに決まっている。おこまの子供らしさにふれて、心なごむ思いがした。

「まずは茶でも一服、いかがですかな」

佐兵衛に言われて、弥十郎は腰の物を取る。

「馳走になろう」

目はふたたび主の姿に向いていた。頭から足もとまで目を走らせたが、どうしても、足もとで視線が留まる。喉もとまで出た問いかけを呑みこみ、座敷に落ち着くと、まずは挨拶代

わりの問いかけを口にした。
「主殿は、鼻緒問屋を営んでおられたとか」
「はい。二年ほど前に見世をたたみまして、その後、ここに居を構えました。女房は早くに亡くなりましてな。子は授かりませんでしたが、今はおこまがおります。あの子がてまえの支えでございます」
「では」
弥十郎の小さな驚きに、茶を運んで来た娘が答えた。
「あたしは、捨て子なんです」
屈託なく言い、続ける。
「座長さんに拾われて、ずっと旅芸人の一座に加わっていました」
「女ながらも役者になりたいというなら口出ししませんでしたが、どうも芝居は好きではない様子。この子のためにならないと思いましてな。わたしが引き取らせていただいたのでございます」
言葉を継いだ佐兵衛とおこまは、顔を見合わせて、にっこりと微笑んだ。たとえ血の繋がりはなくても強い絆は生まれる。隠居暮らしを楽しむ好々爺と、健気にそれを支える孫娘。楽な仕事だと、弥十郎は感じていた。

――なぜ、用心棒なんか要るんだろうな。

むしろ疑問が湧いている。よほど金を蓄えているのか、それを盗人に知られて狙われているのか。あるいは……昔の関わりでだれかに命を狙われているのか。平和な家には、およそ不似合いな用心棒。

弥十郎はどこか居心地の悪さを覚えていた。

三

小さな騒ぎが起きたのは、三日後の未明だった。

「きゃあぁ～～～っ」

おこまの凄絶な叫びを聞いて、弥十郎は、すぐに奥の座敷へ駆けつける。賊が侵入した気配はなかったが、早くも鯉口を切っていた。

「お、おじいちゃんっ、危ないっ、逃げて！」

叫び続ける娘を、佐兵衛が懸命に宥めている。

「大丈夫だ、おこま。わしはここにいる、案ずることはない。落ち着いて、大丈夫だから、なにも起きていないよ。寝惚けただけだ、そう、大丈夫」

真っ暗な座敷の中、強い絆で結ばれた年寄りと娘は、固く抱き合っていた。不寝番をしていた弥十郎は、闇に目が慣れている。おこまが、佐兵衛の腕をきつく握りしめているさまがよく見えていた。まだ寝惚けていたのかもしれない。

「だ、だれ？」

おこまは怯えたように弥十郎を見あげた。

「わたしだ、おこま。用心棒の弥十郎だ」

可能な限り穏やかに声を掛ける。

「案ずることはない。ずっと見張っている。部屋の外にいるゆえ、安心して寝むがよい」

「あぁ、弥十郎様」

強張っていた娘の身体から、ふっと力が抜けた。それを見計らったように、佐兵衛が布団に横たえる。掻巻を掛けてやり、少しの間、安心させるように掻巻をとんとんと叩いていた。弥十郎は廊下に出て、あてがわれている座敷に戻る。ほどなく、佐兵衛がやって来た。

「お騒がせいたしました」

右手に巻いた晒しの白さが、闇の中ではよけい際立って見える。

「落ち着いたか」

「はい。わたしのことが案じられるのか、時々、夜中にこのような騒ぎを起こすのです。緒

方様にお願いすれば、おこまの不安も吹き飛ぶのではないかと思いましたが」
「なにが不安なのであろうな」
弥十郎は率直に問いかける。明かりのない座敷の中、微妙な間が空いた。その間が答えだと思うしかない。
「襲われたことがあるのか」
二度目の問いかけには、慌て気味の答えが返る。
「いえ、そのようなことは」
「さようか」
次の言葉を探しているうちに、人の気配をとらえていた。夜明けを迎える頃になると、〈梅若座〉の男衆が、浅蜊や豆腐といった朝餉の材料を手に訪れるのである。弥十郎は立ちあがり、勝手口の方に向かった。
「おはようございます」
二人の男が、いつものように姿を見せる。弥十郎も挨拶を返して招き入れた。思えばこれも奇妙なことだと思っている。夜は弥十郎という用心棒、昼間はこの男たちが用心棒代わり。佐兵衛とおこまを守っているように見えるのは考えすぎだろうか。
「今朝は、蜆汁でさ」

「嫁菜と春大根も持って来やした」
二人はそのまま台所で、朝餉の支度を始める。中食と夕餉はおこまの係だが、朝だけはこの者たちの役目となっていた。訪れる際、野菜や魚といった材料も運んで来る。この隠居所に出入りする商人はひとりとしておらず、それも弥十郎は気になっていた。
「また嫁菜か」
苦笑したのをどう思ったのか。
「お嫌いで」
ひとりの言葉に、小さく首を振る。
「そんなことはねえ。ほろ苦いところが、なんとも言えず旨い。ちょいとな、つまらねえことさ」
嫁菜で浮かんだのは、嫁入りしそうな芸者のこと。一昨日、昨日と、用心のためと思い、昼間もここに詰めていたので、家にも戻っていない。当然、〈藤乃家〉や〈瓢六〉にも行けず、辰吉とは逢っていなかった。
「おまえさんたちがいてくれるなら、おれは昼間、家に戻りてえんだが」
「どうぞ、おいでになってください」
「おいらたちがいますんで」

「それじゃ、そうさせてもらおう」

言い置いて、弥十郎は勝手口から庭に出る。暑くもなく、寒くもない絶好の行楽日和だ。家にいれば、やれ潮干狩りだ、やれ花見だと、多香女にせっつかれて、出かけるはめになっていただろう。

――お袋にこき使われるか、用心棒役に命を懸けるか。

いずれにしても、割に合わない人生だと、井戸で顔を洗いながら思っている。もっとも暗く考えこんだりはしない。なるようになるさが身上、まずは今、気になっていることを問いかけに変えた。

「つかぬことを訊ねるが」

嫁菜を洗いに来た男に、視線で大きな農家を指した。

「盗人に押し入られたことがあるのか」

「いえ、ありません。ただ目つきの悪い男が、うろつくのを見たもんですからね。まわりに家はなし、おまけに住んでいるのは年寄りと娘っ子だけ。不用心だってことで、お侍様を用心棒にと思ったわけでさ」

男は也寿から聞いたとおりの話を口にする。確かに三囲神社の周辺には、有名な料理茶屋などが並んでいるものの、このあたりは人気（ひとけ）がない。もっともな話だが、おこまの様子と佐

兵衛の右手の怪我が引っかかっている。
「ご隠居の怪我だが、あれは」
「怪我じゃなくて、なにかにかぶれたとか言ってやしたぜ。漆の木にでもさわっちまったのかもしれませんや」
「そうか。怪我をしたわけではないのか」
用意されていたような答えが、いささか気に入らなかったが腹におさめる。
「おこまさんのことだが」
「訊かないでおくんなさい」
男は目を逸らして言った。
「昔、つまらねえことがあったんでさ。それがもとで、夜中や朝方、泣き叫びながら、飛び起きるんでさ。人には言いたくねえこともありますんで」
確かに、と、これまた頷くしかない。襲われたのは、おこまなのだろうか。男に手込めにでもされかけたことがあるのか。狙われているのが娘の方だとしたら……佐兵衛や男衆の警戒ぶりも得心できる。
——捨て子だと言っていたが。
産みの親が現れて、返せ、いや返さぬの騒ぎにでもなっているのか。あるいは大身の旗本

や大名家の落とし胤(だね)か。緒方家に居候中の財宝娘、初世のことが浮かび、さまざまな推測が湧いていた。

「弥十郎様」

当のおこまが、勝手口から出て来る。

「今日はお屋敷に戻られるとか」

「ああ、昼間だけな」

「心細いので、なるべく早く帰って来てください」

と、縋(すが)りつくような目で訴えた。男衆はちらりと娘に目を投げたが、特に言葉は発しない。洗い終えた嫁菜を持って、台所に戻る。

「わかった。午過ぎには戻るようにしよう」

「はい」

おこまの表情が、ぱぁっと晴れやかになる。商人が出入りしない家、ひっそりと暮らす年寄りと娘、二人を守るように訪れる男衆。隠居の庵には、秘められた謎がある。

——鼻緒問屋か。

也寿にもう一度、調べさせるしかあるまい。おこまの悲痛な絶叫が、耳の奥で木霊していた。

四

おこまのことも気になるが、初世のことも気にかかる。
「ただいま戻りました」
弥十郎が表門の潜り戸を入ると、およねが玄関先から走って来た。
「ちょうどようございました。使いを出そうかと思っていたところなんですよ」
「なにかあったのか」
「いえ、それが」
およねは言い淀み、屋敷を振り返る。座敷からは機嫌のよさそうな多香女の笑い声が響いていた。弥十郎にとって一番重要なのは、母の機嫌といっても過言ではない。
「だれか来ているようだな」
「はい」
もごもごと口の中で呟いたが、聞き取れない。
「とにかく挨拶してくる」
およねに腰の物を手渡して、家に入る。玄関に並んだ履き物の数からして客人は二人、そ

こそこの暮らしぶりであるように思えた。二足の雪駄が、その主たちの関わりを示すように並んでいる。革の鼻緒の一足は堂々と、ありきたりの鼻緒を用いた一足は遠慮がちに控えているように見えた。

——鼻緒か。

ちらりと佐兵衛のことが浮かんだ。いや、佐兵衛のことがあるから、いつになく鼻緒のことが気になったのかもしれない。也寿が来たら確かめようと、頭の隅に留めて、賑やかな声が響く座敷に行った。

「母上。ただいま戻りました」

「弥十郎か。入るがよい」

「は。失礼いたします」

障子を開けたとたん、思わず目を見開いていた。所狭しと反物が広げられている。絽や紗といった紺系統の夏物が主体であるため、綾錦の派手やかさはないが、値の張る品ばかりであることは察せられた。

「ここしばらく夏物は仕立ておらぬゆえ、〈白木屋〉さんを呼んだのじゃ。番頭さんと手代の方よ。これなどはいかがであろうかの」

多香女は、涼しげな藍色の紹の反物を自分の肩に掛ける。初世も同席していたが、まるで

緒方家の一員のような顔をして、いかにも品のよい笑みを口もとにたたえていた。〈白木屋〉は〈越後屋〉に列ぶ呉服問屋であるのに、まったく臆していないのが見て取れる。

「お似合いですな」

弥十郎は答えながら、つい反物を手に取っていた。

「わたしはこれがよいと思いますが」

「流石にお目が高うございます」

すかさず番頭が、揉み手せんばかりに持ちあげる。

「お手に取られた絽は、お持ちいたしました中でも、もっとも値の張る品。緒方様のような美丈夫でなければ、とても着こなせません。てまえどもでは格負けしてしまいますので」

「そなたは、それにせい」

多香女がさらりと言った。

「十兵衛様も、昔、よう似た絽のお召し物をお持ちであられた。憶えておらぬか。そら、そなたが大立ち回りを演じて、破ったうえに、水浸しになったあれよ」

「ああ、あれでございますか」

適当に話を合わせた。どの着物なのか、定かではないほどに何度も大立ち回りを演じている。『水浸し』が返り血を浴びた結果であることもわかっていたが、よけいなことは口にし

ない。

「わたしは、こちらと、さよう、これにしよう。弥十郎はどうするのじゃ。それでよいのか」

「は」

いちおう畏まったが、不安と疑問が嵐のように吹き荒れている。書を売ったのだろうか。常日頃、売るものではないと公言して憚らないが、空の米櫃状態が続き、背に腹は代えられぬとなったのか。

――まさか。

弥十郎は初世に目を向けずにいられない。まさか、まさか、まさか、と、不安はいまや激しい恐怖となって、苦しいほどに胸を締めあげている。

「母上」

小声で呼び、廊下に出た。

「なんじゃ。まだ決めかねておるというに、不粋なことよ」

「不粋は承知のうえです。ちとお訊ねいたしますが、これは」

と、親指と人さし指で丸を作る。

「大丈夫なのでございますか」

「よさぬか、品のない」
多香女は丸を手で払い、さも不愉快そうに唇をゆがめた。
「品だのなんだのと言うておる場合ではございませぬぞ。まさかとは思いますが、もしや、その、初世殿の話を信じておられるわけでは……」
「あるのじゃ」
早口で遮る。
「間違いない、あるのじゃ、豊臣家の財宝はあるのじゃ」
「母上」
呆れて言葉が出ない。およねが不安げに、廊下の端に立っていた。弥十郎が不在の間に、多香女は初世と話をしたのだろう。自身の書が高値で売れるせいか、母の金銭感覚は普通ではない。加えて、疑り深い半面、妙に純粋なところがあり、騙されやすいという一面も持っている。
「あるのじゃ」
頑なに言い張る多香女を、なかば無理やり茶の間に連れて行った。
「およね。〈白木屋〉にはお帰りいただけ。今日のところはとな、申し訳ないが、お引き取りいただきたいと」

「はい」

およねは安堵したように座敷に走る。

「ならぬ。せっかく呼んだというに、ええい、今、頼まねば間に合わぬではないか。夏はすぐそこぞ。今年も去年の古びた着物で過ごせというのか。うちは親戚が多いゆえ、人に会う機会が多いではないか。同じ着物ばかり着ていては、そなたが馬鹿にされるのじゃぞ。わかっておるのか、弥十郎」

親戚が多いのはだれのせいでございましょうな。五家にそれぞれ長男を残してきたのはだれでございましょうな。そう言ってやれたら、どれほどすっきりすることか。ぐっと呑みこんで言った。

「このうえ新たな借金が増えるよりも、馬鹿にされる方がましでございます。いっそ付き合いを絶って、うちに籠もるというのはいかがでございますか。さすれば、着物を作る必要もありますまい」

「ふん、甲斐性のない倅を持つと、母は苦労するの」

冷ややかな一瞥を投げて、多香女は茶の間にどかりと腰をおろした。座敷に戻らなかったそれが、母なりの答え。弥十郎は茶の間の襖を閉める。

「初世殿と、どのような話をしたのですか」

囁き声で訊ねる。が、天の邪鬼な多香女は、答えではなく、意表を衝く問いかけを返した。

「そなたの子ではなかろうな」

「は？」

「初世殿のお年は十、そなたが十五のときと考えれば、ありえぬことではない。どうじゃ、憶えはないか」

「さあて、わたしが筆おろしをいたしましたのは」

真面目に答えそうになり、慌てて言葉を切る。にんまりと多香女が笑っていた。思いもかけぬ問いかけで気持ちを揺さぶり、知りたい話を得るのは、弥十郎もよくやる策。母譲りだと、つくづく思い知っていた。

「倅の閨房の話を聞いて、どうするのですか」

「いや、ちと気になっただけじゃ。そんなことより、お宝よ。百万両ぞ、数えきれないほどの小判ぞ」

多香女は頬を紅潮させる。

「わたしは将軍家を買い取る所存じゃ」

「は？」

「今はお上も台所事情が厳しい。百万両の黄金を見れば、『はは－っ』となろう。そこでわたしの出番となる。女将軍の誕生よ。大奥に美丈夫をずらりと勢揃いさせ、今宵の夜伽はそなたに、明日はそのほうに、となるわけじゃ。生まれる子はさぞ美しかろう。女将軍、ああ、なんとよい響きであろうか」

「……」

呆れるのを通り越して、頭が真っ白になっていた。世迷い言を真に受けて、〈白木屋〉を呼んだだけでも許しがたいものを、よりにもよって徳川家の御家乗っ取りを考えるとは……。

「多香女様、緒方様」

〈白木屋〉の番頭の声が廊下で響いた。

「てまえどもは、これで失礼いたします」

「造作をかけたな。すまぬ」

弥十郎は障子越しに詫びた。ふくれっ面の多香女は、なにも答えない。頼めなかったことを恥だと思っているのだろう。弥十郎を凄い目で睨みつけていた。

「わたしが〈白木屋〉を呼んだその意図がわからぬか」

「夏物の着物を頼むためでございましょう。それ以外にもなにかあるのですか」

「これだからそなたは……わたしはだな、初世殿を試したのじゃ」

またしても、意表を衝く言葉が出る。聞きたくはないが、訊かなければ怒りが増すのは必至。

「試したとはどういうことでございますか」

仕方なく訊いた。

「世話になるだけでは心苦しかろうと、初世殿に言うたのじゃ。すると、『はい』と答えた後、『なにかお礼がいたしたく思います』と答えたのでな。〈白木屋〉を呼んだというわけよ。よいかと初世殿に訊いたが、慌てず騒がずであったわ。支払いはまかせておけというあれこそが、豊臣家の財宝の真偽を知る手だて」

多香女は、弥十郎にしか通じないであろうことを告げて、言い切る。

「財宝はあるのじゃ」

「……」

目に非難をこめるしかなかった。

――間一髪か。

今日、戻って来なければ、借金が増えていたのは間違いない。豊臣家の財宝は、緒方家の借金に繋がりそうだった。

五

「わたくしは、豊臣家の血を引いている由」
初世は言った。
「肥後国で四郎という者に育てられました。姉様、あ、これは千春のことですが、千春は四郎の娘です」
「四郎というのは、何者でござるか」
弥十郎の問いかけに、初世は答える。
「わたくしの乳母だった者の夫です。乳母が亡くなった後、千春とともに、わたくしの世話をしてくれていました。物心ついたときには、乳母は亡くなっておりましたゆえ、顔も定かではありませぬ。頼りにしていた四郎が亡くなり、江戸に出て参りました。いざとなれば、豊臣家の財宝がありますゆえ、それを元手にして商いができぬかと」
「で、その財宝とやらは何処に？」
「今は言えませぬ」
「いつならば言えると？」

「それは」
二人のやりとりを、多香女が強引に終わらせる。
「もうよいではないか。供をせい、弥十郎。わたしはこれから初世殿と、回向院近くの料理屋に行くのじゃ。運座が開かれるでの」
運座は、俳句の会合のことである。顔を揃えるのは、裕福な隠居や大店、中店の若旦那といったところが多い。反物選びよりはましかもしれないが、出かければそれだけ金が要る。
「俳句でございますか」
物言いたげな弥十郎の視線を察したのか。
「さよう。倅殿が稼いでこぬゆえ、少しでもと思うてな」
自分で稼ぐと匂わせた。
「おお、いよいよ書を売ることになされたのでございますな。よいお心がけにございます。書は取っておくものではなくて、売るもの。買い手がいるうちに売るのが得策。運座に集う方々であれば、こちらの言い値で引き取ってくれましょう。ささ、早うお支度なされませ」
気が変わらぬうちにと、急いで座敷を出た。とそのとき、也寿が裏木戸の方から歩いて来る。
「おう、也寿」

「どうも、へへへ、ご隠居のお守りはいかがかと思いまして」
「特に変わりはねえと言いたいが、ま、おれの話は後だ」
弥十郎は煙草盆を持ち、縁側に腰かける。茶を運んで来たおよねが、物言いたげな視線を向けていた。
「なんだ、およね」
「あの、実は」
「およね」
亭主の徳兵衛が、慌て気味に止めた。
「なんでもございません。わたしも多香女様のお供をいたしますので」
「そうか」
年寄り夫婦の態度に、少し疑問は覚えたが、気持ちを也寿との話に向ける。縁側で一服というのも久しぶりのこと。まずは宗順の調べについて訊いた。
「なにか言っていたか」
馴染みの居酒屋で、酒を酌み交わすのは、日課のようなものだ。会ったかどうかではなく、会ったということを前提とする話になっていた。
「へい。旦那に言伝を頼まれたんですよ。例の女については、まったく手がかりなしとか。

身寄りのない娘を体よく押しつけられたんじゃないかと言ってましたぜ」
「うむ」
弥十郎は渋面になる。自分の考えをそのまま言われたような感じだった。とはいえ、千春から『前金』を受け取ってしまった以上、放り出すわけにもいかない。
「初世殿については、今少し様子を見るしかねえな」
「あ、そうそう、辰吉姐さんも〈瓢六〉に来ましたぜ。親父によると、このところ、毎晩、顔を見せるとか」
と、含みのある目を向けた。辰吉の見合いについては、前にも一度、話をしている。気にしているのはわかっていたが、
「そうか」
ひと言で終わらせて、弥十郎は話を変えた。
「佐兵衛のことだが、おめえの話じゃ鼻緒問屋をやっていたという話だったな」
「へい。佐兵衛さんから、そう聞きました」
「今一度、洗い直してくれねえか」
「旦那がそう仰るなら調べ直しますが……なにか気になることでもありましたか」
「幾つかあるが、まずは足もとよ」

「え？」
「鼻緒問屋をやってたって割にゃ、履き物に無頓着なのさ。おれだったら雪駄の鼻緒を洒落た色合いの革にしたりするがね。まるで気にかけていない。ちょいとそのあたりがな、引っかかったのさ」
「商いをやめたからじゃないんですかい。あるいは元々洒落っ気のない男だったのか。旦那みてえに、やれ着物と帯がどうの、雪駄の鼻緒がどうのというお方は珍しいですよ」
「金もねえのに、とでも言いたげだな、ええ、也寿よ」
「い、いえ、めっそうもない。わかりました。もう一度、調べてみます。他にもなにかありましたんで？」
「あるといえばある、ないといえばない。またおめえは、気にしすぎだと言うかもしれねえが」
前置きしたうえで、続けた。泣き叫びながら飛び起きた娘、宥める佐兵衛の右手に巻かれた晒し、商人がいっさい訪れない家、出入りしているのは〈梅若座〉の男衆のみ。芝居の話の部分で、也寿は「へえぇ」と声を洩らした。
「今、富岡八幡宮に建っている小屋は、佐兵衛さんの知り合いがやっているんですか」
「知り合いどころか、今、演っている芝居の本を、あの爺さんが書いたらしいぜ。本人は隠

居後の楽しみとか言ってたがな。かなりの評判らしいじゃねえか。立派な戯作者よ」
「凄い評判らしいですぜ。八幡様の境内には、人があふれ返ってまさ。あっしはまだ観てませんがね。宗順さんは面白かったと言っていました」
「ほう。あいつがそう言うんなら、本当に面白いんだろうぜ。芝居通を気取っているだけあって、見立てには間違いがねえ。お袋は宗順が薦めると、いそいそ観に出かけやがる。機会があれば、おれも観に行くか」
　一緒に観に行きたい相手と考えて、またまた辰吉のことを思い出していた。見合いの話はどうなっただろう。辰吉が〈瓢六〉を夜毎、訪れるのは、なんのためなのか。船で藤の花見と洒落こんだときも、なにひとつ訊けないまま別れている。
「なんだ、その目は」
　にやにやしている也寿に気づき、冷ややかに言った。
「いえ、だれのことを思い浮かべておいでになるのかと思いやして。前にも言いましたが、土左衛門が見つかる前に、辰吉姐さんと二人で小粋な船旅をしていたらしいじゃありませんか」
「おれも前に言ったかもしれねえがな」
　弥十郎はわざと不機嫌に応じる。

「船旅なんてもんじゃねえよ。ただの船頭役さ。風来屋はときに船頭もできねえと、稼げねえからよ」

「そのことですが、ちょいと気になりまして。旦那は船で吾妻橋の下を通り抜けたわけですよね」

「ああ、そうだ。三囲神社近くの料理屋に、辰吉を送るためにな」

「土左衛門に出くわさなかったのが、あっしは不思議でならねえんでさ。旦那が通り過ぎた頃に、ぷかり、ぷかりと流されていたんじゃねえかと思うんですがね」

鋭い指摘に、内心、どきりとする。藤の花見をしていたあれが、微妙な時間差に繋がったのではないだろうか。それとも土左衛門が流されていたのに、見落としたのだろうか。

「流木かなにかだと思ったのかもしれねえ。もしくは土左衛門に出くわす前に、着いちまっていたか。いずれにしても、おれは気づかなかったな」

「そうですか」

也寿はしばし考えた後、「多香女様のことですが」と急に声をひそめた。弥十郎は首を折るようにして耳を近づける。座っても身長差があるため、内緒話も楽ではない。

「白魚の礼金についてはなにか仰って……」

慌てて也寿の口を押さえた。

「おめえに言われて、おれもたった今、思い出した。お袋も同じだろうぜ。いいか、白魚の話は禁句だ。二度と口にするな」
「へい」
「なにが禁句じゃと？」
すかさず座敷から声が響く。
「地獄耳だぜ」
囁いて、言い訳した。
「なんでもありません。お支度は調いましたか。わたしもあまり時がありませぬゆえ、そろそろ参りましょう」
心の中で気合いをかけ、重くなりがちな腰をあげる。財宝娘は悠然と多香女に従っていた。ちらちらと視線を投げるおよねを、亭主の徳兵衛が視線で窘めている。なにやら不可解な空気が漂っていた。

六

なぜ、土左衛門に出くわさなかったのか。

弥十郎は、也寿の言葉を反芻していた。回行院近くの料理屋に多香女を送り、足の向くまま、一ツ目之橋を渡る。河岸沿いに歩きながら、吾妻橋近辺の地図を思い描いていた。

「土左衛門は大名屋敷の前の河岸に、引き揚げられていたんだっけな」

いまだ身元のわからぬ骸、生前の行いについては知る由もないが、だれも名乗り出ないのは、その日暮らしのやくざ者だったからということも考えられる。

「知られたくないことがあるため、ということも……ちっ、天気雨か」

天を見あげて、忌々しげに舌打ちする。知らぬ間に足が〈藤乃家〉に向かっていたことにも腹が立っていた。とはいえ、雨宿りするには格好の場所。いっそう足を速めたとき、後ろから声が掛かる。

「前を行く急ぎ足のお方は、もしや、風来屋の旦那じゃござんせんか」

緋色の番傘をさした辰吉が、小首を傾げて、後ろに立っていた。芸者姿と色鮮やかな番傘が、なんとも言えない色香を感じさせる。つい口もとをゆるめそうになったが、意識して引き締めた。

「早えな。お座敷かい」

弥十郎は近づいて来た辰吉から番傘を取り、幇間よろしく傘の持ち役となる。

「ええ、また船で行こうと思いましてね。〈藤乃家〉さんへ船のお願いをしに行くところな

んです」
「用意がいいじゃねえか、晴れていたのに番傘とはよ」
「女将さんのところを出ようとしたとき、ぱらぱらっときたんですよ。濡れたら台無しですからね」
　辰吉が言った『女将さん』とは、置屋の女将のことである。そういえば、と、弥十郎は二度目の苦々しさを味わっていた。
　――こいつの置屋にも近かったんだな。
　自分でも知らないうちに、足が勝手に向いただけ、心の中で言い訳して、短い道行きとなる。辰吉は三味線を抱え直して、艶っぽい流し目をくれた。
「旦那はどちらにおいでになるところだったんですか」
「お袋のお供をして、回行院まで来たのさ。暢気に運座だとよ。倅の苦労も知らないで、いい気なもんだぜ」
「運座ですか。昨年あたりから、あちこちでよく開かれるようになりましたねえ。この後のお座敷もそうなんですよ」
「風流人がそんなに急に増えたとは思えねえがな。お袋も書を売りつけてやろうと考えてるのさ。間抜け面をして話しているうちに、いつの間にやら、願いましては一枚三百両なり

だ」

出る直前、およねが物言いたげな表情をしていたのが、ふっと浮かんだ。それを止めるような徳兵衛の態度も少し気になっている。が、すぐに辰吉の艶麗さに、気持ちを引き戻されていた。

「そういや、昨日、船で戻るとき、吾妻橋のあたりで土左衛門が引き揚げられてよ」

色気のねえ話だと思いつつ、話題にしている。

「聞いたか」

「ええ、姐さんから聞きました。若い男だったとか」

「そう、若い男だった」

繰り返しながら、首の後ろあたりに疼きを覚えていた。土左衛門ではあったが、亡骸の損傷はさほどひどくなかったはず。長い間、水に浸かっていたようには見えなかった。あれは、つまり、落ちたばかり、いや、落とされたばかりということではないのか。

「どうしたんですか」

角で立ち止まった弥十郎を、辰吉が見あげる。

「あ、いや、すまねえ。おまえさんにも確かめてえと思ったのさ。ぷかり、ぷかりと流れる土左衛門を見なかったか、とな」

「見てませんよ。もし、見ていたら大声をあげてます。あたしが見たのは、咲き始めていた藤の花だけ。綺麗でしたもの」

不気味な話を洗い流すとともに、礼を言いたかったのだろう。わずかにあげた眸に、辰吉の想いが表れていた。

「そうか」

答えて、弥十郎はふたたび歩き出した。あともう少し行けば、その左手に〈藤乃家〉がある。この相合い傘のひとときを少しでも引き伸ばしたくて、自然に歩みが遅くなっていた。

「そういえば、これも姐さんに聞いたんですけれど、旦那、〈藤乃家〉の前で賊に襲われたとか」

辰吉が言った。歩みを遅くしたことに異論を唱えるでもなく、歩調を合わせている。

「ああ、風来屋がらみだろうと、おれは思っているがな。ま、いちいち気にしちゃいられねえや」

「お嫁様をおもらいにならないんですか」

と、今度は辰吉が足を止めた。真顔の問いかけに、弥十郎は一瞬、言葉を失う。嫁女をもらって、名実ともに緒方家の当主となり、落ち着けばいいではないか。風来屋などという危ないことはやめて……おそらくは胸に秘めたであろう言葉に、笑顔と冗談を返した。

「貧乏御家人のところになんざ、嫁のきてがあるかい」
軽くかわして歩き出すと、辰吉も急いで隣に来る。
「若さは一時だけですよ」
かちんときたが、こらえた。
「いいときは長く続かねえってか。『月に叢雲花に風』、仕方ねえやな。大食らいで金使いの荒い山姥を食わせていくためには、よろずやをやって稼ぐしかねえのさ」
「だから地道に内職をするとか、そういうことをして……」
「うるせえんだよ」
とうとう堪忍袋の緒が切れた。
「さいぜんから黙って聞いてりゃ言いたい放題、よけいなお世話だってんだ。内職であの山姥を養えるか、ええ、本気でそう思ってんのかよ」
「母子で贅沢三昧するからですよ。もっと倹約すればいいんです」
辰吉も負けていない。きっと睨み返してくる。
「質素倹約、そりゃけっこう、とな。冗談じゃねえや、辰吉よ。おまえさん、いつからお上のまわし者になったんだ。芸者をやめるとなったとたん、偉そうに説教か。自分はいい家に嫁ぐけれど、貧乏御家人は地味に暮らせってか」

「だ、だれが、いつ芸者をやめると言ったんですか。あたしはそんなこと言ってませんよ、考えてもいません」
「ほう、そうかい。嫁に行っても、芸者を続けられると思っているようだがな。それを許してくれるような家じゃねえだろ」
「許すの許さないのと、いったい、なんの話をしているんですか」
「嫁入り話よ、だれかさんのな」
　睨み合う二人に、
「まあまあ、なんの騒ぎかと思えば、弥十郎様と辰吉さんじゃありませんか」
　おっとりとした声が割って入る。いつの間にか〈藤乃家〉の前に着いていた。女将のおふじが、にっこりと笑みを向ける。
「仲がおよろしいこと。とうの昔に雨はやんでいますよ」
「なに？」
　弥十郎は掌を突き出して、雨がやんでいたのを確かめた。悪戯を見つかった幼子のような気持ちになる。思わず照れ笑いを浮かべたが、辰吉は猛然と訴えた。
「仲がいいなんて、やめてくださいな、姐さん。あたしたちは喧嘩していたんですよ、大喧嘩。どこで聞いたのか知りませんけど、つまらない噂話を口にするもんだから」

「はいはい、わかりましたよ。それはそうと、弥十郎様。先日の賊ですけどね。例の白魚の漁師さんが、賊のひとりの顔を知っていました。ほら、あのとき、白魚を届けに来てくれた帰りに、あの騒ぎになったでしょう。船で帰るときに見ていたらしいんですよ」
「なるほど。それで？」
番傘を畳んで、辰吉に渡すと、ひったくるようにして受け取る。おふじはちらりと目を投げてから、告げた。
「どうやら後藤家に出入りしている鳶職人らしいと」
「え？」
辰吉が絶句する。後藤家は見合いの相手の家、そこに出入りしている鳶職人が弥十郎を襲った。襲ったのはどうしてか。脅すためか、なんのためか。それらのことが駆けめぐったのだろう。
「姐さん。お座敷、行けなくなったと伝えてください」
血相を変えて、辰吉は踵(きびす)を返した。
「おい、待て、辰吉」
「辰吉さん、短気は駄目ですよ」
「どうせなら船で行け、おい、聞こえねえのか」

弥十郎とおふじの声が、はたして、届いたかどうか。裾を翻して走り去る辰吉を、二人は見送っている。

「弥十郎様。気づいていらしたんですか」

「いや」

そう答えてから早口で言い添えた。

「なんとなく、な。連中の目は、おれだけに向けられていた。一緒にいた千春のことなんざ、眼中になかったからよ。もしや、と思ってはいたが」

「でも、なぜ、あんなことを……若い衆がなにか勘違いしたんでしょうかね。弥十郎様と辰吉さんの仲を……手を引けということでしょうか」

「手を引くもなにも、おれとあいつの間にゃなにもねえや」

不可解な賊の行動、狙っていたのは弥十郎、自分たちの考えで動いたのか、あるいはだれかに命じられたのか。そこまで考えたとき、不意に閃いた。

「賊のことだがよ。案外、試したのかもしれねえな」

「試す？」

おふじは訝しげに眉を寄せる。

「弥十郎様の腕前を、ですか」

「それもあるかもしれねえが」
曖昧に言葉を濁した。試したのは、そう、辰吉の心かもしれない。血相を変えて怒鳴りこむであろう姿を思い浮かべて、苦笑いする。
――まんまとのせられちまいやがって。
「そこがあいつのいいとこなんだが」
我知らず口に出た呟きは聞こえなかったのか。
「白魚なんですけどね、いかがいたしましょうか」
おふじが訊いた。
「白魚？」
「多香女様からお借りした『白魚大漁』の書、どうやら見事に願いが叶ったらしいんですよ。今朝は大漁だったとか。お礼がてら、賊が後藤家に出入りしている男だと教えに来てくれたんです。白魚はお屋敷にお届けいたしましょうか」
「そうしてくれ。だが、書の礼金であることは言うんじゃねえぞ。守銭奴の山姥は、なにを勘違いしたのか、最低でも十両もらえると踏んでいるからな。よけいなことは伝えねえでくれ」
「承知いたしました。でも、大丈夫なんですか。あとでわかったら、多香女様のお怒りが増

すのでは」
「なぁに、白魚を食わせちまえば、こっちのものよ。すでに『前金』を受け取ったじゃねえかと、いくらでも言いようがある。食い意地を利用するのが得策さ」
「まあ、策士でございますね」
「山姥と渡り合うには、必要な智恵よ」
姑息な企みも生きる術。
そんな弥十郎の頭上を、一羽の椋鳥が飛んで行った。天気雨があがった空は、辰吉の心のように美しく晴れわたっている。

第四章　死の呟き

一

辰吉のことは気になるが、女のことばかり考えてはいられない。
いまだ素性のわからない土左衛門。
弥十郎は〈藤乃家〉から船に乗り、三囲神社に向かった。降り注ぐ陽射しが川面に反射して、眩いほどに煌めいている。にわか船頭役と違い、猪牙船は水面をすべるように進んで行った。
――あの武家屋敷が気になる。
吾妻橋を過ぎたところで、弥十郎は、船をできるだけ河岸に近づけてもらった。ほどなく高い塀をめぐらせた角屋敷が見えてくる。敷地はおよそ二万三千坪、これだけの広さを有しているにもかかわらず、藩邸ではない。水戸家の下屋敷だった。

「旦那、そこの岸につけますか」
顔馴染みの船頭に呼び掛けられる。年は五十前後、深川界隈でも一、二を争う腕前の持ち主だ。
「いや、もう少し行ってくれ。三囲神社の船着き場でいい」
「わかりやした」
年の分だけ技が冴え、飛ぶような速さになっている。目の端を通り過ぎる水戸家の長い塀を、弥十郎は肩越しに見つめていた。
――あの屋敷であれば、中の水路から大川に流れが通じているはずだ。
外まで亡骸を運び出さなくても、邸内を流れる水路に落とせば、そのまま大川に流れ出るのではないか。素性のわからない男は、あの屋敷に奉公していたのではないのか。傷を負って戻った男が死に、その扱いに困って棄てる。棄てたのはすなわち裏に面倒な『なにか』が隠れているからではないのか……？
「すまねえが、也寿に吾妻橋近くの水戸家の下屋敷と伝えてくれねえか」
船を降りるとき、弥十郎は船頭に言った。
「調べろと伝えてくれ。土左衛門の奉公先かもしれねえ。おれがそう言っていたとな」
船頭は也寿とも顔馴染みである。

「承知いたしやした」

快諾して、船を返した。延々と続く水戸家の白い塀が、かなり離れた場所からでも見える。せめて土左衛門の名前だけでもわかれば、という思いが湧いていた。無惨に刺されて死んだ男、関わりはないが、明日は我が身と、らしくないことを考えている。

「辰吉に説教されちまったからな」

ふん、と鼻で笑って、足を速めた。賑やかなのは三囲神社の周辺だけで、あとは突然、青い空が拓ける区域だ。左右に広がる田畑を見ながら、細い畦道を進む。塒をめざしているのか、椋鳥の群れが空の一角を黒々と染めあげていた。まだ七つ（午後四時）にはなっていまい。それでも足が速くなったのは、おこまの不安げな顔を思い出したからだろう。

「む？」

とっさに左手で刀の鍔を握りしめていた。前方の大きな農家から、叫び声のようなものが聞こえている。〈梅若座〉の男衆だろうか。こんな時刻に殺陣の稽古をしているのだろうか。

――おかしい。

弥十郎はするすると忍び足で近づいて行く。近づくにつれて、叫び声が助けを呼ぶものだとわかった。

「だれか来てくれっ」

「佐兵衛さん、おこまちゃん！」

二人の男が大声をあげている。開け放ったままの柴折り戸を通り抜ける間に、弥十郎は鯉口を切った。前庭にいたのは、四人の侍、すでに刀を抜き、佐兵衛と二人の男衆を家の壁際に追い詰めている。弥十郎は気配を消して忍び寄ったが、

「用心棒だ」

ひとりが振り向きざま、袈裟掛けに斬りつけて来る。弥十郎は斬りこませておいて、その刀を巻き落とした。刀を拾おうとした男の肩口を、据え物でも切るように鋭く打つ。

「ぎゃっ」

ひと声、絶叫し、男は地面に斬られた肩口から倒れこむ。他の三人が素早く二間ほど後ろにさがった。弥十郎を油断ならない敵とみなしたのかもしれない。ひとりが弥十郎並みの大男、二人は小柄な体軀の持ち主たちである。大男が二人に「わしが先に行く」というような合図を目で送った。

大男はすり足で横にまわる。珍しい下段の構えで、さらに半歩、横に足を移した。剣先があがった刹那、大男は疾風のように打ちこんで来た。同時に踏みこんだ弥十郎の刀が宙に閃く。その動きの方が一瞬、速かったに違いない。

「くっ」

大男の右手首から鮮血が迸った。だが、取り落としかけた刀を左手で握りしめるや、斬りつけて来る。弥十郎はその刀を撥ねあげ、素早く真っ向斬りを叩きつけた。手加減している余裕はない。

「ぐ、ぁ……」

目を見開き、身体を硬直させて、大男はその場にくずれ落ちる。残る二人は蟹のような極端に低い姿勢を取っていた。攻めではなく、守りの姿勢のように見える。伊達に着物を台無しにして来たわけではない。血腥い今までの立ち合いが、蟹男たちの流派を教えていた。

――馬庭念流か？

攻めるよりも守りを主体にした流派だが、守りが攻めに転じたときの底知れない怖ろしさがある。二人は蟹の置物のように動かない。が、弥十郎がまさに斬り合いの間合いに入ろうとしたとき、ひとりが足を踏みかえた。右足が前に出て膝がゆるみ、男の身体がわずかに沈む。弥十郎は反射的に足を止めた。

――攻めて来る。

地を踏みしめながら、男の右にまわる。相手も身体をまわしたが、その足運びがかすかに乱れた。常人では気づかないであろう乱れ、弥十郎は猛然と斬りこんだ。踏みこんで相手の肩を一撃する。が、男は無理にかわそうとはせず、そのまま地をなめるように沈みこんだ。

地面と一体化したかのような動きで、弥十郎の脇をすり抜ける。凄まじい一撃が、脇腹を掠めた。

間一髪、直撃をかわして、向き直る。

「やるじゃねえか」

なかば本気で賛辞の言葉を洩らしていた。弥十郎の剣先は、男の肩の肉を裂いたはずである。しかし、弥十郎も脇腹を斬られていた。男の下段から摺りあげて来た剣が、着物を裂き、皮膚を掠っていったのである。たいした怪我ではないが、手強い相手であるのは間違いない。

「またお袋にぶつぶつ言われちまうぜ。やはり〈白木屋〉に新しい着物を頼めばよかったものを、とな」

軽口を叩きつつ、剣を青眼から八双に構え直した。二人の蟹男たちは、しばし動かずに見守っていたが、引き揚げ時と思ったのかもしれない。絶命した大男を抱えあげ、後ろにさがっていたひとりを促して、柴折り戸から出て行った。

前庭には、不気味な静寂が訪れる。

「お、緒方様」

最初に声をあげたのは佐兵衛だった。

「お怪我は大丈夫でございますか」

「大事ない」
弥十郎は三人を振り返って、はっとする。
「おこまはどうした？　どこにいる？」
娘の姿が見えない。まさか、今のやつらに斬り殺されてしまったのか。顔色を変えた三人とともに、家の中に飛びこんだ。
「おこま、無事か、どこだ？」
雪駄のまま駆けあがり、座敷から廊下、厠、台所へと移動する。
おこまは台所にいた。
勝手口の手前に立ったまま、凍りついたように動けなくなっている。小さな両手に包丁をしっかりと握りしめていた。
「おこま」
弥十郎が呼び掛けても答えない。何度目かの呼び掛けに、震えながら告げた。
「お、おじ、おじい、ちゃんは？」
「わしは大丈夫だ。ほら、ここにいる」
佐兵衛が答えて、目を合わせても、おこまは動けなかった。蒼白な顔で唇をわななかせている。弥十郎は包丁の柄からおこまの指を、一本、一本、引きはがしていった。小さな細い

指が、離れるのはいやだとでもいうように、包丁の柄に固く張りついてしまっている。指を折らぬよう、細心の注意を払いながら、ようやく包丁を取りあげた。

「案ずるな。連中はもうおらぬ」

「ああ」

吐息とともに、おこまの身体から力が抜ける。抱き留めた佐兵衛は、気を失った娘を二人の男衆に託した。

「奥で寝(やす)ませてやっておくれ」

「はい」

運ばれて行く娘を、弥十郎は複雑な思いで見つめた。おこまが物陰に隠れて震えていれば、あたりまえのことと思い、こんな疑問は持たなかったものを。

「いざとなれば、ご隠居を助けようと思っていたようだな。健気じゃねえか。相手がだれであろうと、立ち向かって行くつもりだったんだぜ」

「……」

「前にもこういうことが、あったんじゃねえのかい」

わざとらしく、佐兵衛の右手に目を向ける。巻かれている白い晒し、男衆はかぶれたのではないかと言っていたが、はたして、本当なのか。以前にも襲われたことがあって、そのと

きに受けた傷ではないのか。その佐兵衛を助けようとして、はからずもおこまは凶賊に挑んだのではないか。

「……」

沈黙が答えだった。

「おれはおりるぜ」

弥十郎は切り札を出すしかない。佐兵衛はどきりとしたように目をあげる。

「緒方様」

「見てわかっただろう。二人はたいした相手じゃなかったが、蟹のような構えをしていた二人は遣い手だ。他にもまだいるかもしれねえ。あんなやつらが相手じゃ、命がいくつあっても足りゃしねえや。おまけになにも話せないときてやがる。命を懸けろって方が無理じゃねえのかい」

「緒方様のおためなのです」

懇願するように言った。

「知れば、緒方様も命を狙われます。虫のいい話であるのは、百も承知でございます。お金のことは言いたくありませんが、礼金ははずみます。どうか、どうか」

腰を折るようにして、頭をさげる。正気づいたおこまが、廊下に姿を見せていた。祈るよ

うに手を合わせられれば、弥十郎も冷たくできない。
「ひとり、助っ人を呼んでもいいか」
頭を掻きながら言った。
「はい。緒方様の仰る方であれば」
「それから、もうひとつ。できるだけ早いうちにここを離れた方がいい。江戸を離れられねえってんなら、しばらくの間、旅籠を変えながら姿を隠すんだな。ほとぼりが冷めるまでよ」
「わたしも同じことを考えておりました。あと三日、いえ、二日だけでもいいのです。明日はここで『運座のようなもの』を執り行うのです。今更、取り止めることはできませんので」
「わかった」
気は進まないが、先刻のおこまの様子を思い浮かべると、引き受けるしかなかった。勝手口から徐々に暗闇が忍び入ってくる。
――『無音の音』か。
善悪の考えがなにひとつない自然の気配。そこに心を向けると、書の境地になると多香女は言った。

弥十郎は闇の中に、風の音を聞いている。

二

翌日。

未明から佐兵衛の隠居所には、商人や料理人が出入りしていた。次々に届けられる山海の珍味や新鮮な野菜を、料理人が手際よく膳のひとつに仕上げていく。〈梅若座〉の男衆も手伝いに加わり、座敷の掃除に取りかかっていた。

「昨日とは、うってかわってというやつだな。通夜のような重苦しさだったが、夜が明けたとたん、これだ」

弥十郎の言葉に、悪友がすかさず答える。

「あたしのお陰でしょうねえ。日頃の行いがいいから、ご褒美があるんですよ。それに引き換えだれかさんは」

宗順は皮肉っぽい眼差しを投げた。二人は朝陽があたる前庭の一角を眺めながら、邪魔にならない座敷で茶を飲んでいる。宗順など呼びたくはなかったが、見た目は女形もどきでも柔術の遣い手。そのうえ、口も堅い。悪態をつきながらも、結局、弥十郎は相棒を頼りにす

るのだった。
「は。おれの人徳だ、おめえのじゃねえや」
切り返して、「それにしても」と続ける。
「隠居所でも運座とはな。辰吉が言っていたとおり、あちこちで開かれているようだぜ。風流なこった」
「運座ではなくて、『運座のようなもの』と、ご隠居は仰っていたじゃありませんか。短歌を読み解くとか。あたしも楽しみですよ」
「楽しむのはいいが、気をぬきすぎるんじゃねえぞ。酒は飲むな」
「おや、いつになく慎重じゃありませんか」
「言っただろう、昨夜の蟹男たちよ。馬庭念流だと思うが、おそろしいほどの遣い手だった。酒が入っていたら危なかったかもしれねえ」
思い出すだけで、鳥肌が立ってくる。強い相手に出会えたという喜びもあるのだが、それ以上に得体の知れない不気味さを覚えていた。
「正体がわからねえってのは、いやなもんだぜ」
「知らない方がいいこともありますよ」
「ふん、佐兵衛と同じ考えか」

不満げに鼻を鳴らしたが、いずれにしても、あと数日の用心棒役だ。はずむと約束してくれた礼金を楽しみにした方がいいだろう。

「ま、あれこれ考えるよりも小判よ」

「そのほうがおまえさんらしいですね。それにしても、と、あたしも思いますよ。連中、よく死んだ大男を運びましたね。近くの川に船でも繋いでおいたんでしょうか」

ひとり仕留めたことについても当然のことながら話してある。大男ゆえ相当重かったはずだが、仲間の亡骸を置いていくのが忍びなかったに違いない。自分たちも怪我をしていたにもかかわらず、かなり無理をして運び出している。

「船か。運んだことまでは考えなかったが、そうかもしれねえな」

「無理にでも連れて行きたかった、つまり、それだけ絆が強かったということになりますね。身なりはどうだったんですか。牢人のような感じだったんですか」

「いや、牢人じゃねえな。どこかの家中の者という雰囲気だった」

「そして、旦那は佐兵衛さんに、『連中はだれだ』と訊いたが、佐兵衛さんはなにも答えない。『知れば、緒方様もお命を狙われます』ですか」

「話が戻ったな。言っただろ、あれこれ考えるよりも小判よ」

「右に同じですが、では、話を変えましょう。今朝方、そう、あたしが一度、お屋敷に顔を

出したとき、ちょうど也寿も来ましてね。〈藤乃家〉の船頭さんからの言伝、確かに聞いたと言っていました」

宗順は急に声をひそめる。

「おまえさん、水戸家を調べろと言ったとか」

「正しくは、吾妻橋近くの水戸家の下屋敷だ。土左衛門が見つかったじゃねえか。おれも亡骸を見たが、やけに綺麗でな。土左衛門独特の身体が白く膨れあがったような姿じゃなかったのさ。それに」

と、言いかけて口をつぐむ。辰吉の船頭役として、あのあたりを通ったとき、弥十郎と辰吉は亡骸に出くわしていない。也寿に指摘されたあれも引っかかっていた。亡骸は流れて来たのではなく、水戸家の下屋敷の水路に投げこまれたのではないか。それが大川に流れ出てすぐに見つけられたのではないのか。

「それに、なんですよ」

焦れったげに宗順がせっついた。

「意味ありげに言って、気持ちが悪いったら」

「いや、ぷかり、ぷかり、よ。それに出くわさなかったんで、おかしいとな、思ったわけさ。そんなことより、お袋だ。白魚を届けさせたんだが、お召しあがりになられたか」

「話を変えたというのは、辰吉姐さんがらみということですね。まあ、いいでしょう。多香女様は、美味しかったと仰っていましたよ。それがどうかしたんですか」
「よし、礼金は間違いなく受け取ったな」
「礼金？」
「なんでもねえ。お袋も昨日、運座に招かれたんだが、書は売れたんだろうな。そのことについては、なにも言っていなかったか」
「いえ、別に。ただ」
悪友はさも意味ありげに言葉を切る。
「いやなやろうだな、ええ、宗順よ。まあ、やられたらやり返すってのが、おまえの身上だからな。今更、言っても始まらねえが」
「失礼いたしました。およねさんなんですよ」
「およねがどうかしたのか」
「やけに浮かない表情をしていましてね。徳兵衛さんが、何度も言い聞かせるように話しかけていたのが、ちょいと気になりまして」
「そういえば」
弥十郎も思い出していた。運座が開かれる料理屋に多香女を送って行く前、およねは物言

いたげな表情をしていたのではなかったか。
「お袋になにか言われたのかもしれねえな」
「多香女様は、ご機嫌でしたよ。豊臣家の財宝について、それはそれは楽しげに話しておられました。あれですね。初世様は、人に夢を与える娘ですね」
「ものは考えようってか。おれから見ると、ただの無駄飯食らいだがな。千春の行方はいまだわからず、さて、いつまで預かればいいのやら、だ」
「いつも無駄飯食らいだの、大食らいだのと言われているから、たまには言いたいんですね」
「うるせえ」
「あ、そうそう、忘れるところでした。〈桔梗屋〉からも使いが来たんですよ。時間がありましたんで、代わりに行ってみたんですが」
「おめえは坊主のくせに、岡場所にまで行くのか」
悪態の後で、いやな胸騒ぎを覚えた。
「まさか、今になって花代の催促じゃあるめえな。おれは今もわからねえのさ。なぜ、この間のときだけ、花代が足りなくなったのか」
「物が高直になっているんですよ」

宗順が言った。

「あたしもちょいと引っかかりましてね。調べてみたんですよ。いくら算術が苦手とはいえ、花代の計算もろくにできないとは思えませんでしたから」

「算術が苦手云々は気に入らねえが、要するに、こういうことか。岡場所だけでなく、すべてにおいて物の値があがっていると」

「ええ。三月に入ってから急にですよ。あたしも支払いをするときに、何度か確かめたことがあるんです。そこへ『居残さん』の騒ぎですからね、と、話が逸れました。どうやら〈桔梗屋〉は、風来屋に用心棒を頼みたい様子なんですよ」

「『居残さん』転じて、ふたたび用心棒となるか。引き受けたいのは山々だが、今は手いっぱい。身体が二つほしいぐれえだ」

「そう仰ると思いましたんで、しばらくは無理だろうと言っておきました。用心棒を頼む理由、知りたくありませんか」

もったいつけて、流し目をくれる。本人だけが色っぽいと思っているので相手にしない。

「別に知りたかねえや」

そっけなく答えた。

「またわざとらしく、冷たい素振りをして。聞いてくださいよ、興味があると思いますよ。

なんとあの喜伝次さんが、うろついているらしいんです」
「喜伝次？」
一瞬、顔と名前が繋がらなかったが、すぐに「ああ」と呟いた。
「本所緑町の下駄屋か。しかし、夜逃げしたはずだろう。うろうろするのはまずいんじゃねえのか」
「と、あたしも思うんですけどねえ。おもんでしたか。若い遊女によほど未練があるんでしょうかね」
「未練があるのは、おもんじゃねえように思えたがな」
弥十郎の頭にはあのときの光景が浮かんでいる。きつい口調でおもんに詰め寄っていた喜伝次。
〝おまえが、おまえのせいだ。大丈夫だと言ったから〟
なにが大丈夫だと言ったのか。おもんの口も佐兵衛同様、重かったのを憶えている。
「後で様子を見に行ってみるか」
「は。なにを見に行くのかわかりゃしませんね。弁天様でも拝みに行くつもりじゃないんですか」
「拝みついでに、これよ」

なかば開き直って、傍らに畳んでおいた着物を示した。本所の屋敷に使いを出す折、着替えも持って来るよう頼んだため、弥十郎はすでに着替えを終えて、伊達男を気取っている。

「破けちまったから、〈藤乃家〉の女将に繕ってもらおうと思ってな。お袋は縫い物が下手だからよ。おふじにいつも頼むのさ」

「へえぇ、女将に。そうでしたか」

宗順はやけに含みのある言い方をした。目にも皮肉がたっぷりこめられている。辰吉姐さんに逢いたいから、〈藤乃家〉にも足を向けるんじゃないんですか、わかっているんですよ。そういう含みだと思った。

「あいつはじきに嫁入りだ」

「気のまわしすぎですよ。あたしは、辰吉姐さんのことなんか言っていませんよ。墓穴を掘りましたね。自ら打ち明けたような……」

「ああ、わかった、わかった」

遮るように言って、立ちあがる。

「貧乏御家人は、稼がなきゃならねえ。ちまちまと内職するだけじゃ、うちの山姥の腹は満たせねえからな」

そろそろ客が集まり始めているのか、人のざわめきが伝わってきた。風雅な催しで、昨日

の血腥さを一掃する。

自称、鼻緒問屋だったという隠居は、訪れる客たちに、あふれんばかりの笑みを向けていた。

三

「まずは弥生尽（やよいじん）の歌と参りましょうか」

口火を切ったのは、佐兵衛であろう。弥十郎は庭に、なにをするでもなく佇んでいる。宗順は近くを見まわって来ると言い、柴折り戸から出て行った。周囲は田畑に囲まれた場所ゆえ、昼間はかなり遠くまで見渡せる。

――宗順のやつ、なにを探しているのか。

弥十郎ほどではないものの、悪友もかなり上背がある。水戸家の下屋敷の方に歩いて行く宗順がよく見えた。時折、畦道に屈みこんでは、動かなくなる。なにかを探しているような仕草をしていた。

「逝く春をとどめかねぬる夕ぐれはあけぼのよりもあはれなりけり」

座敷では、西行法師の歌が詠みあげられる。

「もはや春を引きとどめることはできない弥生尽。さよう、じきにその弥生尽でございます。この夕暮れという表現のなんと趣深いことでありましょうや」

佐兵衛の言葉に、だれかが続く。

「かぎりあれば衣ばかりはぬぎかへて心は花を慕ふなりけり」

これも西行法師の歌だった。佐兵衛が応じる。

「いかに春を惜しんでも限りがあるから、仕切りどおり衣を夏の装いに改めたものの、気づいてみれば、心はなおも桜の花を慕い、過ぎ去った春を慕っている。なるほど、過ぎ去ってみなければ、わからないこともありますな」

最後の部分で、座が小さく沸いた。集まっているのは全部で六人、侍も二人いたため、弥十郎は少し興味を覚えている。二人とも年は五十前後、仕立てのいい羽織と袴姿だったが、供は従えていない。もっとも帰る頃、駕籠が迎えに来るのかもしれなかった。

――西行法師か。

いやでも、おもんのことが甦っている。『ねがはくは』と俗事をからめたあの歌もまた西行法師だったはず。西行法師の歌をもとに詠むことが流行っているのかもしれない。

――ということはだ。おもんの客という男も、近頃、あちこちで催される運座に出ているというわけか。

「弥十郎様」
おこまが、勝手口から顔を突き出した。
「甘酒を作ったんですけど、いかがですか」
「おう、馳走になろう」
「宗順様は」
庭を見まわして、目をあげる。
「あいつのことはいい。そのうち戻って来るだろうさ」
用心のために刀は外さず、勝手口の前で甘酒を飲んだ。おこまは初めて会ったときのように、目をくりくりさせている。
「あたし、歌ってよくわかりません。短歌と俳句って、どう違うんですか」
昨日の恐怖は、今のところ消えているようだ。わざわざ思い出させることもない。弥十郎は柴折り戸の方を見やりながら、答えた。
「短歌は和歌の一体で、五・七・五・七・七という五句体の歌だ。俳句というのは、五・七・五、さらに季語、わかるか、鶯は春、金魚は夏というやつだ。これを用いなくてはならないという決まりがある。川柳ってのは、季語を外して簡単にした歌よ。近頃は川柳が主体のようでな。町内ごとに投句会なんぞもできている」

「へえ。おじいちゃん、今日は『わしは点者(てんじゃ)だ』と言っていましたけど」
「仕切る役目のことだ」
話している間も、座敷の方から歌が流れてくる。
「春過ぎて夏来(きた)るらし白栲(しろたえ)の衣乾(ほ)したり天の香具山」
佐兵衛がひときわ大きな声を張りあげた。
「春が過ぎて夏が来るらしい。青葉の中に衣が乾してある、天の香具山は。万葉集の中の持統天皇の歌でございます。これにわたしはこのような解釈をいたしました」
「佐兵衛さん」
だれかが慌てたように呼び掛ける。が、佐兵衛はさらに続けた。
「白い衣は羽衣、これを盗めば、天下が取れる。春が過ぎて夏が来るように、動乱が起こり、天下は自分のものとなる。機会が訪れたのだ」
一気に話し終える。
不意に、しん、と、静まり返った。
座敷から人が消えたように、気配がとらえられなくなる。一瞬のうちに佐兵衛も客もいなくなり、無人の部屋となったかのように……だれもがその場から消えたいと思っているかのように……。

永遠に続くかと思われた沈黙の後、
「つまり」
佐兵衛の押し殺した声が響いた。
「これは、天下取りの歌ではないかと、わたしは思うのでございます」
「考えすぎでございましょう」
「いかにも」
「面白い解釈ではござるが」
いっせいに反論があがり、にわかに騒がしくなる。叫ぶように声を張りあげる者、負けじとさらに大きな声で反論する者。不気味なまでのあの沈黙は、いったい、なんだったのか。
「凄い騒ぎですね」
宗順が柴折り戸を開けて、こちらに歩いて来る。座敷の会話はもはや聞き取れないほどだった。激しいやりとりの応酬になっている。時折、だれかが宥めるように割って入るのだが、その声さえも掻き消されている。
「ずいぶん賑やかな歌の会ですねえ」
呆れ顔の宗順に、弥十郎は、おこまから受け取った甘酒を渡した。
「天下取りの歌だとよ」

「は？」

「万葉集さ。天の香具山の歌が、天下取りの歌なんだとさ」

「白栲の、というあれですか。初めて聞きましたね。天下取りに縁のないあたしとしましては関わりなきこと。もっと身近なことに話を戻したいと思います。昨日の蟹男たちですがね。どうも足跡を消して行ったみたいですよ。途中から足跡が、わからなくなってしまいまして」

「確かめに行ったのか」

呆れたように見やる。

「あたりまえじゃないですか。笊男は気にならないようですけどね。もしかしたら、足取りを辿れるかもしれないと思ったんですよ。大男ならずとも亡骸は重いもの。運ぶのにひと苦労するのは自明の理。引きずるじゃありませんか。その跡が途中まではちゃんとあったんです。ところが、そこから先が辿れない。ご丁寧にわざわざ戻って来て、足跡を消していったわけですよ」

「長々とありがとうよ。ありがたくて涙が出そうだ。しかし、船で運んだんじゃねえかと言ったのはおまえだぜ。川までの足取りを辿ったところで、そこから先はわかるまいさ。無駄なことをしやがる」

「そうでしょうか」
宗順は自信ありげだった。弥十郎は気のない問いかけをする。
「違うのか」
「ふふふ、おまえさんと同じかもしれませんよ」
「おれと？」
「辰吉姐さんのことですよ。急に話を変えたのはすなわち、辰吉姐さんのことを考えていたから。考えていたんだと、自ら露呈したも同然じゃありませんか。連中も同じですよ」
「自ら露呈、連中も同じ」
繰り返したが、答えは出ない。
「おめえの話はわかりにくくていけねえや」
「足取りがわからなくなったのが、手がかりなんですよ。いえ、足がかりかもしれませんね。足跡を消して、まさに足がついた。我ながらいい勘ですよ」
と、なにやらひとりごちる。
「おれが褒めねえから、自分で褒めるしかねえな。とにかく、おれは今のうちに、ちょいと用件を片づけてくらあ」
「駄目ですよ」

腕を握りしめようとした宗順から、素早く離れた。
「おっと、危ねえ。おまえに摑まったら最後、『安珍清姫』の清姫ばりに、絡みついて絞めあげられちまうからな」
急いで家に飛びこみ、座敷に通じる廊下に置いておいた風呂敷包みを手に取った。宗順が不安げな声をあげる。
「あたしひとりに押しつけて、逃げるつもりですか」
「日暮れまでには戻って来る」
「本当でしょうね。日暮れまでですよ」
追いかけて来る声に片手をあげて、弥十郎は柴折り戸から飛び出して行く。座敷の激しいやりとりも今は聞こえなくなっていた。

四

隠居所を離れるほどに心は浮きたち、都々逸が口をついて出る。
「重くなるとも持つ手は二人、傘に降れふれ天気雨、とね」
緋色の番傘の場面を思い出しては、にやにやしていた。今日はその天気雨さえ降りそうも

ない。懐手になって、晴れわたった空を見あげる。

——じきに嫁入りか。

気がつくと、辰吉のことを考えていた。弥十郎を襲った賊が、後藤家に出入りしていた鳶職人とわかり、血相を変えていたが、どうなっただろうか。〈藤乃家〉に向かう足が、自然に速くなってくる。

「ん？」

角を曲がろうとしたとき、おかしな気配を感じた。尾行されているように感じたのである。二人の若い男が、なにげない足取りで横を通り過ぎて行く。男たちが〈藤乃家〉を通り過ぎて行ったところで、ちょうど女将のおふじが中から出て来た。

「おや、弥十郎様」

すぐに気づいて、笑みを向ける。いつも身綺麗にしているが、今日は化粧に気合いが入っているのを感じた。

「出かけるのか」

「富岡八幡宮まで、芝居見物ですよ。ほら、今、評判になっているじゃありませんか。おさよさんとあれを観に行こうと思いまして」

おさよは下働きの小女である。すぐに出かけるのかと思い、弥十郎は見世の中をちらりと

見た。

「おさよはいねえのかい」

辰吉のことを訊いたように感じたのかもしれない。

「ちょいと、そこまで買い物に行ってもらったんですよ。どうぞ、おあがりくださいな。おさよさんが戻って来るまでの間、お茶ぐらい差し上げられますよ」

おふじは包みこむような笑顔を浮かべた。酸いも甘いもかみ分けた苦労人だからだろう。姉のいない弥十郎は、どこか姉のように頼りにしている部分がある。

「ありがてえ。向島から歩きづめでよ。喉が渇いていたんだ」

男たちが立ち去った方角を、用心深く確かめてから中に入る。いつもは二階にあがるのだが、今日は流石に時間がない。それでも当然のように帳場に腰を落ち着けた。持って来た風呂敷包みを傍らに置くや、おふじがこれまた当然のように受け取る。

「また危ない思いをされたんですね」

「なぁに、それほどの騒ぎじゃねえ。脅しだろうぜ。やり合ったときに、脇腹のところをほんの少しだけ斬られちまってな。すまねえが、いつものように頼む」

「よござんす、とお答えしたいところですがねえ」

おふじは珍しく渋った。

「なんだ、あてにしてきたのによ。前にも言ったと思うが、うちの山姥は縫い物に関してはまるで駄目でな。およねも近頃は目が悪くなっちまって……」

「いえ、実はあたしも縫い物は駄目なんですよ」

早口で遮る。

「え？」

と、弥十郎はおふじを見つめ返した。そうか、宗順のやろう、気づいていたのか。悪友の意味ありげな言動が、ほとんど同時に浮かんでいる。辰吉に逢いに行くのだろうという皮肉や厭味だとばかり思ったのだが、もうひとつ、こういう意味もあったのかもしれない。

一瞬、間を置いて言った。

「それじゃ、今までおれの着物を繕ってくれたのは」

「はい。辰吉さんなんですよ」

大きく頷いて、続ける。

「口では『ろくでもない稼業』だの、『危ないことばかりして』だのと言っていましたけどね。繕うときは、そりゃもう、一針、一針、心をこめて丁寧に縫っていました。声を掛けられないほど集中するんですよ。辰吉さんの想いがこもっていますから、綺麗に仕上がるのもあたりまえでしょうねえ」

「そう、か。辰吉が」

おふじが広げた風呂敷を、あらためて見る。破れているだけでなく、ところどころ返り血らしき黒い染みが浮かびあがっていた。ひどいときは洗い張りに出すのだが、これぐらいの染みであれば、ほとんどわからないほどになって、いつも返ってくる。染みが付いたところをつい手でふれていた。

「染み抜きも、ちゃんとしていましたよ」

おふじはさらに言った。

「あの子、洗い張りの名人の家に行きましてね。染み抜きの技を教えてもらったんです。お座敷用の着物がよく汚れるから、なぁんて言い訳していましたけど」

しんみりとした口調に、弥十郎はどうしようもなく心を乱された。なにをしろと言うのか、辰吉を嫁にもらえと言っているのか。確かにできないことではない。だが、今、決心しろと言われても……。

「女将。おれは」

「失礼いたします」

男の声が玄関で響いた。

「あら、だれでしょうね」

おふじは出て行ったものの、すぐに戻って来る。
「どうしましょうか、弥十郎様」
不安げな目をして座りこむ。
「なんだ、おれに客か？」
「ええ。そうなんですけれど、でも、あの、辰吉さんを呼んで……」
「後藤龍吾と申します」
座敷の戸口で、不意に挨拶される。宗順の奢りで昼酒を楽しんだあの日、向かいの料理屋から出て来た男だった。辰吉の見合いの相手であるのは言うまでもない。
「え、あの、勝手にあがって来られちゃ困りますよ」
狼狽えるおふじに、弥十郎は告げた。
「おれはかまわねえよ」
視線で入るよう促すと、龍吾は小さく会釈をして、弥十郎の前に来る。先刻の尾行者は後藤家の奉公人に違いない。おそらくはそうであろうと思ったが、はっきりさせておかないと気のすまないたちである。
「ここと〈瓢六〉を見張らせていたのか」
率直な問いかけを発した。

「へい」

龍吾もまた似たような気質らしい。

「お屋敷では、いささかまずいのではないかと思いやして」

悪びれたふうもなく答える。

「なるほど。気遣ってもらってすまねえな。それで？」

問いかけた弥十郎の隣に、おふじが落ち着かない素振りで腰をおろした。辰吉を呼びに行かなくてもいいのか。そんな目を何度も投げている。が、弥十郎はなにも答えない。真っ直ぐな眼差しを向ける龍吾を、真っ直ぐ見つめ返していた。

「まずはお詫びをと思いやして」

いきなり深々と頭をさげる。

「先日は、うちの若い者が、とんでもねえ真似をいたしやした。まことに申し訳なく思っておりやす。なにを勘違いしたのかわかりやせんが」

窺うように、ちらりと目をあげた。勘違いしたのではなく、龍吾が命じた襲撃ではないのかと、弥十郎は考えている。さまざまな思いをいだいていたが、

「おれは気にしちゃいねえよ」

あっさりと言った。本当に話したいのは、こんなことではあるまい。自分と辰吉の仲を疑

っているのではないか。怒鳴りこんだ辰吉を見て、龍吾はそれを確信したのではないか。互いの心を推し量るような沈黙が流れた。

「お優羽さんは、こう言っておりやした」

龍吾が口火を切る。辰吉と呼ばず、本名で呼ぶのは、本音で話したいという気持ちの表れかもしれない。目をあてたまま、龍吾は続けた。

「自分には、心に決めた男がいるのだと。そのお方は『おまえになにかあれば必ず助けに行く』と約束してくれたのだと」

ふたたび気まずい静けさが訪れる。おふじは、困ったような顔をして、弥十郎と龍吾を交互に見つめていた。口を挟みたいのだが、挟めばよけいに話がややこしくなる。龍吾同様、弥十郎の出方を見守っていた。

「いいねえ」

軽い口調で言い、苦笑する。

「おれも一度でいいから、そんな台詞を言ってみたいもんだぜ」

「緒方様ではない、と？」

龍吾の視線と言葉に、強い疑惑が滲んだ。辰吉の周辺を調べた結果、唯一、浮かびあがったのは、緒方弥十郎。嫉妬なのか、それとも他になにか考えがあってのことか。わざわざこ

んなことを言いに来たその真意とは……。

——もしや。

弥十郎は、はっとした。この男は辰吉の想いを代わりに伝えに来たのではないか。むろん頼まれたわけではない、あの辰吉がそんなことを頼むわけがない。嫁にと望んだ女に、惚れた男がいるとわかって、よし、このおれがひと肌脱いでやろうじゃねえかとなったのではあるまいか。

——いい男じゃねえか。

男心に男が感じて、弥十郎もひと肌脱ぐ覚悟を決める。

「女将、酒だ」

「え？」

「まずはお近づきの印に、一杯、飲ろうってことよ。いけるクチなんだろう、龍吾さんとやら」

「へい」

龍吾は答えた後、「ですが」と切り返した。

「まだお返事を聞いておりやせん。お優羽さんと旦那は、どんな関わりなんで？」

「関わりというほどのこたぁねえや、そう、飲み仲間ってとこさ。行きつけの居酒屋でたま

たま逢ったときに飲むぐれえの仲よ。ま、辰吉はあのとおりの美い女だからよ、何度も口説いたがな。身持ちの堅え女で、おれは振られっぱなしさ」

「ですが」

反論しようとした龍吾を素早く遮る。

「おおかた辰吉は、見栄を張ったんだろうぜ。浮いた噂のひとつや二つ、あって当然の辰巳芸者。あたしにだって、男のひとりや二人ってとこじゃねえのか。なあ、女将」

と、おふじに同意を求めた。

「はい。弥十郎様の仰るとおりですよ。辰吉さんには、そんな男、いやしません。あの子が芸者になる前から、あたしは知っていますけどね。聞いたことありませんよ、男の噂話は」

「真に受けねえことだ。女ってやつは見栄を張る。うちの山姥なんか見栄を張りすぎて、二進も三進もいかなくなっちまってら。お陰でおれが尻ぬぐいをしなきゃならねえ、と、こいつはすまねえな。愚痴になっちまったぜ」

視線に促されて、おふじが腰を浮かせる。

「はいはい、わかりました。あたしの芝居見物は、また明日にでもいたしましょう。どうぞ、一杯、飲って……」

「すみません。こちらに弥十郎様はおいでですかい」

息せききって、也寿が飛びこんで来た。ただならぬ様子に、弥十郎は刀を持って立ちあがる。複雑な思いを秘めた酒宴は、しばしお預けか。

「どうした」

「〈桔梗屋〉でさ。夜逃げした下駄屋の主が」

「喜伝次か」

雪駄を履き、也寿のあとを追いかける。

稼がぬ者に憩いなし。

多香女の言葉どおりになっていた。

五

「へへ、あっしの勘働きも捨てたもんじゃありませんね。旦那は〈藤乃家〉に違えねえと思ったんでさ」

走りながら、也寿が言った。

「どうせ次はおれの家に行くつもりだったんだろ。そんなことはいいからよ。なにが起きたのか話せ」

飛ぶように走る弥十郎の後ろに、也寿が死に物狂いで付いていた。背丈の違いは歩幅の違いになるため、すぐ後ろに付くのも楽ではない。ふだんであれば、わざと歩みを遅くするのだが、今は先を急いでいる。

「なにが起きたかと、お話しするほどのことはねえんでさ。番屋に知らせが来ましたんで、行ってみたところ、騒ぎになっておりまして。たまたま男衆が見世先にいなかったらしいんでさ。その隙を縫って、喜伝次は押し入ったとか」

二人は小さな橋をいくつか渡り、深川一色町の河岸を進んでいる。時刻は八つ半（午後三時）頃だろうか。まだ陽は高いが、隠居の用心棒という役目が残っている。長引くのは避けたいというのが、正直な気持ちだった。

「おもんはどうした。殺られたんじゃねえだろうな」

「人質に取られてまさ。いや、もしかしたら、殺るつもりだったのかもしれませんがね。いざとなったら怖じ気づいたのかもしれません。とにかく、おもんに包丁を向けたまま、二階の座敷に籠もってるんでさ」

「おまえじゃねえが、おれの勘働きも満更じゃねえな」

ひとりごちて、足を速めた。亥ノ口橋という小さな橋を渡れば、永代寺門前の山本町に出る。

「先に行くぜ」
弥十郎は裾が乱れるのもかまわず、突っ走る。このあたりは特に道が細いうえ、すでに野次馬でごった返していた。
「ええい、どけどけ、どかねえか」
蹴散らすようにして先を急ぐ。その勢いと大男であることが功を奏したのだろう。人垣が左右に分かれて、道ができた。
「風来屋の旦那」
〈桔梗屋〉の男衆のひとりが、駆け寄って来る。
「助かりやした。どうぞこちらへ」
先導役となった男に、弥十郎も続いた。言いたくないがという感じで、文句が口をついて出る。
「おめえたちは、いったい、なにをしていたんだ。喜伝次がうろついていることは百も承知だったんだろ。気をつけていたんじゃねえのか」
「もちろんでさ、目を光らせておりやした、へい。いつ中に入ったのか、あっしらにもよくわからないんでさ。気がついたときには二階の座敷にいたんでさ。おもんの叫び声で知ったような有様でして」

「隙を衝かれたってことか。目の光らせ方が足りねえんだよ」
舌打ちして、男衆ともども野次馬の間をすり抜ける。この時刻はどこか間のぬけたような、物憂げな空気が漂う場所なのだが、今日はあきらかに様子が違っていた。野次馬ばかりでなく、他の見世からも遊女や男衆が顔を覗かせている。〈桔梗屋〉の前では、主の幸蔵が首を伸ばすようにして待っていた。
「緒方様」
「おもんは無事か」
「はい。今のところは大丈夫です。二階へ」
主の言葉が終わらないうちに、弥十郎は見世に入り、階段を駆けあがっている。気配を察したのかもしれない。突如、女の凄まじい絶叫が響いた。
「おもん！」
弥十郎は座敷に飛びこみ、突き出された包丁を叩き落としながら、喜伝次の鳩尾に拳を食いこませる。気を失った男を蹴り飛ばすようにして、押しのけた。おもんは腹を押さえて呻いている。
「だ、旦那」
「大丈夫だ。傷は浅いぞ、しっかりしろ」

「おそ、いんだよ、く、来るのが」
おもんは、きれぎれに声を絞り出した。腹からあふれる大量の血を、弥十郎はとっさに掌で押さえつける。
「あた、あたしを」
「話すんじゃねえ。おい、主、晒しでも手拭いでもなんでもいい。綺麗な布を持って来い。それから医者だ」
「これを」
ひとりの男が、懐から手拭いを出した。年は四十前後、商人らしい雰囲気で、中店か小店の主といった品のよさがある。弥十郎はとりあえずその手拭いを使い、腹の傷口にあてた。
「医者を呼べ、早くしろ」
「今、迎えに行かせました。緒方様、これを」
主が慌てふためきながら、晒しや手拭いを持って来る。
「旦那、お怪我は」
遅ればせながら也寿が姿を見せた。
「おれは大丈夫だ。早く喜伝次を縛りあげろ」
「へい」

也寿が気を失っている喜伝次を捕縛する。おもんは苦しげに呻きながらも、懸命になにかを訴えようとしていた。

「あたし、を、こ、殺せば」

「話さない方がいい」

商人らしき男が止める。男が身体を寄せた刹那、弥十郎はある薫りをとらえていた。血腥さを拭い去るような、爽やかな薫り。思わず男を見つめる。

――蓮の花の薫り。

おもんの客、それも上客なのかもしれない。岡場所の遊女には、およそ不似合いな高価な薫りを、おもんも漂わせていた。『ねがはくは』という西行法師の歌を教えたのも、この男だったとしたら……。

「おまえさん、名は？」

「これは失礼いたしました。申し遅れましたが、てまえは〈むらたや〉の右衛門作と申します」

「医者です、緒方様。医者が参りました」

主は動転のあまり、声が裏返っている。弥十郎はおもんを医者に託して立ちあがると、右衛門作とともに座敷を出た。ようやくやって来た北町奉行所の同心が、也寿から喜伝次の腰

縄を受け取ったが、与力の田中市之助は姿を現さない。
「お偉い与力様は、遊女と客の諍いなんぞに、いちいちかかずらってはいられねえ、か」
「は？」
右衛門作が怪訝そうに見あげる。也寿と同じぐらいの背丈しかないため、首が痛くなるほど首を曲げていた。
「いや、こっちのことだ。〈むらたや〉さんだったな」
「さようでございます」
硬い声で答え、一瞥を返した。騒ぎにまぎれて気づかなかったが、こうやって間近に見ると、品のよさの陰に、背筋がひやりとするような底知れない冷たさを秘めている、ように思えた。落ち着き払っているのは、こういう騒ぎに慣れているからだろうか。
「野暮な問いかけかもしれねえが、おもんの馴染み客かい」
「はい」
「この薫り」
弥十郎は、わざとらしく鼻をうごめかせる。
「蓮の花の薫りだ。おもんも、使っていてな。ちょいと気になったのさ」
「てまえは、神田須田町一丁目で、扇を商っております。京より仕入れておりますので、つ

いでに香も扱うようになりました。いい薫りだと、おもんにせがまれましてね。少し早めの薫りなのですが、練り香を少しばかりくれてやりました」

「なるほど」

話している間に、座敷から喜伝次が運び出され始めた。しかし、気絶したままなので、重くてなかなか運べない。活を入れてやってもよかったのだが、正気づいたとたん、また暴れ出されては困る。

「おれも手伝おう」

弥十郎も加わって、階段を降りて行った。おもんの手当ては続いている。助かるか、助からないかの瀬戸際ではないだろうか。運と体力があればあるいは、という状態のように思えた。

「也寿」

階段を降りたところで、小者の耳もとに囁く。

「神田須田町一丁目の〈むらたや〉が気になる。喜伝次やおもんが話せるようになったら、主の右衛門作について訊いてみろ」

おもんがなにか言おうとしたとき、早口で遮ったように思えたが……考えすぎだろうか。あるいは本当に身体を案じていたのかもしれない。

——助かってくれ。

おもんを守りきれなかった慚愧の念が、いつになく弥十郎の気持ちを重くさせていた。

六

喜伝次を番屋まで運ぶのを見届けて、向島の隠居所に戻った頃には、すでに椋鳥も啼かない時刻になっていた。椋鳥の啼き声の代わりに、そろそろ五つ（午後八時）の鐘が鳴る頃ではないだろうか。

——やけに静かじゃねえか。

暗闇に覆われた畦道を、弥十郎はしのびやかに進んで行く。台所に明かりは灯っているのだが、大きな百姓家は不気味なほど静まり返っていた。玄関も客の訪れを拒絶するかのように閉まっている。騒ぎがあればあったで厄介だし、静かすぎればそれはそれでまた不安になるのが正直な気持ちだ。

「おい、宗順」

柴折り戸を開けて、呼び掛けた。と同時に血の臭いがしないか探っている。昨日の今日ということはなかろうと、相棒にまかせていったのだが、もしかすると、二度目の襲撃があっ

たのかもしれない。

「佐兵衛さん、おこまさん。いねえの……」

背後から迫った気配に、弥十郎は振り向きざま拳を叩きつける。相手は軽く避け、懐に飛びこんで来ようとした。が、いち早く後ろにさがりながら、左手で刀の鯉口を切る。抜き放とうとしたその手を寸前で止めた。

「驚かせるんじゃねえよ」

相手が宗順とわかり、身体の力を抜いた。閉まっていた玄関の戸が開き、おこまが飛び出して来る。

「お帰りなさい、弥十郎様」

戸口から佐兵衛も顔を突き出していた。幸いにも二度目はなかったらしい。ほっとして、答える。

「すまない。もう少し早く戻って来るつもりだったんだが」

「だからちょっと驚かせてやろうって」

おこまが悪戯っぽく笑って、宗順を振り返る。いかにも悪友らしい出迎え方だった。ふだんなら皮肉を返す場面だがこらえる。代わりに、家を顎で指し示した。

「客は？」

「とっくに帰りましたよ。おまえさんがいい思いをしている間、あたしはひとりで見まわりですからね。割に合わないったら」
「いい思いって？」
おこまが好奇心たっぷりの目を向ける。
「そのうちにな、教えてやろう。今はまだ早い」
「甘酒を召しあがりますか。まだたくさん残っているんです」
「すまねえが、おこまさんよ。甘酒は後にしてくんな。腹が減っちまってるのさ。湯づけでもなんでもいい、飯を召しあがらせてくれないか」
「え」
一瞬、考えた後、おこまは楽しげに笑った。
「洒落ですね、弥十郎様。飯と召しあがるを掛けたんですね」
「つまらない駄洒落ですよ。膳の支度はあたしがします。いい思いをしてきた旦那の相手は引き受けますので、佐兵衛さんとおこまさんは、もう寝んでください」
宗順の言葉を、佐兵衛が継ぐ。
「甘酒はあたしがいただくよ。すまないが、おこま。持って来てくれないか」
「はい」

庭をぐるりとまわって、勝手口に向かったおこまに、弥十郎と宗順も続いた。いい思いどころか、大変だったのだと手短に説明する。勘働きが当たってしまい、〈桔梗屋〉で騒ぎが起きた。おもんが刺されて危ない状態、喜伝次は番屋に運んだが、吟味するほどのこともない。今夜中に小伝馬町の牢屋敷に移されるだろう。

「おもんさんが」

宗順の表情がくもる。弥十郎のために慣れた手つきで、冷や飯をよそい、漬け物を出して、湯を沸かす用意を整えていた。今朝、来たばかりなのに、長年、奉公している者のように馴染んでいる。

「で、おまえさんは、その右衛門作とやらが気になっているわけですね」

「そんなところだ。おもんの言葉を遮ろうとしたように思えなくもない。他にもいくつか気になることがあるんだが、おれの考えすぎだろうぜ」

弥十郎は、膳所も兼ねている台所の板場に、腰を落ち着ける。台所の半分ほどが、板場になっているのだが、かつての奉公人たちはここで食事をしていたに違いない。遅くなったゆえ、座敷に膳を運ばせる手間はかけたくないと、多香女仕込みの気配りを働かせていた。

「こんなところで召しあがるんですか」

おこまもまた年に似合わぬ気遣いをみせる。はじめの頃は、初世よりもずっと幼く感じら

れたが、なかなかどうして、台所で立ち働く姿などは、小さな女主といった雰囲気を漂わせている。

「面倒だからな、ここでよい」

「でも」

「お、だれか来たぞ」

弥十郎がその気配を察知するのと同時に、宗順が勝手口に立っていた。ほどなく〈梅若座〉の若い衆が二人、入って来る。

「明日の野菜を持って来ました」

「芝居は今日も大入りでさ。人気が凄いもんですから、四、五日、興行が延びるかもしれません。座長が早く佐兵衛さんに知らせてやれと言ったもんで」

「おじいちゃん、喜びます」

おこまが満面の笑みになり、甘酒を入れた湯飲みを奥座敷に運んで行った。弥十郎は若い衆に声を掛ける。

「おまえさんたちも腹が空いているんじゃねえのか」

「ええ、まあ」

「ちょうどいい、おれはこれから飯なんだ。ひとりで食うよりも、大勢の方が旨い。一緒に

食おうじゃねえか」
「さようで」
「それじゃ、御相伴に与ります」
二人は足を拭いて、板場にあがって来る。本当は一杯、飲りたい場面だが、馬庭念流と思われる刺客たちのことが浮かんでいた。油断できない。
「宗順、先に茶を頼む。喉が渇いちまった」
「喉が渇いたのなら、まず水を飲めばいいじゃありませんか。他人様の家なのに、まったく注文が多いったら」
などと言いつつも、悪友は鼻歌まじりに支度をしている。連中が襲って来るとしたら、この後だ。弥十郎は首の後ろを、無意識のうちに掻いている。ちりちりと疼くような独特の感覚が起きていた。
「芝居の評判は、本当に上々らしいな。馴染みの船宿の女将も、観に行くと言っていたぜ。おれも近々、うちの山姥を連れて……」
「おじいちゃんっ」
悲痛なおこまの叫びに、弥十郎はいち早く刀を摑んでいた。奥座敷に走ったが、賊の気配はない。それでも用心深く雨戸が開けられていないか確かめた後、座敷の障子戸を開ける。

「ご隠居」

佐兵衛が苦悶の表情を浮かべていた。畳に倒れて胸を掻きむしっている。なにか喋ろうとしていたが、言葉にならない。傍らには、湯飲みが転がり、こぼれた甘酒が畳に広がっている。

「どうしたんだ、なにを」

はっとして、弥十郎は叫んだ。

「茶は飲むな、水もやめろ。毒だ、宗順。一服、盛られた」

「ど、毒？」

おこまはわけがわからないという顔をしている。

「あたしじゃ、あたしじゃありません」

「わかっている。おい、おこまさんを廊下へ」

弥十郎は佐兵衛を抱きかかえ、吐かせようとしたが、うまくいかない。佐兵衛は「おこま」と繰り返していた。焦点の合わない目を、懸命に合わせようとしている。

「おが、た、さま。あ、あの子を、ま、守ってやって」

「承知した。おこまさんは、おれが守る。いったい、だれが毒を、おい、ご隠居。おれの言うことがわかるか。おれの声が聞こえるか。教えてくれ。いったい、だれがこんなことをし

たんだよ」

怒鳴りつけるような問いかけに、佐兵衛は唇をかすかに動かした。弥十郎はその唇に耳を近づける。死の呟きはあまりにもか細く、聞き取れないほどの声だったが……。

「長谷川平蔵」

ひと声、はっきりと告げて、佐兵衛は事切れる。

夜の静寂の中、おこまの悲痛な叫び声が、長く、長く尾を引いていた。

第五章　大切なもの

一

長谷川平蔵宣以は、享保から寛政にかけて活躍した旗本である。幼名は鉄三郎。天明七年（一七八七）加役として火付盗賊改の役目を賜った後、無宿者対策として人足寄場を建議し、寛政二年（一七九〇）老中筆頭・松平定信から管理をまかされた。ときには私費を投じて、無宿者対策に尽力したが、寛政七年（一七九五）逝去、享年五十。町奉行への昇進はならずに生涯を終えている。

佐兵衛が死ぬ間際に遺した『長谷川平蔵』とは、どういう意味なのか。佐兵衛はなにを伝えようとしたのか。

翌日、弥十郎は、富岡八幡宮で行われている〈梅若座〉の興行に足を運んでいた。そう、佐兵衛は、長谷川平蔵を主役にした芝居の脚本を書いていたのである。〈梅若座〉が演じて

いたのは、その芝居だったのだ――。

舞台では『深川慕情』と名付けられた演目が行われている。

「おっと、待ちな」

平蔵は、屋台の団子屋から離れようとした娘の手を摑んだ。年は六、七歳、ろくに湯に入ったことがないのか、汚れた顔や身体からは悪臭が立ちのぼっている。その汚い土まみれの手に、盗んだ団子がしっかりと握りしめられていた。

「団子を盗むのはいけないことだ。とりあえず団子の銭は、わしが払うてやるがの。二度と盗みをしてはならぬ」

「なんでだよ」

娘は不満げに唇を尖らせる。

「なぜ、盗みをしちゃいけないのさ。あたいはお腹が空いてんだ。物乞いをしたけど、だれも銭を恵んでくれない。だから団子をいただいたんだよ」

話しながら早くも団子を頬張っていた。取り返されるのではないかと案じるあまりの行動だろう。平蔵は痛ましげに見やる。

「ほう。なぜ、と訊ねるか」

しばし見つめた後、

「来い。わしが飯を馳走してやろう」

腕を摑んだままゆえ、娘は逃げられない。それでも飯という言葉に釣られたのか、素直に付いて来た。一膳飯屋の一角に、奇妙な二人連れは腰を落ち着ける。

「さいぜんのことだがな」

平蔵は凄い勢いで飯を口に押しこむ娘に話しかけた。

「見世の者にとっては、たとえ団子ひとつであっても大切な商売物。仕入れには金がかかるし、焼くのに手間もかかる。盗まれれば儲けが減り、困るではないか。特に近頃は物が高直になっておるからな。一文、二文の儲けであろうと、おろそかにできぬ。それゆえ、盗んではならぬと言うたのじゃ」

諭すように言ったが、娘には右から左、馬の耳に念仏というやつだった。ちらりと返した目には、年に似合わぬ冷たさが覗いている。

――この娘には、盗まれて困るような『大切なもの』がないのだ。

だから、いくら諭しても理解できない。さて、どうしたものか。平蔵は思案したが、すぐに名案が閃くはずもない。

「盗みをしてはならぬ。腹が減ったら、わしの屋敷へ『盗み』に来るがよい。握り飯でも味

噌汁でも、好きなだけ盗め。だが、他で同じことをしてはならぬ。もう一度、盗みを働いたときには、牢屋敷送りじゃ。わかったな」

牢屋敷送りが効いたのか。娘は腹が減ると、平蔵の屋敷を訪ねて来るようになった。自然に下働きの手伝いなどをするようになり、これまたごく自然に屋敷の奉公人になる。

一年、二年、三年。

穏やかな時が過ぎた。

そんなある日、平蔵は娘に問いかける。

「どうじゃ。まだ『なぜ、盗みをしちゃいけないのさ』と訊ねるか」

「いいえ」

娘はきっぱりと首を振る。

「盗みはもう二度としません。商売道具や見世の品物、そして、稼いだお金。人にとって『大切なもの』は違うかもしれませんけど、それを盗まれると困るという気持ちは、よくわかりましたから」

「ほう、そうか」

平蔵は頷き、もう一度、問いかけた。

「つまり、おまえにも『大切なもの』ができたということだな。だからこそ、失ったときの

気持ちがわかるようになった、と」
「はい」
「それは……」
「長谷川様です」
娘は真っ直ぐ眸を見て答えた。が、急に恥ずかしくなったのかもしれない。頬を染めて、俯いた。『大切なもの』を支えにして、見事に成長した娘を、平蔵は眩しげに見つめている——。

二

「お芝居の……最初の方に出て来た話は、あたしのことなんです」
おこまが言った。一同は、芝居を観た後、永代寺門前の飯屋に流れている。弥十郎、宗順、也寿の三人は、二階の座敷でおこまの話を聞いていた。
「〈梅若座〉の座長さんに拾われたんですけど、役者も裏方も男衆ばかりで、馴染めませんでした。一座が江戸に来たとき、おじいちゃんに逢ったんです」
盗みをした場面を佐兵衛に見られたのだろう。それが二年前のことである。すでに向島に

隠居所を構えていた佐兵衛は、まさに長谷川平蔵のような台詞を告げた。

――盗みがしたくなったら、わしの家に来るがいい。

一度、二度と訪れるうち、おこまは佐兵衛の家の手伝いをするようになっていた。幼いながらも料理だけは、男衆に鍛えられている。料理が苦手な佐兵衛に代わって、台所に立つようになっていた。

相性がよかったのかもしれない。

互いに孤独だった二人は、祖父と孫娘という役柄を得て、真の絆を得たのだ。

永遠に続くかと思われた幸福な時。

だがしかし、佐兵衛は、毒を盛られて絶命した。井戸に毒を投げこまれたか、あるいは甘酒に一服、盛られたか。

「運座に来ていたのは六人の男、侍が二人いたことだけは、おれも見ているが」

弥十郎は、おこまに目をあてる。

「どこの、だれであるか、おこまさんにはわからねえかい」

「わかりません。あたしは、おじいちゃんとあの家で二年近く暮らしましたけど、歌の会を開いたのは初めてなんです。来たお客は知らない人ばかりでした」

たった一日しか経っていないのに、娘はげっそりとやつれていた。用意してもらった膳に

も、まったく箸をつけようとしない。
「なにか、そう、佐兵衛さんと客のだれかが、言い争ったりしていたようなことはなかったかい」
続けて発した弥十郎の問いかけに、おこまは「そういえば」と呟いた。
「お侍のひとりと、別の座敷で話をしていました。他のお客はいなくて、二人だけで話していたんです」
「話を聞きましたか」
と、宗順。おこまは小さく頷き返した。
「『来年も頼む』とお侍が何度も言っていたんです。『今年もすでに始めているのだ』というようなことも言っていました」
「なるほど。ご隠居になにかやらせたかったということだろうな。それで、ご隠居はなんと？」
「おじいちゃんは、『もうできません』と断っていました。たまたまお茶を運んだときに聞こえたんです。あとは襖を閉めて、また二人きりで話をしていました」
「侍か」
二人いたうちのひとりが、一服、盛ったのではないのか。あるいは、ひとりが佐兵衛と話

している隙を見てということも考えられる。二人の侍は、なんらかの繋がりがあるように思えた。同じ疑問を持ったのかもしれない。

「やはり、あのお侍が」

おこまは居住まいを正して、言った。

「弥十郎様。おじいちゃんの仇を討ってください。お願いします。このままでは浮かばれません。おじいちゃん、なにも悪いことなんかしていないのに」

眸から大粒の涙があふれ出した。悪いことをしていなかったかどうかは、なんとも言えない。が、おこまにとって佐兵衛はなによりも『大切なもの』だったに違いなかった。

「仇を討つことについては、むろん、おれもそのつもりだ。用心棒を頼まれたというのに、この始末。けりをつけねえと、風来屋の名がすたる。おこまさんに言われるまでもねえことよ。ついては、ひとつ、訊きてえんだがな」

弥十郎は踏みこんだ問いかけを発する。

「以前にも騒ぎがあったんじゃねえのかい。ご隠居がだれかに襲われて、そのとき、ご隠居は右手に怪我をした。〈梅若座〉の男衆は、かぶれたんじゃねえかと言っていたがよ。おれは昨日、確かめたが、右の掌に傷が残っていたぜ」

自分の右手を広げて、傷があった場所を示した。奉行所の役人が来る前に、弥十郎は佐兵

衛の手から晒しを取って、傷痕を素早く確認している。
「あれは」
おこまの白い顔が、さっと引き攣る。一瞬、躊躇するように瞳が揺れたが、仇討ちをしてもらうとなれば、嘘はつけないと思ったのかもしれない。
「そうです。おじいちゃん、訪ねて来た男に襲われそうになったんです」
顎をあげて、弥十郎を見据えた。
「何度も来たことがある男でした。その度に言い争いになって……あのときも『もうできない、行けない』と、おじいちゃんは繰り返していました。どこかに連れて行こうとしていたみたいです。話しているうちに、男が突然、怒り出して」
小さな身体が痙攣するように震える。そのときの光景を思い出したに違いない。口ごもり、目を大きく見開いていた。やはり、と、弥十郎は確信する。
――ご隠居を助けるために刺したんだろうぜ。
そう思うと同時に、刺した相手は、もしや、という疑問も湧いていた。吾妻橋近くで見つかった土左衛門、土左衛門があがった場所は、佐兵衛の隠居所からさほど遠い距離ではない。後ろから刺された傷痕があったあの亡骸は……。
「あ、あた、あの、あたし、あたしが」

ごくりと唾を呑んだおこまを、弥十郎は早口で遮る。
「刺したのは自分だと、おれは佐兵衛さんから聞いている。昨日の朝、おれの部屋に来て、そっと告げたのさ。そこでもうひとつ、おこまさんに訊きたい。男はその場で死んだのか、逃げたのか」
「に、逃げました。血だらけで」
おこまは何度も唾を呑みこんでいた。話をするだけで吐きそうになるほどの出来事であったことは想像するに難くない。隠居所で起きた諍い、おそらくはおこまに刺されて隠居所から逃げた男、男の土左衛門があがったのは吾妻橋の近く。宗順と也寿もぴんときたのだろう。
「もしや」
「あの土左衛門は」
二人に視線で沈黙を促し、弥十郎は告げる。
「おこまさんは、しばらく、おれの家に来るといい。あの家にいるのは危ないからな。騒ぎが落ち着くまでだ。身の振り方については、その後、考えるとしよう」
見世の主を呼び、おこまを本所の屋敷まで送るよう頼んだ。〈梅若座〉に戻すということも考えないではなかったが、佐兵衛を殺めた連中が、ふたたびおこまを襲うことも考えられ

る。屋敷がお助け小屋状態になるのは、できるだけ避けたいのだが仕方あるまい。

「おれの家は、南割下水に架かる三ツ目之橋を渡った左手にある。枝垂れ桜の枝が、道に張り出しているから、すぐにわかると思うが、わからなければだれかに訊いてくれ。あのあたりで桜屋敷といえば、おれの家のことだからよ」

送り届ける役目の下男に告げ、駄賃を包んだ懐紙を渡した。

「あの」

座敷を出て行くとき、おこまが振り向く。男を刺したことについて、正直に告白したいのだろうが、弥十郎は取り合わない。

「おれも一度、家に戻るが、まだちょいと話があるんでな。すまねえが、おこまさん。先に行っててくれ」

「は、い」

重い足取りで階段を降りて行く娘を、三人は同じ思いで見送っている。明日のある若い娘を裁いてどうなるというのか。『大切なもの』を守ろうとした結果ではないか。刺したのは佐兵衛、それでいいのではないかと、みな思っていた。

「さて」

弥十郎は、まず宗順に冷ややかな目を向ける。

「おめえがいるからと思い、おれは安心して、〈桔梗屋〉の様子を見に行ったんだぜ。ところが、戻ったとたん、あの騒ぎだ。井戸に毒を投げ入れるところを見てねえのか、ええ、どうなんだよ」

「見ていません。毒を入れたのは、井戸ではないと思いますよ。あたしは夕餉を頂戴しましたけれど、なにも起きませんでしたからね。井戸水は大丈夫なのではないでしょうか」

「そうなると、やはり、怪しいのは」

独り言のような呟きに、宗順が続いた。

「甘酒ですよ」

「だが、おれも飲んだぜ。おめえもだ」

「おまえさんもわかっていると思いますが、敢えて口にいたします。あたしたちが飲んだ後に、だれかが毒を入れたんでしょう。台所の膳台に載せたままだった土鍋に、毒を入れたということは充分、考えられます」

「危なかったですね、旦那と宗順さんも」

也寿が大袈裟に身震いしてみせる。狙ったのは佐兵衛だけかもしれないが、弥十郎を含む全員の命が危険にさらされたのは確かだった。それを思うと、怒りが爆発しそうになる。

「卑怯な真似をしやがって」

「悪運が強いですからねえ、旦那は」
「貴様もじゃねえか、宗順よ。人のことは言えないぜ。ま、おめえと言い争っても仕方がねえから話を変えるがよ」
弥十郎は、つるりと顎を撫でた。
「佐兵衛が遺したあの言葉というか、名前を告げたその意味がわからねえ」
長谷川平蔵。
手がかりが隠されていないかと思い、芝居を観たのだが、これといった内容ではなかったように感じられた。おこまのことを描いた一幕目の後は、平蔵と密偵、あるいは捕らえた盗人たちとの濃やかな人情話となって、幕をおろしている。
「芝居を観れば、なにかわかるんじゃねえかと思ったんだが……佐兵衛は長谷川平蔵に、なにを指南されたんだろうな」
「悪党の捕らえ方じゃねえんですか。盗人になさけは無用、改心すればお目こぼしもあるかもしれねえが、そうじゃなければ容赦しねえ、とまあ、あっしが思うのはこんなとこですね」
「あたしも芝居から特に感じることはありませんでしたよ。多香女様をお連れすれば、よかったんじゃありませんか。勘働きが凄いですからね。芝居に隠されている佐兵衛さんの言伝

を、鋭く読み取られたかもしれません」

多香女の話が出たとたん、気が重くなる。芝居に連れて行かなかったことも含めて、小言を言われるのは必至。

「時間があれば、お袋を連れて行かないこともねえが、ま、それはそれとして、也寿。土左衛門の素性は、まだわからねえのか」

弥十郎は話を戻した。

「へい。旦那に言われましたんで、吾妻橋近くの水戸家の下屋敷をあたってみたんですがね。中間たちは知らねえと」

「知っていても、そう言うだろうぜ。おれは怪しいと思うがな。佐兵衛に刺された男は、どうにかこうにか水戸家の下屋敷まで逃げ戻った。ところが、そこで力尽きて死ぬ。面倒をきらっただれか、これは、おそらく家中の者たちだろう。あるいは『者たち』ではなくて、ひとりかもしれねえがな。とにかく、そいつの命令で大川に繋がる屋敷の水路に亡骸を放りこんだってわけさ」

佐兵衛に刺された、の部分をことさら強調したが、おこまの仕業云々については、だれも口にしない。

「そう、辻褄が合いますよね」

宗順が同意して、続ける。

「水戸家のだれかの命令を受け、土左衛門となった男は、使いとして隠居所を訪れたものの、佐兵衛には『行かない』と断られた。来い、いやだの応酬となり、争ったんでしょう。土左衛門が刃物をちらつかせて迫ったのは間違いありませんよ」

「ですが、もう土左衛門の線からあたるのは、むずかしいような気がしますぜ。相手が水戸家となれば、中間たちの口も堅くなりまさあ。あっしが訪ねたことによって、連中はよけい警戒していますから」

也寿の言うとおり、土左衛門は素性がわからないまま回向院に葬られる運命だ。弔ってくれる者のいる佐兵衛は、まだ幸せといえるかもしれない。

「それにしても、まさか、運座の仲間に毒を盛られるとは、佐兵衛も思っていなかっただろうぜ。おれもだが、迂闊だった」

「そうでしょうか」

宗順が意味ありげに切り返した。

「……」

弥十郎と也寿は思わず顔を見合わせる。

三

「宗順よ。おめえは、佐兵衛がこうなることを覚悟のうえで、連中を招いたと思っているのか」

弥十郎の問いかけに、宗順は頷き返した。

「はい。理由はいくつかありますが、まずはひとつめ。ご隠居は、運座ではなく、『運座のようなもの』と言っていました。短歌を読み解くと聞いた憶えがあります。二つめは、そう、今、申しあげました短歌ですよ。あたしは真面目に家のまわりなどを調べておりましたので、聞きのがしてしまいましたが、旦那によると、はじめは西行法師の歌を詠んでいたとか」

「いちいちうるせえやろうだな。てめえがしっかり働いていたことを言うあたりが、鬱陶しいぜ」

「答えになっていませんよ。どうなんですか」

「確かに、西行法師の歌を詠んでいた。おれはあのとき、おもんのことを思い出したがな。『ねがはくは』という、およそ不似合いな歌を口にしたのが、引っかかっていたもんだからよ」

「えっ、それじゃ、おもんが喜伝次に刺された騒ぎも関わりがあるんですかい」
也寿の言葉を聞いた瞬間、ちりりと首の後ろが疼いた。もしや、いや、やはり、かもしれない。大きな疑問が湧いている。
おもんは、たまたま西行法師の歌を口にしただけなのだろうか。なにか関わりがあるのではないか。
「あるかもしれねえが……なんとも言えねえな」
曖昧な返事になる。宗順がすぐに異論を唱えた。
「あたしは、西行法師の歌よりも、その後の、万葉集の歌の方が気になりますね」

春過ぎて夏来るらし白栲の衣乾したり天の香具山

「あっしには、わけがわかりませんや」
白旗をあげた也寿に、弥十郎は説明する。
「佐兵衛はこう読み解いていた。『白い衣は羽衣、これを盗めば、天下が取れる。春が過ぎて夏が来るように、動乱が起こり、天下は自分のものとなる。機会が訪れたのだ』とな」
「へえぇ、天下、ですかい」

也寿は目を丸くする。

「でかい話になってきましたね」

「うむ。ただこの歌を読み解いたとき、座が不気味なほどに静まり返ってな。おれはあれも気になっているのさ」

あのときの静寂が甦り、ふたたび首の後ろが疼いた。いっせいに反論があがったものの、やけに慌てた様子だったことが印象に残っている。口にしてはならない歌だったのだろうか。読み解いてはいけない禁忌の歌だったのか。

「あたしは、残念ながらその静寂が終わった後の、騒々しいときに戻ったものですから、知りませんがね。実はもうひとつ、気になっていることがあるんですよ」

「運座を開いた理由の三つめか」

「はい。佐兵衛さんは、旦那に聞かせるために運座を催したのではないかと思いまして。そして、わざと口にしてはならない歌を詠み、それを読み解いたのではないでしょうか」

「旦那のために」

也寿は意外そうだったが、弥十郎も同じことを考えていた。

「おめえの言うとおりかもしれねえな。佐兵衛は歌を詠むときも、歌を読み解くときも、やけに大きな声を張りあげていた。考えてみりゃあれもいささか不自然に思えなくもねえ」

「どうやら運座はあちこちで開かれている様子。ちょいと調べてみましょうかね」
宗順の言葉に、無言で小さく頷き返した。運座のことを教えてくれたのは辰吉である。去年あたりからあちこちで開かれるようになったと、聞いた憶えがあった。
「江戸中で開かれている運座に、なにかが隠されているとは、とても思えねえが」
「失礼いたします」
見世の仲居が告げる。
「〈梅若座〉の座長さんが参りました」
「おう、案内してくれ」
「畏まりました」
待ちかねていた客の到来に、弥十郎だけでなく、也寿の顔も引き締まる。佐兵衛の昔を少なからず知っている人物だ。一座の男衆を取り纏めるからには、強面の屈強な男だろうと思っていたのだが……。
「失礼いたします。〈梅若座〉の座長、松太郎でございます」
現れたのは、宗順といい勝負の女形だった。悪友は『もどき』だが、松太郎は正真正銘の女形である。
「緒方弥十郎だ」

手短に挨拶し、仲間たちを紹介して、すぐに重要な話を始める。
「さっそくだが、佐兵衛さんのことだ」
意気込んで口火を切ったが、松太郎はおっとりと受けた。
「はい。わたしもまさかと思いまして、驚きましてございます。あの、緒方様。おこまちゃんは」
「案ずることはない。おこまは少しの間、おれの屋敷で預かる。佐兵衛さんのことだがな。本当に鼻緒問屋の主だったのか」
まずは也寿も一番知りたいであろう事柄を問いかけた。が、急に松太郎の表情がくもる。
「そうだと思います」
「ずいぶんと曖昧な答えだな、ええ、座長さんよ。佐兵衛さんとは、けっこう長え付き合いなんじゃねえのかい」
堅苦しい言葉づかいは大の苦手、くだけたいつもの口調になっている。
「ええ、付き合いは長うございます。そう、かれこれ、十四、五年にもなりますか。佐兵衛さんが向島に隠居所を構えるまでは、てまえどもと一緒に、旅から旅へという暮らしでございましたよ、はい」
「鼻緒を売り歩いていたのかい」

也寿が十手をちらつかせて、訊いた。弥十郎は佐兵衛に初めて会ったときから、鼻緒問屋だったという話に疑問を呈している。鼻緒を扱っていたにしては、佐兵衛が履き物や鼻緒に頓着していなかったからだ。今度こそ確かな答えが返るかと思ったが、

「おそらくは」

またしても、松太郎は自信なさげな答えになる。

「さいぜんから聞いていると、座長は佐兵衛さんの商いについて、よく知らなかったみてえに思えるがな。どうなんだい」

「仰るとおりでございます。鼻緒を売り歩いていると聞いただけで、本当に商いをしているのかどうかまでは存じませんでした」

「問い質したことなんかはねえのかい。なんとなく、おかしいと思うことが……」

「ございました、はい。一度だけ訊いたことがございます」

弥十郎の言葉を遮り、「ですが」と続けた。

「佐兵衛さんはこう答えたのでございます」

〝よけいなことは知らない方がいい。それがおまえさんのためなんだよ〟

「ほう、似たような台詞をおれも言われたぜ。『緒方様のおためなのです。知れば、緒方様も命を狙われます』とな」

「さようでございますか。佐兵衛さんらしいと思いますよ。巻きこみたくなかったのでございましょう」
「巻きこみたくなかった」
弥十郎は一部分だけ繰り返した後、訊いた。
「なににだろうな？」
「さあ、そこまでは……ただ上方や地方をまわっておりますときに、たまにですが佐兵衛さんを訪ねて来る者がありました。お代官様やその配下、あるいは、大名家の家臣といった風情の方々だったことだけは強く心に残っております。ずいぶんと顔が広いのだなと思いましたが」
「よけいなことは知らない方がいいと思い、口にはしなかった、か」
消えた語尾を言葉にする。
「はい」
「金まわりはどうだったんだい。羽振りがよさそうだったか」
人さし指と親指で丸を作り、目をあげる。率直すぎる問いかけに思えなくもなかったが、もはや佐兵衛はこの世の者ではない。
「よさそうでございました」

松太郎は素直に応じた。

「てまえどもの興行が思うようにいかなくて、金繰りに困ったときなどは、ぽんと五十両ほど出してくれたこともございます」

「五十両」

也寿が声をあげた。返してもらえるかどうかわからない相手に、五十両を与えられるのは、相当、余裕がなければできない善行である。そういった諸々の事柄を思い出したのかもしれない。

「大恩があるのです、佐兵衛さんには。おこまちゃんを引き取ってくれたことだけでも、返せないほどの恩でございますのに」

松太郎の目に、うっすらと光るものが滲んだ。しかし、結局のところ、佐兵衛が何者だったのかという最も知りたいことに関してはわからない。

「葬式はやるのか」

話はここまでと思い、締めくくりの意味で訊ねた。

「もちろんです。あとで番屋に亡骸を引き取りに参りまして、向島の家に運ぶつもりでおります」

「弔ってくれる者がいるのが、せめてもの慰めだな」

「そう言っていただけると、てまえどもも少しは楽になります」
松太郎の涙でお開きとなり、弥十郎たちは、飯屋を出る。時刻は九つ半（午後一時）ぐらいだろう。降り注ぐ陽射しの強さに、弥十郎は眉をしかめた。

四

「暦の上ではまだ三月だってのによ。お天道様は江戸っ子気質らしいぜ。もう夏の陽射しじゃねえか」
「陽射しがどうのこうのと言って、ごまかそうとしても駄目ですよ。今回もまた無料働きになりそうじゃありませんか」
肘で突いた宗順を、横目で睨みつける。
「またってのはなんだ、またってのは。いいから黙って動け。佐兵衛の無念を晴らしてやるのが、おれたちの役目だ。おこまのあの眸を見ただろうが、かわいそうだとは思わねえのか、ええ、宗順よ」
「わかっていますよ。言ってみただけです。それでは、あたしは運座について調べるとしましょうかね」

「運座のことだけじゃねえ、長谷川平蔵殿のことも調べろ。人足寄場を設けた立役者であることぐれえは、おれも知っているがな。それが佐兵衛の『死の呟き』に繋がるのかどうか、今ひとつわからねえ」

「おやおや、相変わらず人使いが荒いですねえ。一銭も、もらえないのにこき使われて、本当にあたしも人が好いったら」

などと、口では文句を言いながらも、いつものように、どこかいそいそした感じで、宗順は人波に消えて行った。騒動の原因を読み解くのが、けっこう楽しそうな様子である。弥十郎と違い、城勤めの坊主には、色々な余禄があるのだ。

「いい気なもんだぜ。無料働きになって困るのは、貧乏御家人の方だ」

「旦那はこれからどちらへ」

也寿が問いかける。

「近くまで来たんだ。どうせなら、おもんの見舞いに行ってみようかと思ってな」

「あっしもお供しますよ」

二人は岡場所が軒を連ねる方へ足を向けた。まだ富岡八幡宮の山開きが続いているとあって、いつになく人出が増えている。ふだんはあまり見ない親子連れや老夫婦などが、岡場所近くの細い通りを行き交っていた。

「ところで、也寿よ。喜伝次の方はどうなんだ。なにか喋ったか」
「それが駄目なんでさ。小伝馬町に移したんですがね。なにを訊いても答えませんや。それで、おもんの方はどうかと思いまして」
「右衛門作だったか。おれは〈むらたや〉の主も気になる。神田須田町一丁目の扇屋と言っていたが、口から出まかせじゃねえだろうな」
「しっかりと商いをしているようでさ。仕入れは京からだとかで、いや、もう高いのなんのって。扇にしても、香にしても、とうてい手が出ませんぜ。儲けすぎのような気がしなくもありません」
「大名家や上級旗本が、得意先なんだろう。音物にはいいんじゃねえのか。女どもが喜びそうだ」
自分でそう言った後、我知らず首の後ろを押さえて、立ち止まる。大名家や上級旗本という部分で、松太郎の話を思い出していた。佐兵衛のもとを訪ねて来たのも、そういった連中ではなかったか。
「旦那、どうしたんですか」
也寿も足を止めて、振り返る。
「いや、なんでもねえ、が……考えてみりゃ、ちょいと引っかからなくもねえな。右衛門作

のような商人が、深川あたりの岡場所に出入りするってことがよ」

「そうですかね。あっしは別におかしいとは思いませんぜ。おもんは若くて、見てくれも悪くありません。そのうえ安く遊べるとなりゃ岡場所の方がいいに決まってまさ。だれが好きこのんで高い銭を出すかって、あっしは思いますがね」

「うむ。おめえの言うことにも一理ある。おれの考えすぎだろうが」

呟きながら、ふたたび歩き出した。弥十郎は金さえあれば、岡場所よりも吉原に行きたいと思う方だ。相手をする遊女の、濃やかな気配りや、吉原ならではの独特の雰囲気が、たまらなく好きなのである。懐具合が寂しいときは、〈桔梗屋〉あたりで我慢せざるをえないが、神田にお店を張る見世の主であれば、わざわざ深川の遊女屋に来る必要はないのではあるまいか。

――冷たい目をした男だった。

弥十郎は、右衛門作のことを思い浮かべている。乾いた冷ややかな目と、あのとき妙に落ち着いていたことが、頭に残っていた。刃傷沙汰を目の当たりにしたにもかかわらず、狼狽えた素振りはいっさいなかったように思える。

――そして、蓮の花の薫り。

おもんも使っていた高価な練り香。右衛門作は惜しげもなくやったと言っていた。也寿に

聞くまでもなく、相当な値であることは想像できる。岡場所の遊女に、ぽんとくれてやったその真意はなんなのか。

「気を引きたかったから、というふうには見えなかったな」

「え？」

「なんでもない、こっちのことだ。〈むらたや〉のことだがな。出入りしている大名家のことを、ちょいと調べてくれねえか」

「わかりました」

「なにかをしたことに対する礼ということであれば、そう、高い香をくれてやった理由もわかるってもんよ」

ひとりごちて、弥十郎は懐手になる。とそのとき、前方から艶やかな芸者姿の女が近づいて来た。

「おう、辰吉。昼間っから忙しいようだな」

「旦那も。昼間っから忙しいようですね」

辰吉は、ちらりと責めるような目を投げた。弥十郎から〈桔梗屋〉の看板に、その視線が移るのを見る。

「見舞いだ、おもんという遊女のな。噂を聞いただろ。男に刺されちまったのさ。本所緑町

で下駄屋をやっていた男よ」

早口で告げた瞬間、激しく後悔していた。おれはなにを言っているんだ、女房でもねえ女にいちいち言い訳めいたことを、と、自分に腹がたってくる。

「ま、せいぜい稼いでくれ。おまえさんの芸者姿を見られるのもあとわずか。瞼の裏に焼きつけておくからよ」

「あの」

なにか言おうとした辰吉を置いて、〈桔梗屋〉に足を向ける。

「邪魔するぜ」

「あ、これは、風来屋の旦那」

顔馴染みの男衆が、飛び出して来る。

「おもんの見舞いに来たんだがよ。具合はどうだ、まだ生きてるか。陰気くせえ小部屋に押しこんで、ろくに薬もやってないんじゃねえだろうな」

冗談のように言ったが、内心、案じてもいた。役に立たなくなった遊女は、見捨てられるのが常。それをさせないための見舞いでもある。

「とんでもありませんや、へへ、どこかの姫様のように、大切にしておりますよ。治ってくれねえことには、元が取れませんからね。あ、長物をお預かりいたします、へい、二階へど

うぞ」

差し出された手に、腰から外した刀を渡した。見慣れない男衆がひとり、階段の下でぺこりと頭をさげる。

「新顔だな」

「へい」

男は無愛想に応じて、奥に引っ込んだ。ちりちりとしきりに首の後ろが疼き始める。いやな感じを覚えたが、見舞いをするだけのこと。也寿を伴い、二階にあがる。

「風来屋の旦那」

座敷に寝かされていたおもんが、弱々しい笑みを向けた。まだ顔色はすぐれないが、それでも思っていたより、目に生気が戻っている。若いからだろう。弥十郎も笑顔で傍らに腰をおろした。也寿はおもんに目で会釈して、後ろに控える。

「その顔色なら大丈夫だ。あの世からのお迎えも、廻れ右をして戻るだろうぜ。すまなかったな、おもん、守ってやれなくてよ。おれがもう少し早く来ていれば」

おもんは大怪我、佐兵衛はすでに仏と、風来屋は二度までも失態が続いている。腕に覚えがある身としては、はなはだ口惜しい事態となっていた。責められても言い訳できない有様だが、おもんは小さく首を振る。

「ううん。旦那が来てくれたお陰で、あたしは助かったんだよ。だから、今、ここにこうしていられるんだ。もう一度、刺されていたら終わりだったよ」

「おまえは優しい女だな」

苦笑して、弥十郎は問いかけた。

「ひとつ、訊きてえことがあるのさ。思い出したくないかもしれねえが、一度だけだ、こらえてくれ。喜伝次に刺されたとき、おまえ、おれになにか言おうとしただろ。『あたしを殺せば』と聞いた憶えがあるんだがな」

あのときは右衛門作に「話さない方がいい」と止められた。おもんはなにを伝えたかったのか。それを確かめに来ている。

「……憶えてないよ」

おもんはついとそっぽを向いた。背中にだれかの視線を感じて、弥十郎は肩越しに後ろを見る。階段の下で会った新入りの男が、廊下に立っていた。目が合うと、慌て気味に視線を逸らして離れて行く。

――おもんを見張っているのか？

弥十郎の視線を追った也寿が、今度は問いかけを発した。

「喜伝次に、いったい、なにをしたんだい、おもんさん。こんな真似をされるような覚えが

あるのかい」
「覚えなんかあるわけないよ」
　気の強い一面を覗かせたが、すぐに小声で言い添える。
「っていうのは嘘さ。あの男、年甲斐もなく、あたしに入れ揚げていたからね。よくあるじゃないか、真面目男がっていうやつだよ。貯めこんでいた銭を使い果たしちまって、頭に血がのぼったんだろうね。夜逃げしたなら、そのままどこかに消えてくれりゃよかったのに」
　答えながらも相変わらず顔をそむけていた。弥十郎や也寿と目を合わせようとしない。枕元にある薬の袋には、江戸では有名な大店の薬種問屋の名が記されている。充分すぎる待遇の裏には、なにかが隠されているのではないか……？
「具合がよくねえのに、すまなかったな。また来るからよ。次はなにか見舞いを持って来る。食べたいものはねえか」
「あるよ」
　おもんは、そこで初めて目を合わせた。弥十郎の手を握りしめ、小さな紙切れを握らせる。なにかを記した文だろうが、素知らぬ顔で言った。
「見舞いの品は、なにがいい」
「だ・ん・な」

ふふっと小さく笑って、おもんは頬を染める。
「また来ておくれよ、すぐに元気になるからさ」
「わかった」
笑顔を返して、弥十郎は立ちあがる。廊下に新入りはいなかったが気はぬけない。おもんに渡された小さな紙切れを帯の間に挟み、階段を降りて行った。

五

「緒方様」
主の幸蔵が奥から出て来る。
「おもんの見舞いにおいでいただいたとか。お出迎えもせずに申し訳ありませんでした。幸いにも持ち直したようでございまして」
「なによりだ。また来るからよ」
弥十郎は玄関の三和土に降りて、男衆が差し出した刀を受け取る。
「む？」
重さに違和感があった。さらに長さも異なる。銘こそないものの、弥十郎の愛刀は亡き父

の形見で、刀身が二尺三寸九分（約七十二センチ）もある。ひと目、見ただけで別の刀だとわかった。

「おい、こりゃ、おれの刀じゃないぜ。だれかのと間違えて……」

言葉は最後まで続かない。新入りの男が、匕首を構えて突っ込んで来た。弥十郎は双手突きをかわして、自分のものではない刀を抜いた。男は裸足で三和土に降りるや、ふたたび襲いかかって来る。横から斬りこんだ匕首を、弥十郎は刀で受け止めた。

がつっと鈍い音が響きわたる。

「ちっ」

弥十郎は舌打ちしながら、見世の外に走り出た。匕首を受け止めた衝撃で、いともたやすく刀は折れている。

「旦那っ」

叫んだ也寿に、叫び返した。

「刀だ、也寿。おれの刀を探せ」

「へい」

と答えた也寿より早く、艶やかな芸者姿の女が見世に飛びこむ。辰吉だった。止めようとした弥十郎に、容赦なく匕首が襲いかかる。男は右に左に、軽快に動いた。弥十郎は折れた

刀で、突き出される刃をかわしている。

「後ろ！」

見世の主の叫び声で、振り降ろされた一撃をかろうじて避けた。新手である。牢人ふうの侍が、後ろに飛びのき、青眼に構えた。弥十郎の右手にあるのは、折れた刀のみ。左から迫った匕首を受け止めながら、足蹴りをお見舞いする。背丈の差がものを言い、〈桔梗屋〉の新入りは腹に蹴りを食らって地面に叩きつけられた。

「〈桔梗屋〉、そいつを縛れ」

弥十郎は大声で叫び、牢人ふうの侍の刃を避ける。つい刀を使おうとして、ふたたび舌打ちをした。折れた刀では相手に届くわけもない。間合いを取り、かわすのがやっとだった。男は斬りつけては離れ、離れてはまた斬りつけて来る。粘っこい剣だった。

「緒方様」

主と男衆が、新入りを縛り終える。それを横目で見ながら、弥十郎は刺客の剣を避け続けている。と不意に相手の身体が沈んだ。次の瞬間、凄まじい速さをのせた剣が襲いかかって来る。弥十郎は避けながら、身体をひねって、折れた刀を相手の右手に突き立てた。

「くっ」

男は短く呻き、離れる。敏捷な動きだった。思いきり突き立てたつもりだったが、いち早

く飛びのかれてしまい、相手は掠り傷しか負っていない。続けて繰り出された剣を、弥十郎は足を送って、かわした。一撃、二撃と放たれた斬撃を、紙一重で避けたが、二撃目がかすかに右肩を掠る。

「旦那」

辰吉の声が響くと同時に、愛刀が投げられた。弥十郎は宙でそれを受け止める。一瞬の隙を見て、男が胸もとに飛びこんで来た。が、弥十郎は素早く後ろにさがり、刀を抜き放ちざま、真っ向斬りを叩きつける。その一撃の方がわずかに速かった。

「ぐうっ」

男は硬直し、そのまま後ろに二、三歩、退いた後、のめるように倒れこむ。遠巻きにしていた野次馬から、吐息のようなものが洩れた。

「大丈夫ですかい、旦那」

也寿が駆け寄って来る。

「ああ、なんとかな。刀を渡すときに、いやな感じがしたんだがよ。お告げには従わねえと駄目だな」

素早く辰吉を探したが、見世にも、散って行く野次馬の中にも姿はない。勝負を見届けるやいなや立ち去ったのだろう。

「手を貸せ、也寿」
道の真ん中に亡骸を転がしておくわけにはいかない。弥十郎は也寿と力を合わせて、牢人らしき侍を〈桔梗屋〉の見世の脇に運んだ。主の幸蔵と男衆が敷いた筵に横たえる。まだなまあたたかい亡骸の、大きく開いた目を閉じさせてやると、幸蔵が亡骸に筵を掛けた。
「おめえの知り合いか」
弥十郎は見世に入って、縛りあげられている男を睨みつける。男は無言で唇を固く噛みしめていた。なにを訊かれても喋らないという意思表示なのかもしれない。
「あっしは番屋に知らせてきます。旦那、すみませんが、こいつの見張りをお願いできますか」
也寿が言った。
「引き受けた」
「すぐに戻りますんで」
飛ぶように走って行った也寿を見送り、弥十郎は〈桔梗屋〉に戻る。主がすまなそうに詫びた。
「申し訳ありません。まさかこんな真似をするとは思いませんで」
「そりゃそうだろうぜ。わかっていたら、雇わねえよな。いつ雇い入れたんだ。昨日から

か」

「いえ、今日からでございます。いつもお願いしている口入れ屋でございましたので、てまえも驚きました次第。いったい、だれに頼まれたのやら」

「神田須田町あたりの扇屋かもしれねえな」

弥十郎は大胆なカマをかけてみる。と、男の頬がぴくりと動いた。よもや扇屋のことが出るとは思っていなかったに違いない。不意を衝かれて、身体が正直に反応したように見えた。

「はて、神田須田町でございますか」

首をひねる主の耳に、弥十郎は囁く。

「おもんのことだがよ。医者の手配をしたり、薬を届けさせたりしたのは、もしかしたら、〈むらたや〉か」

「それは申しあげられません。馴染み客のひとりが、可哀想（かわいそう）だと申しまして、え、あ、あの、もしや？」

主の鈍い頭にも、ようやく閃きが訪れたらしい。申しあげられませんと言いつつ、答えを教えていた。医者の手配をしたのは〈むらたや〉であり、その〈むらたや〉がおそらくは刺客の手配もしたのであろう。主は遅ればせながら、〈むらたや〉が神田須田町にお店を構えていることを思い出したわけである。

「そういうことだ。ま、訊いたところで、右衛門作もその男も答えまいがな」

弥十郎は三和土を見やって、帯におもんの文が挟まっているかどうか確かめた。なにが記されているのか、この場で見たかったが、逸る気持ちを抑える。主や男衆に知られたくない。おもんからの文だとわかれば、それがだれかの口から右衛門作に伝わらないとも限らないからだ。

「はあ、そういうこと、でございますか。ですが、なぜ、でございましょうな。てまえどもにこの男を送りこんだうえ、刺客まで差し向けるとは」

幸蔵は考えつつ言葉をひねり出していた。騒動の全容が見えていないのは、弥十郎とて同じである。

「なぜ、と訊かれてもな。わからねえや」

鼻で笑って、もう一度、三和土に目を戻した。右衛門作がこの見世を訪れていたときに、おもんは喜伝次に刺されている。男衆が目を光らせていたにもかかわらず、喜伝次はまんまと二階の座敷に行くことができた。

――右衛門作が手引きしたのかもしれねえ。

喜伝次におもんを始末させようとしたが失敗し、それではと、今度は口止め策に出たのではないか。おもんが目を逸らして、肝心の話をしなかったのは、よけいなことを言えば殺す

と脅されたからかもしれない。

「主」

弥十郎は告げる。

「おもんから目を離すな。とは言っても、ここは遊女屋。人の出入りが多くて、とても目が行き届かない、か」

口先だけの約束をしてほしいわけではないが、それを求めている自分自身に途中で気づいた。〈藤乃家〉の女将に預けるということも、考えないではなかったが、あそこも客商売。人の出入りの多さにおいては、ここといい勝負である。

「いくらなんでも家には……遊女を連れて行ったら、流石に山姥も怒り心頭だろうぜ。だが、おもんをここに置いて行くのは」

ひとりで言い、ひとりで答えている弥十郎に、主の幸蔵はいささか呆れたような顔をみせる。

「考えすぎなのではありませんか。狙われたのは、緒方様。おもんではございませんよ」

「邪魔なおれを始末した後、おもんを消そうとしたのかもしれねえ」

「そうは仰いますが、緒方様」

と、主は急に声をひそめた。弥十郎は腰を屈めて、幸蔵の口もとに耳を近づける。

「ここだけの話でございますが、おもんに医者や薬を手配してくれているのは、〈むらたや〉さんでございます。その〈むらたや〉さんが、刺客を差し向けるとは、とうてい思えません。なにか証でもあるのでございますか」

「さあて、な」

弥十郎は帯の前をぽんと軽く叩いた。不可解な右衛門作の行動を、おもんの文が解明してくれるかどうか。

縛りあげられている男は、いっそう固く唇を引き結んでいた。

六

番屋に運ばれる亡骸と男に同道し、同心の調べに応じて、弥十郎が家に戻ったとき、ちょうど五つ（午後八時）を知らせる鐘が鳴り始めた。

「ただいま戻りました」

帰宅を告げる声が鐘の音にうまく掻き消される。もっとも聞こえにくいよう、わざと声を小さくしていた。答える声はない。これ幸いと廻れ右をしようとしたが、

「弥十郎か」

玄関の方で多香女の声が響いた。

「地獄耳はご健在か」

諦めて、中に入る。玄関の上がり框に、仁王立ちになっている多香女が、いつも以上に大きく感じられた。耳を澄ませば、しくしくと、若い娘の泣く声が聞こえてくる。おこまが佐兵衛を思い、泣いているのだろう。

「申し訳ありませぬ」

玄関先でとりあえず頭をさげた。背丈の差があるため、弥十郎が三和土に立つと、多香女とほとんど同じ目線になる。できることなら目を合わせたくないのに、いやでも間近に迫っていた。

「祖父のように慕っていた者が、昨夜、亡くなりましてな。おこまにも危害が及ぶ懸念がありますゆえ、少しの間、面倒を見ることにいたしました次第。母上にまずご相談するべきでしたが、またひと騒ぎございまして、話が前後いたしました。お許しください」

頭をさげたが、娘のすすり泣きは続いている。家にあげてもらえないのはすなわち多香女が怒っているのだろうと察した。

「今、申しあげましたように、家族と思い、暮らしていた者が亡くなったのです。おこまが泣くのは致し方なきことかと思いますが」

「泣いておるのは、おこまではない、初世殿じゃ」
「え？」
「先程、千春と申す者から文が届いての」
囁き声になったことだけで、内容が推測できる。
「ははあ、なるほど。おまえが豊臣家の血を引く姫である、などというのは真っ赤な嘘とでも記されておりましたか」
「うむ。おまけに、実は捨て子だったともな、記されておったのじゃ」
「話はわかりましたが、母上」
「なんじゃ」
「銭を催促するように、右掌を差し出したままで話をするのは、おやめください。わたしを家にあげてくれないつもりですか」
「催促するように、ではない、催促しておるのじゃ。この間も言うたが、物が高直での。米、味噌、醤油と、我が家の台所からは消え去っておる。聞けば、白魚は豊漁になっておる由。礼金が入ったであろう、そら、早う出せ」
右掌でつんつんと、胸のあたりを突いた。待ってましたとばかりに、弥十郎は、多香女の胃のあたりを指してやる。

「礼金は、さよう、今頃、母上のこのあたりかと。いや、母上はお年の割に胃の腑もお元気、礼金はすでに厠に落ちてしもうたやもしれませぬな。これ巷では、『うんが落ちた』と申しまして、ははは、我ながら上手い洒落でございました。は……」

さらに笑おうとして、背筋が凍りついた。多香女ばかりか、およねまでもが、廊下に出て来て弥十郎を睨みつけている。

「はて、母上のお怒りはわかりますが、およね。おまえは、どうして、わたしを睨みつけるのだ」

「それは」

答えようとしたおよねを、多香女が慌て気味に身振りで止める。

「なんでもない。およねは、まだやることがあるであろう。あちらに行っておれ」

「は、はい。ですが」

「弥十郎には、わたしから話す。おまえはさがっておれと言うておるのじゃ」

「ですが、多香女様」

「いいから行け。おまえはわたしを信じられぬのか、ああ、もう、よい。おまえが行かぬなら、わたしが行く」

「お待ちください、多香女様」

いつになく真剣な主従のやりとりに、ぞくぞくした寒気を覚えつつ、弥十郎は自分の部屋に向かった。多香女が付いて来るかと思ったが、意外にも今日は諦めが早い。居間にいる二人の娘のもとへ行った。

――およねは、どうしたんだ？

弥十郎は首をひねりながら、居間の前を通り過ぎる。

「あたしも捨て子だったの」

おこまが、健気にも初世を慰めていた。

「元気を出して、大丈夫よ。生きていれば、いいこともあるって、おじいちゃんがいつも言ってた。本当だったもの、本当よ。あたし、おじいちゃんと一緒にいられて、本当に幸せだった」

慰めているうちに、こみあげてくるものがあったのだろう。おこままで、ぽろぽろと大粒の涙を流し始めた。

「おこま」

居間に入ろうとした弥十郎を、多香女がうるさげに手で追いやる。女子を慰めるのは得意だが、それはある程度の年に達した相手という条件付きだ。おこまと初世はあまりにも幼すぎる。慰め役は多香女にまかせて、自分の部屋に戻った。

「二人とも、そのように嘆くでない」
多香女の声が聞こえてくる。
「で、でも、わた、わたしが、す、捨て子だったなんて」
しゃくりあげながら、初世が訴えた。
「豊臣家の血を引く娘だと、世が世なら姫様なのだと……そ、それが、ただの捨て子だったなんて」
「捨てられたのではない、選ばれたのじゃ」
多香女は言った。
「選ばれた？」
初世が問いかける。弥十郎は耳を傾けずにいられない。夢と消えた豊臣家の財宝、殺されてしまった佐兵衛。初世とおこまはそれぞれに、大人でも耐えきれないほどの苦しみを与えられた。多香女はその苦悩に、どうやって、答えるのだろうか。
「さよう」
よくとおる声が続いた。自信たっぷりであることが、離れた座敷にいても伝わってくる。
おそらく多香女は二人の娘に、しっかりと眸を合わせているに違いない。
「『天に不測の風雲有り、人に旦夕の禍福有り』と言うではないか。天候には予測しがたい

変化があり、人の運命もまたたく間に、禍が起こったり、福が訪れたりする、というような意味じゃがな。今は禍の中にいるように思えても、明日にはそれが福に変わっているやもしれぬ」

ひと息、吐いて、さらに言った。

「考えてもみるがよい、江戸にどれほどの人がいることか。数多くの中から、不思議な縁に導かれて、おこまと初世殿は出逢うたのじゃ。こんな目出度いことがあろうか」

「目出度いこと」

繰り返したのは、おこまだった。

「いかにも、目出度いことよ。ひとりでは寂しいやもしれぬが、二人ならば寂しさもやわらぐ。ひとりではできないことも、二人ならばできよう。おこまと初世殿は、今日から姉妹になるがよい」

「姉妹に」

今度は初世が繰り返した。二人はどちらからともなく眸を合わせたに違いない。なんともいえない沈黙が訪れる。あたたかさの中に、照れと躊躇いが含まれているような、どこか気恥ずかしさを覚える沈黙。

まさに『無音の音』だった。

弥十郎の耳には、あらたな出逢いを得た娘たちの、高まる鼓動が聞こえている。幼い二人ゆえ、まだまだまわりの手助けがいるだろう。しかし、少なくともひとりではない。支え合う相手に出逢えたのだ。これを僥倖と言わずして、なんと言うのか。

「そなたたちはの、天に選ばれたのじゃ。それゆえ、今、ここにいる」

多香女が穏やかに告げる。倅には決して掛けることのない慈愛に満ちた声だった。そして、ふたたび居間には静かな時が満ちる。

――今、ここにいる。

弥十郎は、はっとした。おもんも言っていたではないか。

〝旦那が来てくれたお陰で、あたしは助かったんだよ。だから、今、ここにこうしていられるんだ〟

「そうだ、おもんの文」

迂闊にも失念していた文のことを思い出した。落としたのではあるまいか。帯の間を探ると、指先に小さな紙切れがふれる。広げたとたん、芳しい薫りが、ふわり、と立ちのぼった。

「蓮の花か」

紙切れには、なにも記されていない。おもんは字が書けないのかもしれない。あるいはだれかに見られた場合を考えて、わざと書かなかったのか。

だがしかし、立ちのぼる薫りが、なによりも雄弁に物語っている。おもんと喜伝次の騒ぎに、だれが関わっているのか――。

「これが証だな」

弥十郎はにやりと笑った。

第六章　三笠付

一

佐兵衛が遺した死の呟き、佐兵衛はだれかになにかを頼まれていた。それを断ったがために殺されたのか。口封じのために始末されたのか。あるいは両方の理由ということもありえる。

隠居所で初めて開かれた『運座のようなもの』。

はじめに詠まれた短歌は西行法師、その後、詠まれたのは万葉集の一首。不気味に静まり返った座敷、読み解いてはいけない禁忌の歌だったのではないだろうか。

春過ぎて夏来るらし白栲の衣乾したり天の香具山

天下取りを宣言する歌だと、佐兵衛は読み解いた。もしかすると、佐兵衛は弥十郎に知らせたかったのかもしれない。自分の後ろにいる『天下を取りたがっているだれか』のことを。

――そして、素性のわからない土左衛門。

土左衛門は、おこまに刺された男という可能性が高い。吾妻橋近くの水戸家の下屋敷まで、逃げ帰ったものの、そこで事切れた。面倒を怖れた者たちは、死骸を水路に投げ棄て、それが大川に流れ出る。

――おもんと喜伝次はどうだ。佐兵衛の騒ぎに関わりがあるのか？

託されたのは、なにも記されていない紙片。立ちのぼる蓮の花の薫り。背後にちらつく神田須田町の扇屋〈むらたや〉の主、右衛門作。おもんは喜伝次に刺されたとき、弥十郎に訴えようとした。

〝あたしを殺せば〟

どうなると、喜伝次は言ったのか。借金を帳消しにしてもらえる、とでも言ったのではないか。喜伝次は『だれか』にそう言われて、凶行に及んだのではないのか。

そんなことを考えつつ、弥十郎は、眠りについたのだが……。

「だれだ」

翌日の未明、人の気配を感じて飛び起きる。障子越しの薄明が、枕元に座るおよねの顔を

浮かびあがらせていた。

「およね」

安堵したとたん、思わず悪態が口をついて出る。

「驚かせるんじゃねえ。年甲斐もなく、夜這いでもしようとしたか。まあ、徳兵衛とはすでに茶飲み仲間だろうからよ。気持ちはわからなくもねえが、生憎とおれの方は間に合っているんだ。およねの御褥指南は、丁重にお断り申しあげるぜ」

笑い飛ばそうとしたが、およねは笑わない。

「お話があるのです」

深刻な表情に、鬼気迫るものを感じて、弥十郎は尻で後ろにさがる。摑みかかられたとたん、おかしな『もの』が伝染るように思えたからだ。

「どうしたんだ、落ち着け、あ、落ち着いているか。落ち着きすぎるのも、ちょいと困りもんのような気がしなくもねえが」

「弥十郎様」

およねは、膝でじりっとにじり寄る。

「な、なんだ？」

弥十郎は尻で後ろにさがる。にじり寄られ、尻でさがっているうちに、壁際まで追いつめ

られた。およねの思い詰めた暗い顔が、眼前に近づいて来る。逃げようがなくて、両手を前にあげた。

「参った、なにがなんだかよくわからないが、参った。話を聞くから待て」

「多香女様のことなのです」

陰々滅々（いんいんめつめつ）たる声で、およねは訴えた。

「わたしが大切にしていた……」

「およね！」

多香女が勢いよく飛びこんで来る。

「わたしから話すと、昨夜、あれだけ言うたではないか。おまえはわたしのことが信じられぬのか」

「でも、話す、話すと言うだけで、お話しくださらないではありませんか。明日にはと日延べされたのも、一度や二度ではありません。今日こそは、わたしから弥十郎様にお話しいたします」

「ならぬ」

「いえ、お話しいたします。お聞きください、弥十郎様。幸いにも今朝は、市之助様もおいでになられております。ご兄弟が揃っておられる方が好都合でございますので」

「兄上が？」

廊下に目を転じて、ようやく弥十郎は、長男の田中市之助がいることに気づいた。影の薄い長男は、当惑したように主従の様子を見つめている。

「あ、おはようございます、兄上」

挨拶したとたん、市之助も弥十郎に気持ちが向いたのか。唾を飛ばさんばかりに大声を張りあげた。

「寝惚け眼でなにを言うているのじゃ。少しも早うないぞ。先程、明け六つ（午前六時）の鐘が、うるさいほどに鳴り響いたというに、ようも目を覚まさなんだものよ。米も味噌も醤油も塩も、なにもないと聞いたゆえ、わしは夜明け前にそれらを運んできたというに。だいたいがだな、おまえは」

「小言はあとでゆっくりお聞きいたします」

聞くつもりなどないが、とりあえず小言を中断させる。不安げに部屋を覗きこむ初世とおこまに、朝が苦手な弥十郎としては、精一杯の笑みを返した。

「二人には関わりなきことだ。書の稽古でもしていなさい」

言い置いて、立ちあがる。

「本当でございますね、弥十郎様。わたしの話を聞いてくださるのですね」

なおも食いさがるおよねに、頷き返して、廊下に追いやる。
「話は聞くゆえ、着替えぐらいさせろ。飯を食い、支度をしたら話を聞く」
障子を閉めてもうひと眠りといきたかったが、戸を閉める間際、市之助が飛びこんで来た。
「なんの騒ぎなのだ。母上とおよねは、どうしたのだ」
「わかりませんよ。たいしたことじゃないと思います。およねは気鬱の病かもしれません。年のせいもあるのかもしれませんが、近頃、少し様子がおかしかったんですよ」
布団を畳み、着替えをしながら、ふと思いついた。
「兄上。長谷川平蔵殿のことをご存じですか」
「あたりまえではないか。長谷川様は火付盗賊改として、盗人どもを厳しく処罰なされたお方。罪人を更正させるためにと、人足寄場を造られたことは、おまえも存じおろう。寄場は言うなれば、罪人が手に職をつけるために設けられた場所。牢屋敷から出た折、すぐ働けるようにという、ありがたーいお考えよ」
両手を合わせて、拝む真似をした。頭ひとつ分ほど身長差があるため、自分が拝まれているようで複雑な気持ちになる。
「人足寄場については、わたしも知っています。他になにか珍しい話などはありませんかね」

弥十郎は帯を締めつつ、訊いた。
「長谷川様のことでか」
「はい」
「そうよな。火付けを働く者や、盗人に対しては、それはそれは厳しいお方だったようじゃ。ときには話を聞くだけ、などと称して、呼び出したところを捕縛したこともあるとか。使うていた小者たちも、一癖も二癖もある連中だったのであろう。そういう強引なやり方を、非難する者も少なくなかったようじゃ」
「相手が一筋縄ではいかぬ連中となれば当然でしょう。綺麗事を言っていては、悪党どもは捕らえられませんよ」
着替えを終えれば、朝の一服となる。およねがいないのを確かめてから、障子を開け放って、縁側に腰をおろした。仕方なさそうに市之助も隣に座る。
「今日もいい天気になりそうですな」
「天気のことよりも、母上だ。長谷川様と母上が、なにか関わりがあるのか」
だれよりも母想いの市之助は、すべて多香女に結びつけようとする。
「いえ、母上は関わりありません。あの時代から生きていたのであれば、長谷川殿の女房にでもおさまっていたやもしれませぬが、ううっ、寒！」

ぶるっと身震いする。

「どうしたのじゃ」

「もしかしたら、母上は享保の頃から生きていたのやもしれぬと思い、ぞっといたしました次第。ありえぬことではないと思いまして」

物の怪のような母のことよりも、今は長谷川平蔵のことに気持ちを向けた。

「他にはありませんか。長谷川殿が、そう、裏で金を稼いでいたなどという話を聞いたことはありませんか」

長谷川平蔵の名を告げたあれは、もしかすると、金儲けの指南なのではないか。弥十郎は欲まみれの己自身を知っているゆえ、そう考えていた。が、長男は堅物で真面目の上に『クソ』がつく男。

「ない」

自信ありげに断言する。

「長谷川様に限って、裏で金を稼ぐことなどありえぬ。さいぜんも言うたように、捕縛に関しては、ぎりぎりの、ともすれば非難を浴びるような真似をなされたやもしれぬがな。金儲けに関しては、わしは知らぬ。奉行所に残されおる文書にも、そのような記述はないように感じたが」

と、語尾に微妙な含みを残した。もはや奉行所では慣例となっている袖の下や付け届けといったものを、長谷川平蔵や手下たちも受け取っていただろうと、市之助も考えているに違いない。

「ただ」

躊躇いがちに呟き、言葉を止める。

「ただ、なんでございますか」

弥十郎に促されて答えた。

「ご老中、松平定信様は、長谷川様を嫌うておられたとか。人足寄場の建議については、『まかせられるのは平蔵しかいない』と仰せになられていたにもかかわらずだ。結局、最後まで、長谷川様を町奉行の座に就けることはなさらなんだ。それがわしにはようわからぬ。なぜ、ご任じなされなかったのであろうか、と」

松平定信は、八代将軍吉宗の孫で、老中になる前は白河藩主を務めていた。吉宗の子供と孫が創始した御三卿のひとつ、田安家徳川家に生まれている。天明七年（一七八七）六月、田沼意次失脚の後を受けて老中首座に就任。寛政の改革を指導した。

「長谷川殿は民に人気がありましたからな」

弥十郎は即答したが、市之助は訝しげに眉を寄せる。

「はて、どういう意味じゃ」
「妬みでござる。定信様は、民に人気のある長谷川殿が、羨ましゅうてならなんだのでございましょう。了見の狭いお方だったのではありますまいか。自分より人気のある長谷川殿が町奉行の座に就けば、民はますます『長谷川様』となるは必至。それが許せなかったに違いありませぬ」
「ふぅむ、男の嫉妬か」
市之助はそれでも今ひとつ得心しかねている様子だった。鈍い一面もあるが、弥十郎は兄のこういうところが決してきらいではない。
「ま、世の中、色々な者がいるということでござる。そうそう、人足寄場のことですが、今はどうなのですか。罪人が職を得られるよう、手に技をつけてやると聞きましたが、うまくいっているのですか」
長谷川平蔵が大きく関わった事柄といえば、人足寄場だが、内情を詳しく知るのは、役人しかいない。その役人とて、係にならなければ一般的な話しか知りえようがなかった。
「明かり用の菜種油を作っているようじゃが、わしの耳に入って来るのはその程度よ」
市之助もその例に洩れず、弥十郎が知る程度の話しか口にできない。
「儲けているんですかね」

「わからぬ。たとえ今、そこそこ儲けが出ていたとしてもだ。長谷川様の時代には、無理だったであろうな。建議がとおって、やっと寄場ができたばかりでは、とうてい儲けるまではいくまい」

長谷川平蔵と小判を結びつけたくないのか、市之助は少しむきになっている。が、弥十郎も頷くしかなかった。

「確かに。兄上の仰るとおりですな」

煙草盆に灰を落としたとき、裏木戸の開く音が聞こえた。どたどたという大きな足音とともに、姿を見せたのは、三男の山田三左衛門である。いつものように何度も水をくぐって色が褪めた着物姿で、風呂敷に包んだ大荷物を抱えていた。家を追い出されたかのような、哀れをもよおす様子に、弥十郎は目を丸くする。

「三左殿」

思わず腰を浮かせて、三左の背後を見やった。

「里尾殿やお子たちは、一緒ではないのですか」

「おらぬ。今日はわたしひとりじゃ。弥十郎にこれを」

三左衛門は縁側に荷物を置き、包みをほどいて風呂敷を広げる。中から出て来たのは弓矢だった。

「教えてもらえぬかと思うてな、指南役を頼みに来た次第。おまえは武術だけは、昔から得意であったゆえ」

「だけは、というのはよけいです」

しっかりと言い返して、「ですが」と続けた。

「我が家はちょうど取り込み中でござってな。それに、弓矢の稽古をするような広い場所は……」

「弥十郎様」

およねの厳しい声音と表情が、朝の一服を無理やり終わらせた。弥十郎と市之助、そして、三左衛門まで加わるはめになり、緒方家にはなんともいえない緊張感が漂っている。

多香女と三兄弟、徳兵衛とおよね夫婦が居間に集まった。

二

「『三笠付』でございます」

開口一番、およねが言った。

「多香女様は、それをおやりになっておりました」

「……」

座がしんと静まり返る。『三笠付』とは、冠付（かんむりづけ）――点者が出した上五字、つまり冠に、中七字、下五字をつけて一句とする遊び――という俳句遊びのひとつである。当初は純粋に遊びだったものが、だんだんと博奕（ばくち）的要素が強くなってきていた。

冠付の題のひとつに二十一句ずつつけた句を並べ、その中から参加者の好きな句を三つ選ばせて、点者が選んだ句と一致した句が多い者を勝ちとする。そんなことがなかば公然と広まるに従い、幕府も黙認できなくなり、何度となくお触れが出されていたが……。

「は、母上」

市之助が悲痛な声をあげた。

「人を集めて『博奕三笠付』をしてはならぬ。もし行えば流刑（るけい）、場合によっては死罪（しざい）。あるいは家財を没収して身分を落とすこともあると、お上よりきつく申し渡されておるではありませんか。そ、それを」

急に言葉を切り、弥十郎を睨みつける。

「まさか、おまえが母上をそそのかして」

「兄上。いくらなんでも、あまりのお言葉。わたしがそのようなことをする男に見えますか」

「見える」
「……」
返す言葉を失ったものの、これでもいちおう当主。
「運座に行ったのは、書を売って、生計に必要な銭を得るためだとばかり思うておりましたが、そうか。およねは、母上に言われて、虎の子を注ぎこんだか」
うんざりしながら話を進めた。近頃、およねの様子が、おかしかったのを思い出している。物言いたげだったあれは、このことを告げたかったからだろう。先刻、弥十郎と多香女が、白魚の礼金云々の話をしているとき、鬼気迫るような目を向けていた意味も、これで得心できる。
「はい」
およねは力無く俯いた。
「絶対に儲かると言われまして」
「幾ら注ぎこんだ」
「五両」
消え入りそうな声になる。多香女が早口で継いだ。
「間違いなく儲かるという話だったのじゃ。勝ちの句は、はじめから決まっていての。それ

に賭ければいいだけだと聞いたゆえ、およねも誘うたのじゃ。そら、ここから先、色々と不安ではないか。年はとるわ、物は高直になるわ、と、心休まる暇がない。金はいくらあっても困るものでなし、絶対に儲かる、とな。聞いた、ゆえ」

流石の多香女も、次第に声が小さくなる。

「なさけないことを」

弥十郎は一喝した。

「多香！」

亡き父の口調を真似ると、全員の目がいっせいに集まる。多香女も市之助も三左衛門も徳兵衛夫婦も目を見開いていた。弥十郎は当惑気味に一同を見まわした。

「なにか？」

「いや、よう似ておると思うてな」

市之助の言葉に、多香女も頷いた。

「似ておる、そっくりじゃ。いや、姿形が似てきたとは思うていたが、まさか声もこれほど似ておるとはな。もう一度、言うてみてくれぬか」

「多香っ、女主たるそなたが、徳兵衛とおよねに不安を与えてなんとする！」

ふだん頭のあがらない母を叱りつけるのは、なかなかいい気分である。二度とこんな機会

はないかもしれない。
「もう一度」
乞われるまま、繰り返した。
「よりにもよって、『三笠付』に手を出すとは言語道断」
「今一度じゃ」
「御家断絶となった折には、なんとする。奉公人たちがやろうと誘うても、それを窘めるのが、そなたの役目であるものを」
「もう一度だけ」
「……母上」
弥十郎は吐息まじりに告げる。
「話をはぐらかせて、ごまかそうとしても駄目でございますぞ。およねが色々と不安になるのは、女主に対してであるのはあきらか。この始末、さあ、どうするつもりでございますか。さあ、さあさあ、お答えを」
「どうと言われてもじゃな、点者の行方は杳として知れぬ。姿を消してしもうたのじゃ。当然のことながら、注ぎこんだ金子の行方も……」
もごもごと口ごもる答えに、わっと泣き声が重なった。

「ひ、ひどうございます、多香女様。お話が違います。わたしはなけなしの蓄銭（へそくり）を、全部、注ぎこみましたのに。間違いなく倍にして返すと仰いましたのに」

「いかにも、母上が悪い」

このときとばかりに、弥十郎は背中を反り返らせた。

「仕方ありませぬな、兄上。このままでは、徳兵衛とおよねの気持ちがおさまりますまい。奉公人から金を巻きあげた、などという噂が広まったりしては、緒方家の恥でございます。とりあえず、五両、用立ててはいただけませぬか」

緒方家において金に関する『とりあえず』は、『永遠に』を意味する言葉だ。市之助もわかっているだろうが、兄弟の中ではだれよりも母想い。さらに与力として、御法度を破った母を庇いたいという気持ちもある。

どこからかこの話が洩れて、島送り、いや、死罪でも申し渡されたら……すでに顔が青ざめていた。

「五両だったな」

懐から出して、財布を開くと、またまた全員の目がその財布に集まる。ふだんから小判が入っていること自体、弥十郎には驚きだったが、他の者とて同じ思いに違いない。およねに渡される五両の行方を、母と兄弟は目で追いかける。

「市之助」
多香女が右掌を差し出した。
「わたしも、その、なんと言えばよいのか、さよう、大事な蓄銭を注ぎこんでしもうてな」
二本、指を立てている。市之助は呆れた様子で、じっと母に目をあてる。
「次はありませぬな。二度となさいませぬな」
「しない。約束する」
「では、此度だけということで」
渋々ではあるものの、二両、渡した。隣で右掌を差し出している弥十郎と三左衛門に、つまらなさげな一瞥をくれる。
「なんじゃ、この掌は」
「いえ、わたしも此度だけはということで」
「右に同じでございます」
負けじと三左衛門も訴えたが、
「甘い」
ぴしゃりと二人は掌を叩かれた。おこぼれに与ろうとした目論見は潰えて、虚しさだけが残る。満面の笑みになって出て行く徳兵衛とおよねを、兄弟は名残惜しげにいつまでも目で

追っていた。『三笠付』は仕組まれた罠、消えた点者が企てた罠、はじめから金を騙し取るつもりで……。

そこまで考えて、はっとした。

「まさか」

おもんと喜伝次、おもんの客として遊女屋を訪れていた〈むらたや〉の主、右衛門作。『ねがはくは』という西行法師の歌を口にした遊女。おもんらしからぬあの歌といささか不似合いな高価な香。

〝おまえが、おまえのせいだ。大丈夫だと言ったから〟

語気荒く詰め寄っていた喜伝次。夜逃げしたにもかかわらず、戻って来たうえ、凶行に及んだ。

〝あたしを殺せば〟

おもんは刺されたとき、確かにそう言いかけた。話すのを止めたのは右衛門作である。喜伝次はおもんを殺せと、だれかに命じられたのではないか。だれかに借金を帳消しにしてやると言われて、おもんを殺そうとしたのではないか。

「喜伝次の借金は、どうやってできたのか」

声になった呟きを、市之助が耳に留める。

「喜伝次だと？」

三

一瞬、だれのことかわからないようだった。お偉い与力様は、〈桔梗屋〉での騒ぎを遊女と客の揉め事としか思っていない。市之助は現場に来なかったし、番屋にも現れなかった。このことからも関心の薄さが見て取れる。

「お忘れですか、兄上。深川の遊女屋で、騒ぎを起こした男ですよ」

弥十郎の言葉で、ようやく喜伝次のことが浮かんだらしい。

「ああ、〈桔梗屋〉の騒ぎか」

と答えたはいいが、上っ面の話しか頭に入っていなかった。

「あの男がどうかしたのか。借金ができたのは、おもんと申す女子に入れ揚げたからであろう」

「母上」

弥十郎は市之助を無視して、多香女に視線を向ける。

「ちとお訊ねいたします。『三笠付』に用いられた句は、もしかすると、西行法師の句では

ありませんでしたか」

「いかにも、西行法師であったわ。賭けろと言われたのは、『ねがはくは』という、あの有名な歌よ。もう話ができているのじゃと言うていた。あの句に賭ければそれが倍返しになると」

ねがはくは花のもとにて春死なむその二月の望月のころ

賭けの対象にされたのは、思ったとおり西行法師の歌。それも、おもんが口にした歌だった。

「やはり」

弥十郎の頭の中で、ばらばらだった事柄がひとつに纏まり始める。佐兵衛が毒殺された騒ぎと、遊女屋での騒ぎには、繋がりがあるように思えた。

歌である。

禁じられた『三笠付』を、おもんは右衛門作から入れ智恵されて、客に勧めていたのかもしれない。もちろん、おもんの懐にも紹介料として幾ばくかの銭が入る仕組みだろう。おもんに勧められて『三笠付』に金を賭けた喜伝次は大損する。夜逃げせざるをえないほどの損

害を受けたが、それならば、と、おもん殺しを持ちかけられた。

——いや、待てよ。

弥十郎の頭に、もうひとつの考えが浮かぶ。もしかすると、はじめは喜伝次が右衛門作を脅したのではないか。奉行所に『三笠付』のことを訴えてやる、それがいやなら借金を帳消しにしろ。

「なるほど」

と、ひとりごちる。

「夜逃げした喜伝次を、たやすく探し出すことはできなかったはず。喜伝次が〈むらたや〉に現れたと考えた方がしっくりくるな。そこで右衛門作は、おもん殺しを持ちかけた」

「なんの話をしているのだ。〈むらたや〉がどうしてそこに出てくるのだ」

市之助は話がまるで見えないらしく、ただただ当惑している。

「おもんが刺されたのは、見世が暇な昼間でございます。男衆も目を光らせており申した。にもかかわらず、刺されたのはすなわち、だれかが隙を見て、喜伝次を中に引き入れたのではないかと、わたしは考えた次第」

あのとき、見世には〈むらたや〉の主、右衛門作が訪れていた。商人が昼間から深川の岡場所にいること自体、思えばおかしな話である。弥十郎は右衛門作の冷たい目と、刃傷沙汰

を目にしながらもやけに落ち着き払っていた態度が引っかかり、逆に興味を覚えたのだが……首をひねる市之助に代わって、多香女が声をあげた。
「〈むらたや〉とは、もしや、神田須田町の扇屋のことか」
「はい。母上におかれましては、ご存じでございますか」
「あたりまえではないか。あそこは、扇だけではのうて、京の香も扱うておる。我が家は倅殿の稼ぎが悪いゆえ、近頃はとんと無沙汰をしておるがの。昔はよう買うたものじゃ」
「流石は高いものがお好きな多香女様。ようご存じでございますな」
「なんじゃと？」
「いえ、なんでもありませぬ。では『三笠付』については、いかがでございましょうか。〈むらたや〉が点者をしていたというような話を……」
「なんだと？」
今度は市之助が目を剝いた。大きく目を見開くと、多香女そっくりの表情になる。同じような顔をしたまま訊いた。
「今の話は確かなのか、弥十郎。そのような話を聞いたことがありますか、母上」
「確かかどうかはわかりかねます」
「〈むらたや〉が『三笠付』の点者という話は耳にしたことがない」

弥十郎と多香女は、二人同時に答えた。話に加われない三左衛門は、縁側に出て、鼻毛抜きを始めている。緒方家の騒動さえ落ち着いてしまえば、あとは他人事。とはいえ、世の騒動はこれからという感じになっている。

「也寿にはすでに〈むらたや〉を調べるよう申しつけました」

弥十郎は言った。

「出入りしている大名家や旗本を調べろと言うてあります」

その言葉に、多香女が続く。

「大名家のいくつかは、わたしでもわかる。〈むらたや〉の得意先は、御三家や御三卿といった大大名家ばかりゆえ」

「なんと」

あらためて、母を見やる。

「つまり、水戸家も〈むらたや〉の得意先でございますか」

首の後ろが、ちりちりし始めていた。佐兵衛の隠居所から、さほど遠くない場所にある水戸家の下屋敷。おこまに刺された男は、下屋敷の奉公人だったのではないか。怪我をして辿り着いたものの絶命、面倒をきらった屋敷の者に水路へ投げこまれた。亡骸は水路から大川に流れ出て、吾妻橋の近くで見つけられる……。

頭の中で繰り返し響く事柄を、後押しするように、多香女が力強く答えた。
「わかりきったことを訊くでない。御三家と言うたではないか。当然のことながら水戸家も入っておる」
「は。つまらぬことを申しました」
つまらないどころではない、実に有意義な面白い話だった。佐兵衛が開いた『運座のようなもの』、招かれた客の中には二人の侍がいた。そこで詠まれた西行法師の歌と、万葉集の中の一首。

春過ぎて夏来るらし白栲の衣乾したり天の香具山

佐兵衛はこの歌を天下取りを企む歌だと言っていた。不気味に静まり返った座、そして、その後、口々にあがった異論。佐兵衛はその夜、毒を盛られて死んだ。
「也寿は無駄足に終わるやもしれませぬな」
独り言のような呟きを、またもや市之助は理解できない。
「どういう意味だ？」
「調べるまでもなかったということです。母上のお答えが、語っているように思えなくもあ

りません。それはともかく、兄上。佐兵衛が毒殺されたことについてはいかがですか。調べは進んでおりますか」

「ええい、急かすでない。昨日の今日ではないか。しかも、運座に招かれた客は、だれひとりとしてわからぬという有様。雲を摑むような話じゃ。調べがそうたやすく進むはずがない」

「そう、万が一、大大名家でも絡んでいたときには、調べようがありませぬからな。佐兵衛の死は闇から闇へ葬られる定め」

「なに？」

市之助の顔色が変わった。

「佐兵衛の騒ぎの裏には、大大名家が関わっていると申すか」

「さあて、いかがでございましょうや」

含みを残して、立ちあがる。慌て気味に三左衛門も腰をあげた。

「待て、弥十郎。次はわたしの番だ。弓の指南を頼む。稽古をつけてくれ。このままでは、また里尾を奉公に出さねばならぬ。御乳持役などさせたくないのじゃ。お頭が出した流鏑馬まがいの稽古に、なんとかして通らねばならぬ」

「間に合いませぬ。第一、どこで稽古をするのでございますか。射った矢が、とんでもない

ところに飛び、だれかに怪我をさせかねませぬ。三左殿のその細い腕では、弓を引くのもやっと。二日や三日、稽古をしたところで、まともに弓を射ることなどできませぬぞ」

「しかしだな」

「三左よ、すべては指南料次第じゃ」

多香女がすかさず掌を差し出した。

「さすれば、弥十郎も気合いを入れるであろう。あるいはそなたの代わりに、流鏑馬まがいの稽古に出るということもありうる、やもしれぬ」

「え？」

三左衛門は一瞬、怪訝そうな顔をしたが、次の瞬間、それは晴れやかなものへと変化する。

「そうか、なるほど。その手がありましたな。流石は母上、山田家の名代を立てればいいだけのことでござる。いや、これで我が家は安泰、里尾の奉公も取り止めとなって、万々歳でございます」

兄が喜んでいるうちに、弥十郎はいち早く逃げ出した。面倒なことは自分に押しつけ、多香女は指南料を懐に入れる。一文にもならないことは、やらないのが風来屋の流儀、なのだが……。

四

佐兵衛のことに関しては、そうも言っていられない。

家を出た弥十郎は、おこまと初世を連れて、向島の隠居所に足を向けた。〈梅若座〉の男衆は、早朝から訪れていたのだろう。その男衆と一緒に、おこまは、座長の松太郎が番屋から引き取って来た佐兵衛の亡骸を浄めて、棺桶に納めている。

――水戸家か。

畦道に立って、彼方を見やった。かすかに白っぽく見えるのが、水戸家の下屋敷を囲む海鼠塀だろうか。時刻はまだ午前、空は晴れわたり、ぶらぶら歩き日和になっていた。が、弥十郎はのんびり歩いているわけにはいかない。

――蟹男たちに襲撃されたとき。

畦道を歩きながら、四人の刺客と戦ったときのことを思い出していた。弥十郎に斬られて死んだ大男を、三人は懸命に運んでいる。翌日、助っ人を頼んだ宗順が、賊の逃げた道筋を調べて、こう告げたのだ。

〝自ら露呈したも同然じゃありませんか。足取りがわからなくなったのが、手がかりなんで

すよ。いえ、足がかりかもしれませんね。足跡を消して、まさに足がついた〟

弥十郎は川まで出て船で運んだものとばかり思っていたが、もしかすると、連中はごく近くから来たのではあるまいか。だからこそ、時を置かず足跡を消しに戻って来ることができた。そう考えたとき、頭に浮かぶのは……。

「あの屋敷だな」

ふたたび彼方を見やる。

「弥十郎」

三左衛門が、柴折り戸から出て来た。付いて来るなと言ったのに、頑として聞き入れず、無理やりここに来ている。道すがら繰り返された頼み事を、また繰り返すつもりであるのはあきらか。弥十郎は無愛想に応じた。

「引き受けかねます」

「冷たいことを言うな、兄弟ではないか。二両までなら、なんとか出せる。うちも楽ではないが、此度だけは仕方がない。わたしの蓄銭を出そうではないか」

「よく蓄銭が作れましたな」

「里尾には言うでないぞ。なにかあったときのために、多少なりとも蓄えておかねばならぬと思うてな。二両までならじゃ。頼む、弥十郎」

拝まれてしまうと、そこは兄弟、無下にはできない。

「まあ、一度だけなら」

「ありがたい」

心から安堵した様子で、三左衛門は隣に来た。案じていたことが片付き、他に気持ちが向いたのかもしれない。

「先程、水戸家の話が出ていたが」

彼方を見やりながら言った。

「お頭によると、名馬を買い付けたいと思うておるらしゅうてな。水戸家の厩方が、昨年からあちこちに出向いているとか。お頭のもとにも『良い馬がいれば是非』という打診があった由。水戸家は御三家の中でも、台所事情が厳しいと聞いていたゆえ、いささか意外であったわ」

「名馬、ですか」

馬と聞けば、『あること』を思い浮かべずにいられないが、三男は特に気づいた様子はなかった。多香女の血を引いているにもかかわらず、市之助同様、あまり鋭い方ではないのである。

「女子であれば扇や香や簪、男は馬や武具。水戸家は音物にでも使うつもりなのやもしれま

せぬな」

弥十郎もまたあたりさわりのない答えを返した。

「うむ。台所が厳しいとはいえ、痩せても枯れても徳川御三家。われらとは比べものにならぬわ。そうそう、これもお頭より伺うた話なのだがな。水戸家の藩邸、いや、藩邸だけではないやもしれぬ。大工が度々屋敷に入っておるらしいのじゃ。しかもお上への届け出なしにな」

「ほう」

にやりと笑い、軽い口調で告げた。

「水戸家においては、謀反でも企んでおるのやもしれませぬな。屋敷を堅固にしつつ、足の速い名馬を揃えて、戦にそなえる。天下取りの準備ではありますまいか」

「まさか」

三左衛門は一蹴する。

「単に届け出が遅れているだけのことであろう。あるいは、すでに出されておるやもしれぬ。よりにもよって、水戸家が天下取りなどありえぬわ。おまえは時々、いかにも母上のお子らしいことを言うな。面白いが、いささか話が飛躍しすぎる」

そうであれば宜しいのですが、と、弥十郎は心の中で呟いた。佐兵衛を襲撃したのはだれ

なのか、殺めたのはだれなのか。襲撃に失敗して、逃げた者たちが逃げこんだのは、そう、彼方に見える大名家の屋敷ではないのか……。

「弥十郎様」

呼ばれて、振り返る。おこまがぺこりと頭をさげた。

「用意ができたか」

「はい」

「よし。では、寺まで同道しよう」

まさか棺桶を襲うようなことはないだろうが、おこまのことが案じられた。おもんの騒ぎと佐兵衛殺しの間に、関わりがあるかどうか今の時点ではわからない。しかし、おそらくは、なにも知らないであろうおこまを、念のためにと襲撃されては、佐兵衛も浮かばれまいと思った。

「おれは後ろから付いて行く。先に出るよう座長に伝えてくれぬか」

「わかりました」

「ちと家の様子を見たいゆえ」

言い置いて、弥十郎は一度、家に戻った。連座に招かれた客が、忘れていった品はないか。家の中から庭に出て、ぐるりと一周する。

「通夜も野辺送りもしないのか」
三左衛門が訊いた。
「しない方がいいだろうと言うたのです。また襲われかねませぬゆえ」
おこまも座長の松太郎も、この申し出をすんなり受け入れている。通夜や葬式の際、もう一度、毒を使われる懸念もあった。この家は一刻も早く引き払うのが得策。おこまは辛いだろうが、気持ちを切り替えるためにも、その方がいいと思っている。
――新しく掘り返した跡があるな。
弥十郎は、裏庭の一角に目を留めた。塵でも埋めたのだろうか。大雑把なところがあるため、初めて気づいただけかもしれない。が、なんとなく自然に手が伸びる。とそのとき、後ろでふたたび声が響いた。
「弥十郎様」
先に出たはずのおこまが、背後に立っている。
「どうした。なにか忘れ物か」
「いえ。ひとつ、お訊きしたいことがあるのです」
「なんだ」
「あの男のこと」

近づいて来て、囁いた。
「死んだのですか」
おこまに刺されて、おそらくは絶命したと思われる男。真実を教えれば、一生、重い罪を背負うことになる。
「いや、死んではいまい。おこまさんも知ってのとおり、おれの兄上は北町奉行所の与力だがな。そんな話は聞いておらぬ」
「でも、『もしかしたら、あの土左衛門が』って、弥十郎様のお知り合いが」
「おれの知り合い？」
すぐにはぴんとこない。おこまが早口で言い添える。
「ほら、お坊様と一緒にいた岡っ引きのような」
「ああ、也寿か」
そういえば、そんなことを言っていたかもしれない。おぼろげな記憶を探ったが、はっきりとは思い出せなかった。
「あれは別の騒ぎで川に落ちた男のことだ。土左衛門になって引きあげられたが、喧嘩の果てということがわかっている。佐兵衛さんが刺した男とは別人よ」
佐兵衛さんが、の部分を一語一語はっきりと言い、優しい嘘を作り上げる。

「そう、ですか」
あきらかに、おこまの表情がやわらいだ。
「よかった。それじゃ、あの男の人は」
「生きているさ。刺したのは素人ゆえ、たいした怪我ではあるまい。人というのは、そう簡単には死なぬものだ」
二度目の言葉で、今度こそ本当に安堵の表情になる。
「ほっとしました」
そう答えた顔に、ちらりと娘らしさが覗いた。ここ数日で、ひどく大人びたように思える。佐兵衛の死によって、いやがうえにも少女から娘へと脱皮しなければならなかったのかもしれない。
「弥十郎様、行きましょう」
おこまに手を引かれて、弥十郎はぐるりと庭をまわって行った。三左衛門も付いて来る。棺桶を担いだ一行が、前方の畦道を進んでいた。初世が肩越しに振り返り、おこまを見つけて、「早く」というように手招きする。
「さっき初世ちゃんを訪ねて来た人がいるんです」
手を振り返して、おこまは告げた。

「女の人でした。初世ちゃん、泣いていました。一緒に暮らしたいって」
「千春か」
艶(なま)めかしい肌が、思いがけず浮かんでいた。『三笠付騒動』で家族会議を開いているときに、千春が来たのだろう。緒方家に初世を押しつけたものの、やはり、人の子。長年、一緒に暮らした情はたやすく絶ちきれない。気になって様子を見に来たのではないだろうか。
――さて、どうしたものか。
庇護者を失った二人の娘。多香女は姉妹として生きればよいと言っていたが、二人だけで暮らすにはあまりにも心もとなさすぎる。さらに、生計をたてていくための金もない。
「どこかに隠し財宝でもあればな」
心の呟きが声になる。と、握りしめていたおこまの手が、ぴくりと動いた。幼い娘らしからぬ意外な反応に、弥十郎は小さな驚きを覚えて、おこまを見おろした。
「なんでもありません。おじいちゃんが生きていればと思って」
金のことで、小さな胸を痛めているのかもしれない。よけいなことを言ってしまったようだ。
「通夜もしてやれなくて、すまぬ。だが、また賊が来るやもしれぬからな。用心のためだ。先程も言うたが、ここは早く引き払(はら)うた方がよい。寺で心ゆくまで供養してやろうではない

か」
「はい」
こくり、と、おこまは頷いた。幼い少女の顔に戻っている。葬列を見送るように、雲雀が頭上を飛んでいた。

五

隠し財宝でもあれば。
おこまに告げた自分の言葉が、弥十郎の頭の中である変化を遂げていた。あるはずのない財宝、しかし、使い方によっては、面白いことが起きるのではないだろうか。
その夜。
弥十郎は、神田須田町一丁目に来ていた。〈むらたや〉をはじめとする見世は、暖簾を仕舞い、雨戸を閉めようとしている。向かいの路地に身を潜め、しばらく様子を見ることにしたのは、風来屋ならではの勘働きによるものかもしれない。
――千春。
ほどなく、潜り戸から姿を現した女を見て、驚きに目を瞠っていた。謎の女はそれに相応

しい動きをするのが常なのか。よりにもよって、あの千春が、〈むらたや〉の潜り戸から出て来るとは……。

——もしや、はじめから、それが目的か？

自分に近づいたのは、佐兵衛のことを調べるため、いや、佐兵衛の用心棒を引き受けたのは、千春が姿を消した後だったはず。あらかじめ知っていたとは思えない。千春を尾行けるか、右衛門作を突いてみるか。闇に吸いこまれるがごとく、藤色の着物が見えなくなるのを確かめた後、弥十郎は後者を実行することにした。

「邪魔するぜ」

潜り戸から〈むらたや〉の中に入る。

「あ、これは……確か緒方様でございましたな」

帳場にいた主の右衛門作が、上がり框に歩み出て来た。見世の中には、ほのかに香の薫りが漂い、大大名家御用達といった独特の雰囲気が感じられる。多香女を連れて来たら、さぞ喜ぶだろうが、緒方家にそんな余裕はない。

「どうぞおあがりください」

畏まる右衛門作に、小さく首を振る。

「いや、ここでいい」

と、上がり框に腰かけた。

「〈桔梗屋〉で顔馴染みの間柄だ。堅苦しい挨拶は抜きにさせてもらうぜ。ちょいと面白い話を小耳に挟んだもんでな」

「さて、どのようなお話でございましょうか」

「『三笠付』のことよ」

いきなり大石を投じる。右衛門作は眉ひとつ動かさない。が、一瞬、気配が消えたように思えた。目の前にいるのにいないような、おかしな感じを覚えたが、むろん、あくまでも弥十郎が感じただけのこと。かまわず続けた。

「主殿が点者をやっているとな、聞いたのだ。おれもひと儲けしたいと思い、こうやって恥をしのんで訪ねた次第。さいぜんの女もそうじゃねえのか」

顎を動かして、潜り戸を指した。ついでに千春のことも調べようと思ったのだが、右衛門作はいかにも商人らしい答えを返した。

「先程の方は、香をお求めにおいでになられたお客様でございます」

「初めての客か」

訊きながら、嘘だと確信していた。初世を押しつけた千春に、〈むらたや〉の香を買う余裕はないはずだ。じっと見つめたが、右衛門作は相変わらず能面のような表情をしている。

「さようでございます」
そっけなく言い、冷たい目を向けた。
「お訊ねの件につきましては、与り知らぬことでございます。『三笠付』はお上より厳しく禁じられておりますゆえ」
「さようか」
奉公人が運んで来た茶を、ゆっくりと飲む。おもんは西行法師の歌を口にしていた。あれはおそらく右衛門作の指南によるものであろうが、ここでおもんの話を出すのは憚られる。下手なことを言えば、また狙われるかもしれない。
「そうそう、向島の方でご隠居が殺められた話は聞いたか」
いささか不自然な流れになったが、強引に佐兵衛の話を持ち出した。佐兵衛殺しとおもんの騒ぎ、しきりにちらつく右衛門作の影。二つの騒動の間に共通するのは西行法師の歌だけである。
「はい。見世の者たちが、言っておりましたので」
右衛門作は、石のように堅固だった。どこをどう突いてやれば、綻(ほころ)びが生まれるのか。弥十郎は帯に挟んだままの、おもんの文に指先でふれる。
蓮の花の薫りが教えていた。

おもん騒動の裏には〈むらたや〉あり、なのだと。

「これは噂だが」

弥十郎は薫りの訴えに懸ける。

「殺められたご隠居だがな、なにをしていたのかは知らねえが、ずいぶんと稼いでいたらしいぜ。どこかに隠し金があるらしいと聞いたんだが」

ぴくり、と、わずかに右衛門作の眉が動いた。隠し金に反応したのは間違いない。取り澄ましているが、やはり、小判の魅力には勝てなかったのだろう。本性が現れた瞬間のように思えた。

――そういえば、おこまも。

なぜか、おこまのことが浮かんでいる。隠し財宝のことを言ったとき、握りしめていたおこまの手がぴくりと動いた。右衛門作は己の欲だが、おこまの場合は金さえあれば迷惑をかけなくても済むのにという、純な心の表れであろう。

「興味ねえかい」

俗物にわざと言ってやる。

「ございません。会ったこともないご隠居が、どこかに小判を隠していようと、てまえには関わりのないことでございます」

「もっともなお言葉だが、おれはお宝の話が好きでね。その隠居所に行ってみたんだがよ。どこに隠してあるのやらだ。飾り棚や水屋の中には、一文も残っていなかったが、畳の下までは見ていないからな。もしかすると、床下にでも隠してあるのかもしれねえ」

「畳をあげて、床下を掘ってご覧になれば宜しいのではありませんか」

右衛門作は唇の端をほんの少しだけ吊りあげる。嗤ったその顔がまた凍りつくように冷たい。ぞくりと悪寒を覚えた。

「邪魔したな」

弥十郎は立ちあがり、奉公人が開けてくれた潜り戸に足を向ける。外に出て行く寸前、振り向いた。

「ああ、そうだ。いつだったかは忘れたが、喜伝次がここから出て行くのを見たぜ」

二度目の大石はかわしきれなかったのか。

「え？」

右衛門作の頬がさっと引き攣る。行灯に照らし出された主の顔には、あきらかに狼狽のいろが浮かびあがっていた。

「なにか勘違いなさっておられるのではありませんか。喜伝次というあの男が、てまえどもの見世に来たことはありません」

「いや、確かに見た」
弥十郎はふたたび上がり框のところに戻る。引っかかったと内心、喜んでいたが、顔には出さない。座り直して、続ける。
「あれは、そう、喜伝次が夜逃げしたと聞いた後だったな。お袋に使いを頼まれてよ。この近くまで来たのさ。おれは何度か喜伝次を見ているから間違いねえ。うん、あれは確かに喜伝次だった」
ちらりと、斜め下から睨めつけた。
「なにをしに来たんだろうな。夜逃げする金を用立ててくれとでも頼みに来たか」
「めっそうもない。申しあげましたように、喜伝次という男には、一度も会ったことはありません」
相当、狼狽えているらしい。信じられない言葉を口にした。弥十郎は睨めつけたまま、切り返してやる。
「会ったじゃねえか、おもんが刺されたときによ」
「あ、まあ、そうですが、あのときが初めて。後にも先にも、あのとき一度だけでございます。驚きました。いきなり包丁を出して、ぶすり、ですからね」
しらじらしいことを、と、弥十郎は腹の中で苦笑いせずにいられない。商いがあるのに、

それを放り出して、昼日中、深川の岡場所にいたのはなぜなのか。右衛門作が喜伝次を手引きして、おもんを殺める段取りを整えたのではないのか。

「喜伝次は、『おもんを始末すれば、借金を帳消しにする』と、だれかに言われたらしいぜ」

ここぞとばかりに揺さぶりをかける。

「おまえさんも知ってのとおり、おれの兄は奉行所の与力だ。嘘を教えるわきゃねえからな。喜伝次はだれかに命じられて刺したのさ。間違いねえ」

もちろん嘘八百だが、知ったことじゃない。言い切った弥十郎を見て、右衛門作はみるまに青ざめた。もしや、命じた者の名を告げたのか。それを知ったうえで、ここを訪れたのか。そんな不安が渦巻いているように思えた。

「命じたのがだれか、今、調べているようだ。そのうち、ここにも役人が来るかもしれねえな。まあ、関わりがねえということだから大丈夫だろうがよ。いずれにしても、物騒な話じゃねえか。おちおち遊女屋にも行けねえや、と、そうだ。遊女屋で思い出したぜ」

とどめの一撃、肝心の話が残っている。

「おれも襲われてな。おもんの見舞いに行ったところ、新顔の男衆がいきなり匕首を持ち出したのさ。ご丁寧におれの刀を隠しやがった。そこへ牢人と思しき侍も加わり、ひと騒動よ。〈桔梗屋〉は鬼門だな。ろくなことがねえ」

睨み据えると、右衛門作は蒼白になった。あれもこの男の仕業なのではないか。弥十郎はそう考えている。刀を奪っておいたうえでという念の入ったやり口が、『おもん騒動』に似ているような気がした。

「てまえも慎まなければと思っております」

右衛門作は乾いた唇を舐める。

「しかし、流石でございますな。刀を奪われてもなお相手を倒すとは……腕がたつという風来屋の噂は、噂だけではなかったようで」

面倒だから世辞で、追い返そうという腹か。いやがられるとよけいに、居座りたくなってくる。

「二人がどうなったか訊かねえのかい」

意地悪く言った。

「どうなりましたので？」

「牢人は斬り捨てたが、男衆はうまい案配に捕らえてな。今、調べを受けているところだ。喜伝次よりも口が軽そうだからよ。ことによると、吃驚するようなことを喋るかもしれねえ。命じたのはだれか、おれも気になっているのさ」

喜伝次の名を出して、繋がりがあるんじゃないかと匂わせた。もはや右衛門作は顔面蒼白、

言葉を失っている。

「ま、〈むらたや〉さんも気をつけることだ。明日は我が身、なんだったら、おれが用心棒をやってやるぜ」

右衛門作を一瞥して、弥十郎は見世を出た。少し突きすぎたかもしれない。慌てふためいて、おもんと喜伝次を始末されては困る。

——見張りと見舞いがてら、あとで〈桔梗屋〉に行ってみるか。

ついでに天女と一夜、明かすのも悪くない。おもんは無理だが、他にも若い遊女がいる。まずは一杯ひっかけて、と、自然に足が速くなっていた。

六

馴染みの居酒屋〈瓢六〉では、すでに也寿が待っていた。

「遅いじゃありませんか、旦那」

「おれも色々と忙しいんだよ。無料働(ただばたら)きばかりってのが、ちょいと気に入らねえがな。仕方ねえや。怪我をさせちまったおもんと、墓の下の佐兵衛への見舞い金さ」

薄暗い見世の奥には、也寿以外にもひとりの客がいる。だが、酔いつぶれてしまったのか、

膳に突っ伏して高鼾をかいていた。愛想の悪さが売りという親父が、いつもの調子で酒を運んで来る。

「はいよ」

「親父。腹が減っちまってよ。湯漬けでいいから食わしてくれねえか」

わかったでも駄目だでもない。親父はかすかに、馴染み客にだけわかるような仕草で頷き返してから、台所に戻る。思わず悪態が出た。

「まったく、酒が旨くなけりゃだれも来ないぜ、こんな見世」

「旦那。つけがだいぶたまってますぜ」

すかさず響いた親父の返事に苦笑する。

「旨い酒さえあれば、なにも要らねえよ」

也寿が注いでくれた酒を飲んで、渇いた喉と気持ちを潤した。まずは喜伝次と捕らえた男の様子について訊ねる。

「二人はどうだ、なにか話したか」

「いえ、どっちも、だんまりでさ。旦那を襲ったやつですが、名前は政八。あちこちの賭場に出入りしているようで、田中様の配下の同心が、顔を知っていました」

「塒は？」

「この近くでさ。ですが、女房も子供もいません。長屋にはほとんど戻らねえって、大屋は言ってました」
「喜伝次とそいつ、政八だったか。目を離さねえようにしろ。特に喜伝次は危ねえからな。次に狙われるとしたら、あいつだ」
「口封じですかい」
「ああ、おもんも危ねえ」
弥十郎は帯に挟んでおいた『文』を也寿に渡した。
「なにも書いてありませんが」
「匂いを嗅いでみろ」
その言葉で、也寿は大袈裟に鼻の穴を広げ、思いきり深く息を吸いこんだ。
「ああ、なにやら艶めかしい薫りが……いいですねえ、風雅っていうんですか。あっしには縁のねえ薫りでさ」
くんくんと鼻をうごめかすその姿が、なんとなく、いかがわしい。自分を見ているような気がして、素早く『文』を奪い取る。
「返せ。言っておくが、これは蓮の花の薫りなんだぜ。艶めかしいというよりは、爽やかな匂いだ。まあ、ここでおまえを相手に香談義をするつもりはねえがよ。おれが言いたいのは

だな」
「わかってます」
急に真顔になって、答えた。
「おもんは、〈むらたや〉のことを教えたんでしょう。字が書けないんですよ、きっと。だから薫りで香を商っているお店のことを教えた。騒ぎの裏には右衛門作あり、じゃないんですかね」
雇い主よりもずっと役に立つ小者に、弥十郎は同意する。
「おれもそう思うぜ。ここに来る前、ちょいと寄って来たんだが」
「えっ、〈むらたや〉にですかい」
「うむ。おれはどの騒ぎにも、右衛門作が関わっているように思えてならねえのさ。佐兵衛が金を貯めこんでいたと吹聴しておいたからよ。お宝ほしさに、もしかすると、動くかもしれねえ」
おもん騒動、佐兵衛騒動、そして、弥十郎に放たれた刺客。也寿に話しながら、つい辰吉のことを考えていた。愛刀を奪うという念の入れように、凍りつくような右衛門作の目を思い浮かべずにいられない。気づかないうちに刀の柄にふれている。それに気づいたのだろう。
「へへへ、凄かったですぜ、辰吉姐さん」

也寿が言った。

「目の色を変えて、〈桔梗屋〉に飛びこんで行きまして、あ、これは旦那もご覧になったかもしれませんがね。あっしも探しましたが、どこを見てもお刀はなかったんですよ。ところが辰吉姐さんは、布団部屋に行きまして、へへ、布団の間に挟まっていた旦那のお刀を見つけ出したってわけでさ」

見透かされたようで、なんとなく面白くない。

「いやらしい言い方をするんじゃねえ。辰吉は勘働きがいいのさ」

軽く額を小突き、話を戻そうとしたが、

「辰吉ぃ？」

不意に奥の方から眠たげな声が響いた。

「お優羽さんを呼び捨てにするのは、どこのどいつだ、ええ、この龍吾が承知しねえぞ。小憎らしい面を見せやがれってんだ」

膳に突っ伏していた酔っぱらいが、ふらふらしながら立ちあがる。辰吉と見合いをした後藤龍吾だった。

「なんだ、公儀大棟梁の大工様じゃねえか」

つい皮肉っぽく応じている。

「なぁんだとお？」
呂律のまわらない口調で言い、龍吾はよろめきながら近づいて来た。据わった目は真っ直ぐ弥十郎に向いている。
「やっと来たか。旦那があんまり遅いんでよ。酔い潰れちまったぜ」
ひっく、ひぃっくと、しゃっくりのようなげっぷを繰り返す度、強い酒の臭いが吐き出される。酒好きとはいえ、これは嬉しいおこぼれではない。
「そりゃ、すまなかったな。おれを待っていたとは思わなかったよ。お詫びに一杯、馳走しようじゃねえか」
うるさいやつは、もう一度、酔い潰してしまうに限る。
「ささ、ここに座れ」
龍吾を座らせて、湯飲み茶碗になみなみと酒を注いだ。也寿が案じるような目を向けたが、「黙っていろ」と目で答える。龍吾は握らされるまま湯飲み茶碗を握りしめ、勧められるまま酒を啜りあげた。
「それで、どうしたんだい、兄さんよ。女にでも振られちまったのかい」
と、弥十郎は隣に座る。辰吉にと名指ししたかったが、それは口にしない。ついにやにやしそうになったが、也寿にちらりと視線で窘められた。ゆるみかけた口もとを意識して引き

締める。
「けっ」
龍吾は忌々しげに舌打ちした。
「わかっているくせに、それをわざと訊くんですかい。旦那も相当、いい根性しているじゃありませんか」
「そういう人なんでさ。悪気はないんで」
也寿がやんわりと割って入る。睨みつける龍吾の目には、危険な気配が漂っていた。弥十郎がなにか言い返そうものなら、言葉尻をとらえて難癖をつけるのは間違いない。即座に膳をひっくり返して、喧嘩を仕掛けてやろうと身構えていた。
「悪気はねえってか」
龍吾はぽつりと言った。
「そうかい、お優羽さんを弄ぶのも、悪気じゃねえってのかい。あれだけの女がだぜ、命懸けで惚れてるってのに羨ましい、じゃねえや、くそっ、健気じゃねえか。おれだったらよ、明日にでも祝言だ。それが」
悔しげに酒をあおり、滲んだ涙を何度も袖で拭った。ふだんは黙って酒を飲ませる親父が、小さく首を振っている。もしかすると、先刻から浴びるほど飲んでいるのかもしれなかった。

「泣き上戸か」
弥十郎の要らぬひと言に、也寿と龍吾が同時に反応する。
「旦那」
「なんだと？」
腰を浮かせかけた龍吾を、まあまあと宥めて、座らせた。送って行くしかないだろうが、さて、おとなしくお帰りいただくにはどうすればいいだろう。忙しく考えているうちに、公儀大棟梁の大工、御三家へも出入り、などという事柄が浮かんだ。
「ひとつ訊きてえんだがな」
「ああ？」
とろんと濁った目を返した。喧嘩腰だった様子が少しおさまり、也寿はほっとしたような顔をしている。それでも「厭味や皮肉はなしですぜ」とでも言うように、しきりに目で合図を送ってきていた。頷き返して、続ける。
「後藤家ってのは、水戸家にも出入りしているのかい」
「まあな」
「ほう。これはまたちょうどいいときに来てくれたもんだぜ。水戸家には、大工が入っていると聞いたんだがよ。建て替えでもしているのかね」

「なに？」

とたんに、龍吾の目つきが変わった。辰吉に振られて、めそめそ、ぐずぐずしていた腑抜けが、しゃんと背筋を伸ばして、弥十郎を見る。職人の顔になっていた。

「今の話は本当ですかい」

「いや、それが訊きてえのは、おれの方さ。藩邸に大工が入っていると聞いたもんでな。大棟梁は十一家あるようだが、もしかすると、おまえさんのところかと、おい、待てよ」

止める暇もない。龍吾は風のように飛び出して行った。也寿が慌て気味に立ちあがり、戸口で闇の彼方を見やっている。

七

「大丈夫ですかね」

不安げに膳へ戻って来た。

「さあてな」

答えて弥十郎は、酒を注文する。

「親父、新しいのを頼む。うーんと熱くしてな」

これで水戸家に出入りしているのは、公儀大棟梁の大工ではないことだけはわかった。三左衛門が言っていたように、まだ届け出さえしていないに違いない。

「そうなると、だ。ますます水戸家は怪しくなる。名馬を求め、密かに屋敷の手入れをしているのはなぜなのか。『天の香具山』は、案外、近いのかもしれないぜ」

「は？」

鋭い也寿も、流石にきょとんとしていた。

「こっちのことだ。さいぜんの話の続きだがよ。隠し金だ。もしかすると、佐兵衛はかなり貯めこんでいたかもしれねえ。それを吹聴すれば、欲の皮の突っ張った連中が、ごそごそと動き出すかもしれないぜ。おまえも広めろ、佐兵衛のお宝の話を」

「やれと言われりゃやりますが、それをやると、いったい、なにがわかるんですかね。死んだ男がどこかに金を隠しているかも、なんて話が広まれば、みんな目の色を変えますぜ。仮に右衛門作が、向島の隠居所に来たからといって、騒ぎに関わりがあるかどうかまではわかりませんや」

「なるほど。おまえが言うことにも一理あるな」

逸りすぎたか。突いたつもりが、警戒させただけだったか。

「佐兵衛がなにをやっていたかを知っていればだ、隠し金があるのももっともだと思うじゃ

ねえか。話に飛びつくかと思ったんだが」
「『長谷川平蔵』ですか」
うーんと、也寿も腕を組む。
「ご隠居はなにをしていたんですかねえ」
「右衛門作のやつは、隠し金のことを話したとき、ぴくりと眉を動かしたのさ。あれがどうもな、引っかかって」
ぴくり、と、動いたのは、右衛門作の眉だけではない、おこまも握りしめていた手をぴくりとさせた。掘り返されたような裏庭の一角、気になって手を伸ばしたとき、おこまが戻って来て……。
「まさか」
自分の考えに、自分自身で驚いた。
「いや、そんなことが」
一度、頭に浮かんだ推測は、みるまに大きくふくれあがる。戻って来たのは、掘り返されたくなかったからではないか。弥十郎を裏庭から遠ざけるべく、おこまは手を引いたのではないのか。
隠し金の話をしたとき、ぴくりと反応した二人。

弥十郎から見れば、右衛門作は邪悪、おこまは純真という感じがする。異なる二人が奇しくも同じような反応をしたのはなぜなのか。

「どうしたんですか」

「也寿よ。おめえにも訊きたい。おれはまず、おこまにこう告げた」

〝どこかに隠し財宝でもあればな〟

「そのとき、握りしめていたおこまの手が、ぴくりと動いたのさ。おれは金さえあれば、迷惑をかけなくて済むのに、なんてことを思ったんじゃねえかと考えたんだが」

そして、もうひとりは右衛門作。

「やつも似たような反応を見せた。ぴくり、と、わずかに眉を動かしたんだよ。まあ、欲の塊のような男だからよ。右衛門作の動きは、当然と言やぁ当然だ」

「問題は、おこまですね」

「うむ」

「あれじゃねえんですかい。瓢箪から駒、あ、ちょっと違うか。そうそう、嘘から出たまことってやつじゃ、えっ、えええっ、えええぇ〜〜〜っ」

也寿も弥十郎同様、自分で言った言葉に驚いている。そうだ、与太話のつもりのあれが、もしも真実だったとしたら？

おこまは良心が疼き、右衛門作は邪心が疼いたがゆえに、似たような動きをしたのではないのか。

見世の中が静まり返った。

ごくり、と、也寿が唾を飲む。

「……本当なんですかい、旦那」

「わからねえ」

だが、おこまのどこか不自然な言動も、妙に辻褄が合うように思えた。知られたくない『なにか』が、隠居所の裏庭に埋められている……。

「もしや、千春がうろつき始めたのも」

次に浮かんだのは、肌を合わせた女のこと。初世を置いていったものの、心配で様子を見に来るうち、千春は金の臭いをとらえたのではあるまいか。裕福そうな隠居の佐兵衛、用心棒に雇われた弥十郎。周囲を嗅ぎまわるうちに、あるいは右衛門作のことを知ったのかもしれない。

「旦那はおいでですか」

戸が開いて、宗順が入って来た。

「どうしたんですか、やけに暗いですねえ。お通夜みたいですよ」

浮きうきした様子に、上首尾ということが表れている。隣に来ようとしたが、弥十郎は向かいの席に追いやった。

「鬱陶しいから来るんじゃねえ」

「おや、いいんですか、そんなことを言って」

口調はやんわりだったが、動きは素早かった。弥十郎の隣に座って、にんまりと笑いかける。自信たっぷりという感じだった。

「わかったか」

仕方なく酒を注いでやる。訊きたくてうずうずしていたが、平静を装っていた。宗順は嬉しそうに杯で受ける。

「はい。ですが、苦労いたしましたよ。御城の御右筆に袖の下を摑ませて、ようやく調べることができたんです。残っている文書も少なくて大変でした。なにしろ古い話ですからねえ」

「ああ、焦れってぇなあ、もう」

也寿がこらえきれない様子で、宗順の隣に張りついた。事情を知らない親父までもが、耳を近づけている。佐兵衛が遺した『長谷川平蔵』という『死の呟き』の意味が、あきらかになるのか。

「宗順よ」

弥十郎は訊いた。

「おめえの話を聞く前に、ひとつ確かめたい。『三笠付』も関わりがあるのか。長谷川殿はそれをやって、金を集めたのか。その金で人足寄場を設けたのか」

「いい勘してますね、流石は旦那」

「では」

さらに続けようとした弥十郎の口を手で遮る。

「ですが、あっているのは最後のひとつだけ。お上が吝ん坊なのは、今に始まったことじゃないようでしてね。長谷川様は人足寄場の建議をしたものの、寄場を造るだけの金は出せないとなったらしいんですよ」

「そこで一計を案じたってことですかい」

也寿が口を挟む。

「そういうことです。用意できる金は三千両まで、しかも一時、貸してもらえるだけで返さなければならない金です。『あとは自分でなんとかせよ』とまあ、そんなところだったんじゃないでしょうか。そこで長谷川様は」

小声で告げられた策に、弥十郎たちは「なるほど」と得心する。

「そうか。〈桔梗屋〉で花代が足りなくなった理由も、これで合点がいくぜ。今月に入って

急に物が高直になったってあれも」
「関わりがあるんですよ。芝居の中でもあったじゃありませんか、『物が高直になった』というくだりが。佐兵衛さんはなんとかして知らせようとしたんですよ」
「行くぜ」
弥十郎は刀を握りしめて、立ちあがる。
「どちらへ？」
訊き返した也寿に告げた。
「墓掘りだ」
「え、そ、そんな……待ってくださいよ、旦那。死人を掘り返すのなんざ、あっしはご免ですよ。待ってくださいったら」
夜更けの町に、悲痛な声が響いている。弥十郎の足は、躊躇うことなく、向島の隠居所に向かっていた。

第七章　罠

一

月は隠れて、闇夜だった。

いや、たとえ月が出ていたとしても新月に向かっている時期、あえかなその光では、歩くことさえままなるまい。弥十郎は掘り返した裏庭の一角に、提灯（ちょうちん）を掲げた。

「旦那、これは」

也寿が掠れた声をあげる。

「ふん」

と、弥十郎は鼻を鳴らした。

「佐兵衛はどうやらもう一本、本を書いていたようだな。題名をつけるとしたら、そう、『大切なもの』とでもするか」

「おや、おまえさんにしては悪くないじゃありませんか。ぐっときますよ」
「うるせえ」
「それで……どうしますか？」
也寿は泣きそうな顔で見あげる。
「埋め戻しておけ」
「ですが、旦那」
「そう長い間じゃねえさ、じきに片がつく。おれがいいと言うまでは、兄上には黙っていろ」
「……わかりました」
命じられたとおり、也寿は掘り返した場所に土を盛り始めた。ほのかな提灯の明かりが、やけに明るく感じられる。油断なく気配を探りながら、弥十郎は言った。
「千春は初世に、お宝の在処を訊いたかもしれねえな」
道すがら、今までの経緯を宗順にも話している。〈むらたや〉から出て来た千春、どこでどう繋がっているのか、今ひとつはっきりしない。だが、小判の臭いを感じたからこその動きだろうと、我が身を顧みて思っていた。
「『藤壺の宮』ですか」

宗順の声には、あきらかな侮蔑がこめられている。

「だから言ったんですよ。風雅な異名は似合わない、とね。女の武器を使って、〈むらたや〉の主を陥としたんでしょう。だれかさんを見れば、その魅力はあきらか。本当に騒ぎを引き寄せる名人ですね、おまえさんは。騒動屋とでも名乗ってはいかがですか」

「そう名乗ることによって、小判が集まるならな」

「おや、開き直りましたね。ま、これぐらいにしておきましょう。話を戻しますよ。初世さんは泣いていたとか」

「ああ。おこまが言っていた」

「幼いながらも、どこか大人びたお子。悪事の気配を感じているのかもしれませんねえ。はたして、千春さんはその気持ちに気づいているのかどうか」

「おもん騒動と佐兵衛殺し、おれに放たれた刺客。三つの騒ぎの間に関わりがあるのか否か。なにか動きが出てくれれば、はっきりするんだが……もうひとつ、おれは気になっていることがあるのさ」

弥十郎は彼方を見やる。周囲に広がるのは、この世の果てを思わせる闇の世界。遠いとは言えない距離にある大名家の下屋敷も深い闇に沈んでいた。

「水戸家ですか」

宗順も隣に立ち、闇の彼方を見つめている。佐兵衛を襲った刺客は、亡骸を引きずりながら、畦道をどこに戻って行ったのか。はじめにそのことを告げたのは、他ならぬ宗順である。

「三左殿によると、水戸家では去年あたりから名馬を探し求めているそうだ。屋敷にも手を入れているとか。ついでに言うと、近々、高田馬場において、流鏑馬もどきが開かれる由。厩方が稽古を兼ねて、執り行うことにしたらしいが」

「へえぇ、流鏑馬もどきですか」

意味ありげに呟き、ちらりと流し目をくれた。

「で、それもあたしに調べろと？」

正確に弥十郎の考えを読み取っている。稽古と称している流鏑馬もどきの裏には、もしかしたら、危険な企みが隠れているのではないか。派手な催しが好きな将軍を誘き出すための謀が進んでいるのではないか。

「うむ。三左殿はあのとおり、女房と七人の子供を養うのに手一杯。頭にあるのは、迫る流鏑馬もどきを、どうやってやり過ごそうかということだけよ。頼りにならねえ」

「頼りになるのは、そう、このあたしですよ」

世辞を真に受けて、宗順は軽く自分の胸を叩いた。

「わかりました。早急に調べます。旦那の考えすぎであれば、それはそれでよし。万が一、

読みがあたったとしたら……」
「しっ、静かに」
弥十郎は言い、提灯の火を消した。
「あ、だ、旦那、勘弁してくださいよ。あっしは旦那たちほど夜目が利かないんでさ。それに」
無言で、也寿の口を押さえつける。
「足音だ。七、八人はいる」
「え」
也寿は怖ろしげに、腰を屈めながら首をめぐらせたが、提灯などはどこにも見えない。一群は提灯を持っていない、つまり、人に見られたくない連中ということになる。弥十郎は一群が来る方角とは逆の方へ也寿を押した。
「おまえはそっちから行け。兄上に知らせろ。田圃に落ちるなよ」
「へい」
とはいえ、なにしろ暗い。也寿はおぼつかない足取りで、どうにかこうにか畦道に出た。弥十郎と宗順は、二手に分かれて、闇に融ける。一群はもうすぐそばまで迫っていた。黒いひとつの塊のようなそれは、悪意を形にしたかのような邪悪さをまとっている。

「見て来い」
聞き覚えのある声が響いた。
――やはり、右衛門作。
弥十郎は不敵な笑みを滲ませる。初世になにかを聞いた千春が、〈むらたや〉に知らせに行ったため、右衛門作はここに来たのではないか。弥十郎が隠し金のことを匂わせたのも後押ししたかもしれない。偵察役が柴折り戸から入って来るのを、二人は黙って見つめていた。こういうとき、宗順とはまさに以心伝心、言葉にする必要はない。
「大丈夫でさ。だれもいませんや」
偵察役の言葉で、一群が柴折り戸から入って来た。手分けして家捜しするつもりなのだろう。近づいて来たひとりに、弥十郎は一撃を叩きつけた。
「ぐあっ」
胴斬りを食らった男が、仰向けに倒れる。ほとんど同時に宗順が、するりと別のひとりの首を絞めた。動きは少ないが一瞬のうちに息の根を止めている。悲鳴をあげる暇もない。
「だ、だれだっ」
右衛門作が狼狽えて叫ぶ。が、答えてやるほど親切ではない。逃げようとした右衛門作の前に立ち塞がり、両足に向かって刃を一閃させる。逃げられないようにしておいてから、斬

りこんで来たひとりの匕首を巻き落とした。とっさに拾おうとしたようだが、鼻をつままれてもわからないほどの暗闇。屈みこんだところに、弥十郎は鋭い斬撃をお見舞いする。

目の端に柴折り戸へ走ろうとする影がよぎった。

「宗順」

ひと言、呼び掛ければそれで用は足りる。宗順は逃げようとした男の襟首を後ろから摑み、羽交い締めにする。なにをどうやったのかはわからない。ぐきっと鈍い音がして、男は地面に投げ出された。

「ち、ちくしょう」

ひとりが匕首を双手に突き出して来る。弥十郎はそれを軽くかわして、下から斜めに斬りあげた。のけぞった男の腹から胸にかけて、鮮血が迸る。帯がほどけて着物の前が開き、男は地面に沈みこんだ。

——残るは二人。

弥十郎が動こうとした刹那、ひとりが斬りこんで来た。振り降ろした刃の下をかいくぐるようにして飛びこんで来る。が、弥十郎はいち早く後ろにさがって距離を取りながら、真っ向斬りを叩きつけた。

「ぐ……」

呻き声が途中で途絶える。男が倒れるまでの間に、宗順がもうひとりの鳩尾を拳で突いていた。ひいひいと、声にならない声をあげて、右衛門作が柴折り戸に近づこうとしている。だらりと伸びた両足を引きずりながら、両手で必死に前に進もうとしていた。

「隠し金か、〈むらたや〉よ」

弥十郎が刃を突きつけると、ぎょっとしたように右衛門作は動きを止める。見開かれた目に、いつもの冷酷さは感じられない。

「い、命ばかりは、お、お助けを」

二人を交互に見あげて嘆願した。

「お願いいたします、命ばかりは、見のがしていただけるのであれば、五十両、いえ、百両、差し上げます。ですから、てまえを家に運んで医者を……」

「じきに役人が来る。お願いしてみるんだな。もっとも、その傷じゃ、医者が来るまで保つかどうかわからねえがよ」

たっぷり脅しをこめて告げる。右衛門作も使い走りのひとりだったに違いない。佐兵衛が遺した『死の呟き』の裏には、もっと巨（おお）きな存在が見え隠れしている。

――天下取りか。

弥十郎は心の中で呟いていた。

「そうです。旦那の言うとおり、〈むらたや〉の主から『三笠付』の話を持ちかけられたんですよ」

二

おもんは重い口をようやく開いた。弥十郎と宗順は、役人たちに右衛門作たちを引き渡した後、一度、屋敷に帰ってから、深川の岡場所〈桔梗屋〉に足を向けたのである。俄雨(にわかあめ)をやり過ごしたり、着替えをしていたため、時刻はすでに七つ（午後四時）を過ぎていた。右衛門作が捕まったと聞き、おもんにはどこか安堵した様子が見て取れる。

「客をひとり紹介すれば、一分、くれるって約束だったんだ。喜伝次さんは元々借金があったらしくてさ。間違いなく稼げると思って、あらたに借金をして金を作ったとか。それを賭けたのに」

悔しげに唇を噛みしめる。蓮の花の香は、右衛門作から受け取った礼金のひとつだったのだろう。あの薫りが、おもんと右衛門作の結びつきを疑わせることになったのは間違いない。薫りが運んだ真実、だが、騒ぎを未然に防ぐことはできなかった。

「あたしは……本当に儲かるんだと思っていたんだよ。騙し取るためだなんて思わなかった。

だから申し訳ないと……刺されても仕方ないのさ」

　続けて発せられた言葉にも、深い悔恨がこめられていた。たとえ遊女に身を落とそうとも悪事に手を貸すような真似だけはすまい。そんなふうに思っていたのかもしれない。おもんは、おもんらしからぬ行動を取ったのではないか。

「おまえがくれた『文』のお陰だ、おもん」

　弥十郎は言った。

「おれは右衛門作が、裏で糸を引いているんじゃねえかという確かな手応えを摑めた。もっとも、右衛門作自身も、だれかに操られていたようだがな。おまえ、右衛門作に言ったのか、役人に訴えると」

　話を向けると、即座に頷き返した。

「うん」

　童女のような眸をしている。喜伝次が見世の身代もなにもかも失ったと聞き、己が犯した過ちの大きさに気づいたのだろう。馴染み客だった喜伝次に対して、好いた惚れたのという気持ちはなくても、なにかしら通い合うものがあったのかもしれない。

「許せなかったのさ」

　ぽつりと呟いた。

「あたしの親も人に騙されて田畑を売るはめになっちまったから、ううん、わかっているんだよ、騙される方が悪いってさ。でも」

そこでまた唇を噛みしめる。喜伝次にかつての両親の姿が重なってしまい、言わずにいられなかったのだ。

「柄にもないことをやるとこれだよ」

今度は自嘲するように笑った。正義感などクソ食らえ、大嫌いな役人にだれが本当のことなど言うものか。ふだんであれば関わりないことと、素知らぬ顔ができたのに、喜伝次の件だけはそれができなかった。

「喜伝次も悪い」

弥十郎は苦笑いして慰める。

「真面目に働けば、借金は返せただろうぜ。焦って一度にと思ったところに、魔物が食らいついた。魔が差したってことさ。ま、喜伝次も、おれにだけは言われたくねえ台詞だろうがな」

「はは、笑わせないでよ、傷が痛いよ、旦那。確かに真面目なんて言葉を旦那の口から聞くと、お天道様も吃驚して西から出ちまうかもしれないね」

「おまえも言うじゃねえか、ええ、おもんよ」

軽く受けて、肩越しに振り返る。
「右衛門作は他の見世の女たちにも、声を掛けていたんじゃねえのか、主。かなり自由に出入りしていたように見えるがな」
「……はい」
主の幸蔵はやけに畏まっていた。ばつが悪そうに目を逸らしているその姿に、答えが表れている。右衛門作から銭をもらっていたのは、おもんだけではない。遊女屋の主たちも、幾ばくかの銭を受け取っていたに違いなかった。
「緒方様。このことは、どうぞご内密に」
そっと袖の下を渡そうとしたが、
「さあて、どうしたものか」
弥十郎は受け取るふりをして手を出したが、あくまでもふりをしただけのこと。直前で自分の顎に手を持って行き、わざとらしく顎を撫でた。おもんには証言してもらわなければならないが、遊女屋の主たちはどうするべきか。いささか悩んでもいる。
「主たちまでもが『三笠付』に関わっていたとなると、お上は厳しい処置をするだろうな。ここぞとばかりに深川の岡場所を一掃せねばとなるやもしれぬ。そうなると、おれも困るのさ。稼ぐ場所が減るのは」

他の岡場所にも声を掛け、口止め料をはずめと態度で示した。主は困ったような顔をしたが、ここで逆らうのは得策ではないとわかっている。

「承知いたしました。てまえにおまかせください。他の見世とも相談したうえ、一両日中にお屋敷の方へ、お届けいたします」

「よけいなことはするな。屋敷なんぞに持って行かれた日には、おれのもとに残りゃしねえや。おれはしばらくここに流連(いつづけ)るからよ。話が纏まり次第、ここに持って来てくれりゃいいさ」

「あ、さようでございますか」

花代も礼金のひとつにしろということか、と、主は半分、諦め顔だった。仕方なさそうに出て行くのを、おもんは面白そうに見送っている。

「旦那には、かなわないよね」

「褒め言葉と受け取っておくぜ。おまえのこともなんとかしてやりてえがな。証をたててもらわねえことには、右衛門作のやろうを牢屋敷に送りこめねえ。下手をすると、あいつの後ろにいるやつが手をまわしかねないのさ。兄上に頼んで、できるだけ刑を軽くしてもらうからよ。我慢してくれ」

「後ろにいるやつって」

晴れやかだったおもんの顔に、昏い翳がさした。
「だれなのさ。さいぜんも言ったよね、右衛門作自身もだれかに操られていたんじゃないかって。旦那がそんなことを言うのは、相当、厄介な相手ってことだよね」
「そう、厄介かもしれねえ。おれでもちょいとてこずるほどの相手かもしれねえが、おまえはなにも心配しなくてもいい。傷を治すことだけ考えていればいいのさ。そうそう、おれのお袋がこんなことを言っていたぜ」

天に不測の風雲有り
人に旦夕の禍福有り

「天候には予測しがたい変化があり、人の運命もまたたく間に禍が起こったり、福が訪れたりする、という意味だ。禍転じて福となす。おまえにも必ずいいことが……」
「旦那」
階下から宗順が呼んだ。
「喧嘩ですよ」
「おっと、おれの出番か。さっそく風雲有りってことらしいな。そういうわけだからよ、お

もん。じきに役人が来る。いやだろうが、右衛門作がやっていたことを話せ。『三笠付』のことがあかるみに出りゃ、どんなに軽くても島送り、悪くすりゃ獄門だ。特に今回は見せしめのために極刑ってこともありうる。おまえの証言にかかっているんだぜ、いいな」

「わかったよ」

返事を聞く前に、座敷を飛び出していた。喧嘩と聞けば血が騒ぎ、風来屋の出番があろうがなかろうが、駆けつけずにいられない。また刺客が来たときのことを考えて、見張り役をさせていた宗順に、意気込んで訊いた。

「どこだ」

「すぐそこですよ」

指し示した先には、早くも人だかりができている。〈梅若座〉の芝居がまだ続いているとあって、ふだんよりも人出が多い。富岡八幡宮の帰り客だろうか。狭い道は人波でごった返していた。

「どけ、風来屋だ、通してくれ」

大声と背丈で圧倒し、なかば強引に進み出る。遊女屋の前に、十四、五人の若い男たちが集まっていた。まくりあげた着物の袖からは、色鮮やかな刺青（いれずみ）が現れている。それぞれ手に鳶口（とびぐち）や匕首を握りしめ、殺気立っていた。

――なんだ、後藤家の若頭じゃねえか。

弥十郎は睨み合う男たちの中に、後藤龍吾を見つけた。ははーん、と、懐手になって、しばし傍観者となる。片方の一群は水戸家出入りの大工、対する一群は後藤家の鳶職人であろう。騒ぎの理由はおおよそ見当がついていた。

「なんだっていうんだ、いったいよ」

ひとりの言葉に、龍吾が答える。

「とぼけるんじゃねえ。てめえたちが無断で水戸様のお屋敷に出入りしているのはわかっているんだぜ。いい根性してるじゃねえか、ええ、この後藤家を差し置いて、しゃしゃり出て来るとはよ。いいか、耳の穴かっぽじってよく聞きやがれ」

諸肌脱ぎ、背中の不動明王をあらわにして、続けた。

「公方様はもちろんのこと、御三家、御三卿といった大大名家の御普請は、後藤家を含む十一家の大棟梁が仕切るのが慣わしだ。国元での普請はともかくも、この江戸においては、てめえらみてえな田舎者の鳶職人が出る幕はねえんだよ。とっとと帰りやがれ」

「大棟梁」

一瞬、怯んだように顔を見合わせたが、

「は。おれたちは、水戸家のお殿様から直々にご命令をいただいているんだよ」

頭らしい男は開き直った。
「おおかた江戸の鳶じゃ、頼りにならねえとお考えになられたんだろうぜ。是非にと請われて、お屋敷のお手入れをさせていただいているのさ。出る幕がねえのは、てめえらの方だ。引っ込んでろ」
「聞いたか、おい」
龍吾は嘲るように言い、仲間たちを振り返る。
「引っ込んでろだとよ、田舎弁丸出しじゃねえか。江戸ではな、『すっこんでろ』って言うんだよ。そんな品よくやってたら、なめられちまわあ。ま、江戸に出て来たばかりじゃ仕方ねえけどな」
どっと笑った江戸派につられて、野次馬たちからも笑い声が洩れた。水戸派の目つきに凄みが加わる。
「てめえら」
匕首を握りしめる手に、ぎゅっと力が入った。
「おもしれえ。やるか？」
対する龍吾も懐から匕首を出して、握りしめる。刃傷沙汰になれば、後藤家はよくて謹慎、悪くすればお取り潰しを免れない。ぎりぎりまで得物を出さなかったのは、龍吾なりの考え

があってのことだろうと、弥十郎は読んだ。

――潮時か。

「待てまて、この喧嘩、おれがあずかる」

弥十郎は叫びながら割って入る。大男であることと、侍が出て来たことに驚いたのかもしれない。

「なんだ、てめえは」

水戸派の頭格といった男が、胡散臭げに見やった。

「おれか？」

弥十郎は平然と男たちの冷たい眼差しを受け止める。

三

「風の吹くまま、気の向くままの風来屋よ。喧嘩の仲裁、謝り仲人、御家騒動の肝煎役と、頼まれればなんでもやるがな。今はもちろん仲裁役だ。天下の往来で喧嘩はまずいぜ。なあ、後藤家の若頭」

退けと、目で合図する。後藤家ここにありと知らしめただけで面子は立ったはず。これ以

上の争いは無意味だ。視線でそう告げると、やはり、引き際を見ていたのかもしれない。
「緒方様におあずけいたしやす」
意外にもあっさりと龍吾は引いた。
「若頭」
「いいんですかい。侍なんかにまかせて」
次々にあがった不満を、龍吾はひと言で片づける。
「すっこんでろ」
鳶の衆は不承不承ながらも退いた。が、今度は水戸派の鳶たちから声があがる。
「田舎者呼ばわりしやがって」
「叩きのめしてやる」
袖まくりした男たちの間に、ふたたび弥十郎は割って入った。
「そう尖るんじゃねえよ。考えてもみな、いいか、仮にだ。おまえさんたちのご領地に、江戸の鳶の衆が入りこんだとしよう。なんの断りもなく普請をされたらどうだい。『気に入らねえ、挨拶ぐらいしろってんだ』と、なるんじゃねえのかい」
口八丁手八丁、弁口のたつ風来屋の本領発揮だ。
「う」

「それは」
水戸派の鳶たちも、顔を見合わせるしかない。機を窺っていた宗順が、あたしの出番とばかりに割りこんできた。
「往来での騒ぎは御法度、場所を変えて話をすればいいじゃありませんか」
「右に同じだ。話をすればわかることさ。筋を通せば後藤家の若頭だって、無茶なことは言わねえよ。挨拶なしってのは、まずいからな。ええ、そうだろう、若頭よ」
弥十郎の問いかけに、龍吾は小さく頷き返した。宗順がぱんと両手を打ち、目で少し離れた場所を示した。
「近くの料理屋に席を設けたんですよ。手締めといこうじゃありませんか」
弥十郎がにやにやしながら野次馬のひとりとなっていた間に、素早く料理屋の手筈を調えたらしい。自分が金を出すわけではないので気楽なものだが、おそらく空きっ腹であろう男たちは、互いの頭に問いかけるような眼差しを向けた。
「手締めといこう」
龍吾の言葉で、水戸派の鳶頭も折れる。
「よし」
男たちがぞろぞろと移動し始めれば、野次馬たちも散って行く。仲介役も当然、宴に同席

する権利がある。歩き出した弥十郎と宗順の隣に、さりげなく龍吾が並んだ。
「助かりやした、旦那」
若くても流石は後藤家の跡取り、銭を包んだ小さな包みを、周囲にはわからないように手渡した。思わず頬がゆるみかけたが、意識して引き締める。
「なあに、いいってことよ。これがおれの稼業だからな。それにしても、動きが早えじゃねえか。おれの話を聞いてから、まだ半日ぐらいしか経っていないぜ」
「旦那の真似をするわけじゃありやせんが、これがおれたちの稼業でさ。今日は午頃に雨が降ったもんで、この流れになりやした。鳶は雨が降っちゃ仕事になりやせん。連中は早めに切りあげて岡場所に繰り出したというわけでさ」
その後を尾行けて、見世に入る直前、龍吾は喧嘩を仕掛けた。弥十郎にとっては、それが幸いとなっている。礼金が入ったばかりでなく、水戸家に領地から来た大工が入っていることも確かめられたからだ。
「噂は真実だったってことか」
「え？」
「いや、なんでもない」
見世に入ろうとしたとき、人波を掻き分けて、也寿が走って来るのが見えた。向こうも気

づいて、手を挙げている。
「すまねえが、先に始めていてくれ」
「わかりやした」
龍吾たちと見世の前で別れて、也寿が来るのを待つことにした。宗順も隣に立ち、見るとはなしに行き交う人々を眺めている。
「水戸家が領地から鳶を呼び寄せて、屋敷の手入れをさせていること。旦那は天下取りの準備だと思っているんですね」
「それもあるが」
曖昧な返事になる。公儀大棟梁の大工を使わず、わざわざ国元から呼び寄せた裏には、確かになにかいやな気配を感じていた。が、同時に「なぜ？」という疑問も湧いている。
――なぜ、公儀は放っておくのか。
水戸家の不穏な動きに、幕府が気づかぬわけがない。あるいは、と、ひとつの考えが浮かんだが、それは口にしなかった。
「旦那。なにかあったんですかい。騒ぎが起きたって聞いたもんですから、慌てて来たんですが」
駆けつけた也寿に、答えた。

「もう終わったよ。おれが片づけた」
「と、あたしがです」
すかさず宗順が言い添えたが、いつものように相手にしない。
「それで、〈むらたや〉の右衛門作の調べはどうなった。『三笠付』のことを素直に白状したか」
也寿に問いかける。
「いえ、足が痛い、痛いというばかりで、なにも喋りませんよ。自分で金を出すからと言いましたんで、医者を呼び、手当てをさせました。これじゃ仕方がねえってんで、またまたおもんに話を聞こうということになりまして」
だれかを探すように、也寿が背後を見やる。こちらに近づいて来る田中市之助に、弥十郎も気づいた。家で会うときは、どこか頼りない長男だが、こうやって町中を歩く姿は、威風堂々としている。
「兄上」
弥十郎が呼び掛けると、市之助は、配下の同心を先に〈桔梗屋〉へ行かせた。物言いたげな視線を投げられたため、宗順ともども近くの飯屋に腰を落ち着ける。也寿も市之助の隣に座った。

「おもんの具合はどうじゃ。話はできるか」
「あまり長い時間でなければ」
「実は」
市之助は急に声をひそめる。
「〈むらたや〉の主は、水戸家の御用人の名を出してな。呼んで来てくれと言うているのじゃ。御用人が来れば話をするが、そうでなければ話はせぬと」
「なるほど。とうとう水戸家を口にしましたか」
「気づいていたのか」
驚いたように、市之助は弥十郎を見る。いささか鈍いところがあるため、水戸家と右衛門作の繋がりなど想像できるはずもない。いきなり御三家の用人云々となって、慌てるとともに、当惑しているのが見て取れた。
「まあ、なんとなく」
「なんとなく、ではあるまい。気づいていたのであれば、わしに話さぬか」
「定かではありませぬゆえ、控えた次第。兄上におかれましては、いかがなさるおつもりですか。まさか、言われるまま水戸家に使いをやって、その御用人とやらを呼ぶつもりではありますまいな」

我知らず、きつい口調になっていた。水戸家が出てくれば、騒ぎが揉み消されてしまう懸念もある。そうなれば右衛門作は何事もなかったように、今までの暮らしに戻るだろう。おもんや喜伝次の命は風前の灯火、右衛門作を解き放てば、今度こそ間違いなく始末される。

「う、いや、それはせぬが」

市之助は口ごもり、気弱な一面を曝け出しそうになっていた。水戸家の名を出されて、周章狼狽したのは想像するに難くない。責めるような弥十郎の視線に気づいたのかもしれない。

「ゆえに、おもんに話を聞こうと思うたのじゃ」

早口で言った。

「右衛門作が『三笠付』をやっていたと、おもんが証をたてれば、水戸家だろうとなんだろうと口出しさせぬ」

「それを伺って、安堵いたしました。流石は兄上、弥十郎、頼もしく思う次第でございます。それで右衛門作ですが、なぜ、向島の隠居所に行ったんでしょうな。しかも得物を携えた剣呑な輩を引き連れて。此度の騒ぎについてはなんと言うているのですか」

「金を貸していたと」

「は？」

「佐兵衛に金を貸していたと言うのじゃ。まだ返してもろうておらぬゆえ、家財道具を持ち帰ろうとな、思うたとか」

「ははあ、考えましたな。用心のために若い衆を引き連れて行ったというわけですか。やつの目当てはお宝ですよ。佐兵衛に隠し金があるのではないかと思い、探しに行ったんです。右衛門作の戯言（ざれごと）など、むろん、兄上は信じておられますまいな」

と、またもや語気を強める。気質は良いのだが、決して能吏（のうり）とは言えない。也寿の方がずっとましだと、弥十郎は常日頃から思っている。念を押しておく必要があった。

「む、むろんじゃ。右衛門作の言葉など信じられるわけがない」

たじろぎながらも同意する。

「水戸家についても、今少しお待ちください。右衛門作が捕まったと知れば、たやすく切り捨てましょう。水戸家を呼んでやるゆえ真実を話せと、切り返してやるぐらいのことはしてください。言いなりになってはなりませぬぞ」

「わかった、わかった。では、わしはおもんの話を聞いてくる」

腰を浮かせた市之助に、慌てて訴えた。

「あ、おもんには、水戸家のことは言わないでくださいよ。怖がって、喋らなくなるかもしれませんから」

「む」

少し考えるような素振りを見せた。水戸家は御三家、御三家の力は怖ろしい。怖ろしいゆえ、おもんは口をつぐむことも考えられる。それらの事柄が頭をめぐり、「なるほど」と思ったに違いない。

「わかった」

頷いて、也寿と一緒に出て行った。

「やれやれ、世話がやけるぜ。子供に言い聞かせるように言ってやらないと、わかりゃしねえ」

「あれが市之助様のよいところじゃありませんか。おっとりとしていて、あたしは好きですよ」

「おまえに好かれても、兄上は嬉しくねえだろうな」

「どうなりますかね」

不意に宗順が呟いた。

「なにがだ」

「水戸家ですよ。動くでしょうか」

「動くさ。噂を流してやりゃいい。右衛門作は水戸家に頼まれて、『三笠付』をやったと言

っている。殺められた佐兵衛は『三笠付』で集めた金を使い、さらに『あること』を用いて小判の山を築いた、とな。噂を流してやりゃ、切羽詰まって、動かざるをえなくなるだろうさ」

おもんと喜伝次を守るため、弥十郎は策を講じる。相手が水戸家であろうと将軍であろうと関係ない。

「長谷川様のように、罠を仕掛けるんですね」

「まあ、な。『流鏑馬もどき』が、勝負の場になるかもしれねえ」

腕組みをして、だれかを睨みつけるように、虚空を睨み据えていた。

四

月が変わって、四月十日。

高田馬場では、厩方による馬と弓の稽古が行われている。空はどこまでも青く澄みわたり、初夏らしい爽やかな晴天になっていた。

「あっ、また落馬しやがった」

弥十郎は、馬場の一角で、稽古の様子を眺めている。『流鏑馬もどき』と言ったのは多香

女だが、意外にも華やかな雰囲気になっていた。正装をした厩方の者たちもなかなかだが、それを見物する女房や子供たちも美しく着飾っている。緋毛氈を敷いて野点をする者もおり、馬場のまわりは花が咲いたかのごとき彩りを見せていた。

「馬に乗れねえのは、三左殿ぐらいかと思ったが、なんだ、まともに操れるやつなんざ、いねえじゃねえか」

ともすればその花たちに行きそうになる目を、弥十郎はかなり無理をして、馬場に向けている。弓矢で的を射るどころか、馬に乗ろうとしただけで落ちる者が続出していた。

「あたりまえですよ。馬に乗る機会がないんですから」

宗順が答える。

「御城では、もう珍しくもない話ですよ。逆にちゃんと馬を操れる方が、話題になるんですからね。馬を飼い、養っていくために、どれほどの銭がかかることか。用があるときに借りるだけでは、とても乗りこなせませんよ」

「と言っているうちに、また落馬だ」

呆れ顔の弥十郎は、つい見たくもない一角に目をやっていた。多香女と下働きの徳兵衛夫婦、山田三左衛門の妻――里尾が、緋毛氈の上で重箱を広げている。七人の子は里尾の実家に預けてきたらしく、四人はゆったりと弁当を味わっていた。

「いいねえ、女と年寄りはのんびりできて」
「旦那も御相伴に与ればいいじゃありませんか」
「そうはいかねえや。仕掛けて来なければよし、もし来たときには」
愛刀の柄をきつく握りしめる。あれは、そう、弥生尽、十日前のことだ。人目を避けるようにして、夜更けに訪ねて来た客がいた。目付の配下というその男は、弥十郎にある話を持ちかける。水戸家の不穏な動きに対して、見て見ぬふりをしてきたのは……。
「気に入らねえ」
宗順が口調を真似て、続ける。
「本当はそう言いたいんじゃないんですか」
「わかっているんなら、わざわざ言うんじゃねえ」
持ちかけられた話は、弥十郎も考えていたことなのだが、それを目付に命じられたのが面白くない。とはいえ、おもんと喜伝次のことを思えば、断るわけにはいかなかった。
「噂の広がり方は凄いですよ」
宗順は囁き声になる。
『三笠付』の大元は水戸家だと、町の雀（すずめ）たちは大騒ぎ。右衛門作のような手先が、江戸中にいたらしいですからね。財産を失って一文無しになった者も、ひとりや二人じゃないとか。

そうなると、お上も黙っていられませんよ」
「目付の命令はすなわち民を救うことになる。だから四の五の言わずに、おとなしく従えってか。おめえの話はまわりくどくていけねえな。わかりやすく言えってんだ」
「わかりやすく言っているつもりなんですがね。笊男にはちょいとわかりにくかったでしょうか」
「なんだと？」
「いえ、こちらのことです。どうでもいいですが、こんなに見物人が集まっちまって、大丈夫でしょうかね」
宗順は、女子供が騒ぎに巻きこまれることを懸念していた。弥十郎も同意見だが、緊迫した雰囲気を察して、敵が動かなくなることも考えられる。
「この方が誘き出しやすいと思っているんだろうぜ。『危険だの、見物に来てはならぬだのと言うてはならぬ』というお達しを、手下どもは御目付様から申し渡されたらしくてな。しつこく念を押されちまったよ」
「弥十郎様」
里尾がゆったりとした足取りで、歩いて来た。子供たちがいないせいか、はたまた、なにか目論見があるのか。藤色の小紋姿で銀の簪を挿し、めかしこんでいた。降り注ぐ陽射しを

受けて、簪がきらきらと煌めいている。
「おいでにならないのですか」
誘いかけて、離れた場所にいる多香女たちを目で指した。その仕草がいつも以上に、色っぽく感じられる。年は三十で七人の子持ち、おまけに嫂（あによめ）。弥十郎は言い聞かせるように心の中で呟いていた。
「いや、われらは遠慮しておきます」
「さようでございますか。それはそうと、山田家の当主は、どこにいるのでございましょう。いつ現れるか、いつ現れるかと、義母上（ははうえ）様と楽しみにしておりますものを」
さして興味のなさそうな問いかけを発する。多香女の方も、楽しみにしているというよりは、はらはらしているというのが本音だろう。里尾が知りたい事柄は、他にあるのだとわかっていたが、弥十郎は敢えて自分からは口にしない。
「三左殿は、大事な御役目に就いており申す。ゆえに稽古には現れませぬ。詳しいことは言えませぬが、母上にもそのようにお伝えくだされ」
「大事な御役目」
里尾の眸が、簪のように、きらりと煌めいた。
「それは、もしや、あの、上様に関わる御役目でございますか。噂では、本日、上様がこの

稽古をご上覧なさると伺いました。そのための御役目でございますか」

もっとも知りたかったであろう事柄を口にする。夫のことはどうでもいいが、将軍が上覧となれば、無関心ではいられない。

「さよう」

弥十郎は答え、早口で言い添える。

「されど、詳しい話はできませぬ」

「わかりました。そうですか。本当に上様が」

頬を上気させて、里尾は多香女の方に戻って行った。将軍の上覧云々という噂話が、どれほど広まっているのかを、あらためて実感させる言動といえた。

「お目に留まるとでも思っているのかね」

思わず皮肉が口をついて出る。

「大奥も吉原同様、二十七で御褥辞退だってのによ。三十の大年増に、出番なんかあるわけねえや」

「おや、お忘れですか。『御乳持』という、里尾様ならではの御役目があるじゃないですか」

「あ」

そうか、と、頷きそうになったが、すぐにそれは苦笑いに取って代わる。

「『御乳持』としてのご奉公も、ちょいと無理じゃねえのか。厩方の稽古を見に来ている御新造に、奉公のお声が掛かることはあるまいさ」

「夢ですよ」

宗順は、遠い目をして呟いた。

「里尾様は『もしや』と夢を抱いておられるんですよ。もしかしたら、将軍家にご奉公、あるいは御三家や御三卿の『御乳持』になれるかもしれない。大大名家との繋がりができれば、あるいは、山田家はご加増されて、もっといい御役目に就けるかも、とね。思っていらっしゃるんじゃないでしょうか」

「宗順よ。そりゃ、夢じゃなくて、野心というんじゃねえのか。なまぐさくて、どろどろしたものしか、おれは感じられねえがな」

「旦那にかかると身も蓋もありませんねえ。確かに里尾様の場合は、野心も含まれているかも……」

突然、馬場がざわめいた。居並ぶ見物人たちの目は、現れた馬の素晴らしさに向けられている。見事な毛並みの馬を乗り手が巧みに操っていた。設けられた的めがけて、次々に矢が射かけられる。

「おお！」

弥十郎の声と、見物人たちの声が重なった。的を射たばかりでなく、ほぼど真ん中を射抜いている。続いて現れた二番手も、これまた一番手に勝るとも劣らない馬と腕前の持ち主。落馬するばかりで盛りあがらなかった稽古が、にわかに熱気を帯びた。

「厩方の者か？」

弥十郎の問いかけに、宗順は小さく首を振る。

「さあ、どうでしょうか」

「もう一度、お願いいたします」

と、大声を張りあげたのは多香女だった。それを後押しするように、見物人たちから歓声と拍手が湧き起こる。二人の乗り手は、こたえるように、馬場をぐるりと一周し始めた。もとの位置に戻るのかと思ったが、途中で急に馬を速める。弥十郎の方に近づいて来た瞬間、矢が放たれた。

「旦那っ」

宗順の叫び声が響いたときには、弥十郎は刀で矢を叩き落としていた。近づいて来たときに男の顔が見えたのである。二人の乗り手は、佐兵衛を襲撃した手練れの蟹男たちだった。

「逃げろ」

叫びながら、放たれる矢を叩き落とし、撥ね返した。とそのとき、先触れと思われる者の

大声が響き渡る。
「上様のお成りでござります」

五

二頭の馬に跨った男たちは、そのまま馬場を突っ切り、柵を跳び越えた。弥十郎と宗順は馬を追いかける。馬場を出たとたん、二人が馬を降りたのが見えた。どこかに隠れていたのだろう。仲間と思しき一群が加わり、刺客部隊は十四、五人になっている。
「こちらに来てはならぬ」
弥十郎は轟くような大声で申し渡した。馬場の入り口に近づいていた駕籠が、異変に気づいて止まる。刺客部隊は二手に分かれた。ひとつは弥十郎たちの方へ、そして、もうひとつは駕籠の方へ。
「宗順」
「わかっています」
二人も分かれようとしたが、そう簡単にはいかない。こちらには二人の蟹男が加わっている。弥十郎は突き出される剣を撥ねのけ、深く踏みこみながら突いた。手応えを覚えながら、

次の相手を斬り捨てている。駕籠を守らねばと必死だった。前に出ようとしたが叶わない。

「ちっ」

行く手を阻まれて、後ろに跳びのいた。踏みこんだ男の一撃をかわし、相手の肩口めがけて刀を振りおろした。深く食いこんだ刀を一瞬のうちに引きあげ、横から来た男を打ちつける。目にも留まらぬ早業だった。

「行け」

蟹男たちに目をあてながら、弥十郎は宗順を駕籠の方に追いやる。宗順は襲いかかって来たひとりの刀を避け、横にまわりこみ、手刀で後頭部を打った。それを横目で見ながら、弥十郎は手練れと対峙(たいじ)している。二人の殺気をこめた目は、ただひとりの男、そう、自分に注がれていた。

「罠と罠か」

不敵な笑いを滲ませる。

「貴様たちの狙いは、緒方弥十郎厳包(としかね)。このおれか」

矢を射かけられた瞬間、弥十郎は感じていた。二人がただならぬ殺気を放っていることに、その両眼が炎のような怒りで染めあげられていることに。罠を仕掛けたつもりが、その実、仕掛けられたのは弥十郎の方だったのではないか。

「いかにも」
蟹男のひとりが答えた。
「それがしは、奥田勘助」
「奥田友右衛門」
続けた友右衛門が、じりっと前に出る。どうやら、ひとりずつということらしい。独特の地を這うような極端に低い姿勢で、じりじりと間合いを詰めて来る、弥十郎は静かに後ろへ足を送る。
友右衛門の足が止まった、と思った刹那、蛇のように剣が動いた。眼前に伸びて来た剣先を、弥十郎は素早く受け止める。搦めとろうとしたが、友右衛門はいち早く後ろにさがっていた。
「兄弟か」
囁くような問いかけに、答える声はない。友右衛門は青眼に構え直して、ふたたび間合いを詰めて来る。弥十郎が斬った大男は、この者たちにとっては『大切な存在』だったのだろう。かなり無理をして亡骸を運んだことから、弥十郎はそう考えていた。罠かもしれないと思いつつ、襲撃を決行したのは、仇を討ちたかったからに違いない。
――来い。

心の中の呼び掛けが聞こえたのか、すっと友右衛門の剣先があがる。上段の剣に呼応するように、なめらかに身体が動いた。足使いに油断のならない速さが隠されている。弥十郎も足を送り、間合いを取ろうとしたが、

「友右衛門」

勘助が放ったひと声に、気を取られてしまい、隙を衝かれた。またしても眼前に剣先が迫っていた。かわす余裕はない。弥十郎はその剣を撥ねあげたが、切っ先に小指を掠られた。友右衛門は続けざまに斬りこんで来る。弥十郎は踏みこんで、相手の胴を打とうとしたが、撥ね返された。

二人は弾かれたように離れる。

ふたたび互いに足を送りながらの対峙となった。友右衛門は蟹のように深く腰を落として、少しずつ間合いを詰めて来る。体軀こそ小柄だが、気迫は並みではない。凄い圧迫感を持っていた。弥十郎の額には、冷たい汗が滲んでいる。

地面が動くように、友右衛門の身体が地を滑って来た。摺りあげるようにして剣先が伸びて来る。寸前で右にかわした弥十郎の動きを、友右衛門は読みきれなかった。身体を丸めて弥十郎は相手の間合いに飛びこむ。そのまま腕を薙ぎあげながら、一髪の差で友右衛門の横を滑り抜けた。

存分に斬った手応えがあった。

「友右衛門っ」

勘助の絶叫が、知りたい答えを教えている。弥十郎が振り向くと、刀をさげて友右衛門が立っていた……が、次の瞬間、音をたてて横転する。勘助は駆けつけるような真似はしない。音もなく走って来て脇をすり抜けた。鋭く脇腹を薙いで行ったが、弥十郎は無言でかわした。

「緒方弥十郎」

勘助は振り向くとすぐに双手突きに襲いかかって来た。弥十郎は足を送っただけで難なくかわした。やはり、気持ちが相当、乱れていたのかもしれない。動きにも乱れが出ている。今度は躍りあがるようにして斬りつけて来た。弥十郎はこれも軽く払いのけ、間合いを取るように見せかけて、踏みこんだ。

紙一重で勘助は後ろにさがる。ひやりとさせられて、逆に心が落ち着いたのかもしれない。例の蟹のような構えに戻した。勘助の眼は、またたきもせず、弥十郎に注がれている。感情の動きの見えない乾いた眼だった。

――宗順。

視野の端に少し離れた場所の光景が映る。駕籠のまわりには、宗順や護衛に倒された刺客たちが倒れていた。護衛役として配された男たちも目付配下の手練れ揃い。残るは勘助ひと

りとなっている。地を踏みしめながら、弥十郎は右にまわった。勘助も身体をまわしたが、その足運びがわずかに乱れる。

弥十郎は猛然と斬りこんで行った。勘助の剣先があがる。が、それより早く弥十郎は思いきり打ちこんだ。勘助はその剣を払いのける。そして、身体をまわしながら矢のような剣突を仕掛けて来た。

弥十郎はそれをかわしながら、踏みこんだ足を軸にして、目にも留まらぬ一撃を勘助の籠手に叩きつける。と同時に次の足を存分に踏みこんでいた。面から籠手へ、肩打ちからふたたび籠手へ、息をつかせぬ連続技。すべてをかわすことができず勘助は、顔や肩を斬られている。

が、血まみれになりながらもまだ立っていた。

「はあっ」

と短い気合いを吐き、地を滑るように斬りつけて来る。間合いは充分に取っているのだが、あっという間に喉もとへ刃が伸びていた。弥十郎はいち早く後ろに跳び、刀を振り降ろした。重い手応えとともに、勘助の右手が落ちる。しかし、呻き声すらあげず左手で小刀を抜き放った。背を丸めて弥十郎の胸もとに飛びこんで来ようとする。

「ご免」

ひと声、発して、弥十郎は刀を一閃させた。喉を斬られた勘助は、背中を丸めたまま、地面に顔から倒れこむ。少しの間、激しい息づかいが聞こえていたが、やがて、なにも聞こえなくなった。

「旦那」

宗順が駆け寄って来る。

「大丈夫ですか」

「ああ、なんとかな」

そう答えたものの、全身、冷たい汗で濡れていた。罠に掛かったふりをしながら、罠に陥ちた弥十郎を仕留めんと、刺客部隊を引き連れて来た奥田兄弟。あわよくば将軍をこの手でと考えていたかもしれないが、駕籠の中の男が贋者であることは、おそらく、わかっていただろう。

「『上様』は？」

弥十郎の問いかけに、宗順は駕籠を振り返る。

「あ、忘れていました」

駕籠に歩み寄った二人は、中で気絶している三左衛門を見た。本人はいやだと最後までごねたのだが、弥十郎に言い含められて、渋々、替え玉役を引き受けたのである。大役を無事、

はたしたことも知らず、ぽかんと大きな口を開けて失神していた。
「やれやれ。この様子じゃ駕籠に乗ったとたん、気を失っていたかもしれねえな」
「一生に一度しかできない将軍様の役でしょうに。乗り心地を味わうどころじゃなかったかもしれませんね」
「なにはともあれ、一件落着。風来屋の役目もおしめえだ」
と、弥十郎は刀を鞘に収める。血腥さを吹き飛ばすように、初夏の爽やかな風が頬を撫でて行った。

六

長谷川平蔵が用いた策とは――。
銭相場を動かすことだった。
幕府から三千両の金を借り受け、それで安い銭を買い、江戸の銭相場を動かしたのである。儲けがどれほど出たのか、そこまではわからない。だが、長谷川平蔵はその儲けを人足寄場のためにすべて使ったとされている。
隠居の佐兵衛は相場師だったのだ。

各地を転々としながら、諸藩の勘定方や代官たちと組み、銭相場を動かしては利益を得ていたのだろう。その噂を聞きつけたのか、あるいは佐兵衛の方から持ちかけたのか。経緯はわからないが、とにかく江戸においても、佐兵衛は同じことをやってのけた。

まずは『三笠付』で金を集め、集めた金で銭を買い、相場を動かして、利益を得る。味をしめた水戸家は、来年もやってほしいと頼んだが、佐兵衛はこれを拒否。

〝来年も頼む、今年もすでに始めているのだ〟

『運座のようなもの』が開かれたとき、おこまは、佐兵衛が侍にこう頼まれていたのを聞いている。前者は銭相場を動かすこと、後者はその金を作るために『三笠付』を行っているという意味だったに違いない。

断った佐兵衛は、命を失うに至った。

「花代が足りなかったのも、物が高直になったのも、みんな水戸家が悪いのよってか」

数日後、弥十郎は、多香女を料理屋に送って、宗順とともに竪川の河岸をそぞろ歩いている。すでに散り始めている藤の花が、かすかに残り香を運んできた。辰吉と眺めた藤の木ほどではないものの、なかなかいい風情を醸し出している。

「とんでもない。水戸家は『此度の騒ぎについては、当家はいっさい関わりなきこと』と公言していますよ。奥田兄弟を含めた十五人の藩士は、あの騒ぎを起こす前に脱藩しているん

です。彼の者たちが勝手に企てたことゆえ、というわけですよ。火消しに躍起になっているのは確かですけどね」

「屋敷の普請についてはどうなんだ。届け出をしていなかったんだろうが」

「遅ればせながら、届けを出したようです。名馬を集めていたことについては、公方様に献上するつもりだったと仰せになっておられる由。本当は流鏑馬を行って、それをご上覧する公方様を暗殺する謀だったんじゃないかと思いますが」

「名馬と聞けば、つい『見てみたい』となるからな。暇を持て余している公方様のことだ。『流鏑馬もどき』であろうとも、お忍びで、なんてことも言い出しかねない。水戸家の思う壺だったろうぜ」

「そのとおりです」

宗順は頷き、続けた。

「実は高田馬場へも行きたいと仰せになられたとか。家臣たちに止められて、仕方なく諦めたそうですよ」

「なんだ。それじゃ、三左殿に替え玉をやらせなくてもよかったんじゃねえか」

「そうかもしれませんが、あれのお陰で、山田様はご褒美を賜ったわけですからね。里尾様の『御乳持』のご奉公は、これで露と消えました。借金も返せて、万々歳じゃないんです

か」

「万々歳は、御目付もそうだろうぜ。水戸家の企みを事前に防げて、面目躍如だ。風来屋も礼金をたんまり頂戴して万々歳といきてえがよ。右から左、山姥に奪い取られちまった。とたんに、料理屋三昧とくる。まったく金のかかる山姥だぜ」

「多香女様のことはともかくも、〈むらたや〉はお取り潰し、主の右衛門作は島送りになると決まったようですからね。これで〈桔梗屋〉のおもんさんも、枕を高くして眠れるでしょう。それに」

と、宗順は声をひそめた。

「思いもかけず、おこまさんからも礼金を戴けたじゃありませんか。山田家からの礼金は、露と消えたかもしれませんが、おこまさんからの……」

「声がでけえんだよ、おまえは。何度も繰り返すんじゃねえ」

我知らず周囲に目を走らせている。地獄耳の多香女が、路地からぬっと現れそうで油断できない。

「すみません。あたしも嬉しかったものですから」

「ま、おれもだけどよ」

苦笑いして、歩き続ける。佐兵衛は長谷川平蔵の芝居だけでなく、もうひとつ、筋書きを

残していたのだ。

〝自分が死んだときには、亡骸を庭に埋め、おこまに残した金を墓に埋めろ〟

そう、也寿が隠居所の庭を掘り返したとき、そこに埋められていたのは、墓に葬られたはずの佐兵衛だったのである。それを確かめた弥十郎は、隠し金が本当に存在し、それが墓に隠されたのではないかと思ったわけだ。

「いいか、宗順。お袋には、佐兵衛の隠し金のことは絶対に言うんじゃねえぞ」

弥十郎は話しながら、角を曲がって、家の方に向かった。ひと眠りした後、おもんの見舞いと称して、岡場所に繰り出す腹である。

「わかっていますよ。でも、本当にあるんですかね、隠し金とやらは。あったとしても、〈梅若座〉のだれかが、とうに掘り起こしちまったかもしれませんよ」

佐兵衛の亡骸は、今もまだ隠居所の庭に埋められたままだ。おこまによれば、一周忌までは亡骸を墓に納めぬようにと、佐兵衛は遺言書にしたためておいたらしい。確かに亡骸と隠し金のすり替えを手伝った男衆であれば、盗み出すことができる。墓に運ばれた棺の中には、大瓶が納められていたらしいが、はたして、ぎっしり小判が詰まっていたのかどうか。

「案外、三つ目の筋書きがあったりしてな」

苦笑いした弥十郎の考えを、悪友は正確に読み取る。

「おこまさんがどこかに隠し金を隠した、ということですか」
「それも考えられないことじゃねえが、おれはもうひとつ、考えているのさ。佐兵衛は多少の金を遺したかもしれねえが、おれたちが思っているような大金ではない。それをさもあるように思わせれば」
「なるほど。金目当てで、みんな、おこまさんを大事にしますね」
「そういうことだ」
「あたしは、もうひとつ、考えましたよ。お宝は実際にあって、それは佐兵衛さんの亡骸の下に埋められているのではないか、と」
「それもありえないことじゃねえな。わざわざ亡骸を運び出して、その下を探してみようとまでは思わねえ。案外、そのとおりかもしれないぜ」
大きく頷き返した後、自嘲せずにいられなかった。他人の金のことで盛りあがる自分たちの浅ましさを自分自身で嗤っている。
「あるのかないのかわからない隠し金のことはともかくも、旦那。おこまさんと初世さんのことはどうするんですか。旦那が父親代わりになって、お育てになるんですか、と、危ない、危ない。話している最中にその〝絵〟が視えちまいましたよ。育てていたはずの娘が、いつの間にか旦那の褥に、なんてことになりかねませんね」

「うるせえ」

答えた声は、どこか勢いがない。おこまと初世、さて、この二人をどうするか。どこかのお店にご奉公させるか、養子先を見つけるか。なんといってもまだ十だ。後見役となる大人が必要なのはあきらかである。

「お袋は居候について、あれこれ文句を言わねえからよ。ありがたいと言えばそうなんだが……おれも頭が痛いのさ」

「おや、お客様のようですよ」

「え？」

目をあげた弥十郎は、家の門前に佇む女と目が合った。千春が小さく会釈する。まさか隠し金の匂いを嗅ぎつけたわけではあるまいな、と、いささか警戒心が湧いていた。

「久しぶりじゃねえか。頼りにしていた〈むらたや〉は島送り、あてにしていた金が入らなくなって、途方に暮れたってわけかい」

皮肉たっぷりの言葉が出た。

「ええ、仰るとおりですよ」

千春は開き直る。

「初世のことが心配で、何度かここに来たことがあるんです。なにげなく旦那の後を尾行け

てみたら、向島の隠居所に行き着いたというわけ。裕福そうだったじゃありませんか。これは今度こそお宝が手に入るかも、そう思ったんですよ」

悪びれたふうもなく認めた裏には、なにが隠れているのか。お宝への欲望か、初世のことを想う気持ちか。話し声に気づいたらしく、初世とおこまが潜り戸から顔を覗かせた。出て来るな、と、目で示して、弥十郎は真意を探ろうとする。

「そんなに金がほしいか」

率直に訊いた。

「はい」

千春は真っ直ぐ目をあてて、答える。

「お金さえあれば、またあの娘と一緒に暮らせますから」

「ほう」

弥十郎はつるりと顎を撫でた。

「意外な答えだな。初世殿は邪魔者だったんじゃねえのかい」

「いえ、あ、旦那に押しつけてしまったことはお詫びいたします。でも……あの娘に、あたしは拾われたようなものなんですよ」

千春は語った。貧乏を絵に描いたような牢人暮らしだった千春の家。父と母との三人暮ら

しの中、日々、窮乏するばかり。それでもなんとか年を越す金を作り、これで新年を迎えられると思った矢先、

「大事なお金を掏られてしまったんです」

刀を売り、着物を売り、誇りまでをも売って作ったお金。もはや生きていく望みはない。潔く死のうじゃないか。

「わたしは死にたくありませんでした。怖かったんです。でも、父と母はもう疲れてしまったようで」

今宵、一家心中と、縄を手に迫る父。まさに千春の首に縄が掛けられた瞬間、家の前で赤児の泣き声が響きわたった。

「どうせ捨てるのなら、もっと裕福な家の門前に捨てればいいのに。どういう気持ちで捨てたんでしょうねえ。わかりませんが、はっとしました。その泣き声の大きさは、『生きたい、死にたくない』と言っているようで」

家の外に出た父親は、泣き叫ぶ赤児を抱きあげた。

〝この子は、豊臣家の血を引くお子だ。隠し財宝の在処が、このお子の背中に記されている。化粧彫りされている〟

とんでもないことを言い出した。突拍子もない言葉だったが、千春はすぐに受け入れた。

なにより死にたくなかったのである。泣きたいのは自分も同じだったのだ。

「それから、わたしたちは初世を姫様のように扱いながら育てました。偽りだとわかっていましたが、もしかしたら、という夢を与えてくれたんです」

実の親が名乗り出てくるかもしれない。その親は大大名家の藩主で、父親を仕官させてくれるかもしれない。

豊臣家のご落胤、あるいは大大名家の藩主の娘。

とほうもない夢物語を支えにして、一家は命を繋いだ。苦しい台所事情が変わるわけではなかったが、心中し損ねた一家は憑きものが落ちたように、身を粉にして働いた。

「なにも変わりませんでしたけどね」

ふっと寂しげに、千春は笑った。

「相変わらずの貧乏暮らし、先に母が亡くなり、その後、父も亡くなって、わたしと初世は二人きりになりました」

「邪魔だったんだろう、ええ、違うのかい」

意地悪く弥十郎は繰り返した。

「それで、おれに押しつけた。そんなおまえさんが、今更、どんな用があるってんだい。初世殿は一文無しだぜ。言っておくがな、向島の隠居だった佐兵衛もまた一文無しよ。あれは

〈むらたや〉を誘き出すために、おれが広めた噂話だ」

千春の白い顔を睨みつける。

「わかっています、あ、いえ、旦那が広めた噂だとは知りませんでしたけど」

一瞬、間を置いて、言った。

「夢だったんですよ。信じてもらえないかもしれませんが、初世はわたしたちの夢だったんです。離れてみてわかりました。わたしの妹だったんだって、『大切な存在』だったんだって。だから、だから、わたし」

「姉様」

初世が潜り戸から飛び出して来る。千春にしがみついた。

「わたしも一緒にいたい。一緒に暮らしたい」

「初世」

抱きしめる姿を見れば、皮肉も意地悪な台詞も引っこめるしかない。ぼりぼりと頭を掻いた弥十郎は、おこまに目を留めた。潜り戸の前に立ち、今にも泣きそうな顔をしている。初世と姉妹になればよい、そう言ったのは多香女だが……。

「二人で暮らします。本当に申し訳ありませんでした。料理屋に奉公することが決まったんです。初世ひとりぐらいなら、なんとか養えますので」

「そう、か」
弥十郎は複雑な思いで、もう一度、おこまを見た。つられるように視線を移した千春に、初世が告げる。
「おこまちゃんも一緒に、ね？」
「おいおい、待て、猫の子をもらうのとは、わけが違うんだぜ。だいいち千春にだって都合がある。今、言っていたじゃねえか。ひとりぐらいなら、なんとか、と」
「おこまちゃんも身寄りがないんですか」
千春の問いかけに、頷き返した。
「うむ。初世殿と同じでな。親類縁者はいるかもしれねえが、どこにいるのやらよ。わかっているだろうが、おこまも一文無しだぜ。さいぜん言ったように、一緒に暮らしていた佐兵衛は銭を遺しちゃくれなかったからな。ま、案じることはねえさ。うちのお袋が後見役となって、養子先を見つけてやるからよ」
千春に言いながら、実はおこまにも言い聞かせていた。佐兵衛が遺した金のことは言ってはならない、わかっているな。そんな視線に対して、おこまはかすかに頷いた。
「おいで」
差し出された千春の手に、おこまは飛びついた。二度と離すまいとするかのように、固く、

固く握りしめる。
「いいのか？」
「なんとかなりますよ。もちろん、二人にもしっかり働いてもらいますけどね。浅蜊売りでもしてもらえば、姉妹三人、暮らしていけると思います」
「住まいはどうするんだ」
「どこかの裏店に家を借りますよ。すみませんが、旦那。請け人になってください」
「それぐらいはお安い御用だが」
「さっそく今から探しに行きます。夕方にまたあらためて、ご挨拶に伺いますので」
躊躇することなく、千春は歩き出した。左手に初世、右手におこま。二人の娘の手を握りしめ、軽やかな足どりで歩いて行く。
「いいんですか、言わなくて」
成り行きを見守っていた宗順が囁いた。佐兵衛はおこまに、幾ばくかの銭を遺している。弥十郎に礼金をくれたことからも、それは確かだが、正確な金額についてはわからない。
「いずれ教えてやればいいさ。もしかすると、お宝があるかもしれねえってことをな」
だが、そのときはもうお宝は要らないかもしれない。千春は二人の妹という、なにものにも替え難い宝を得た。弥十郎の頭には、多香女の言葉が甦っている。

天に不測の風雲有り
人に旦夕の禍福有り

禍ばかりだと思っていたであろう千春の人生。だがしかし、千春自身も知らぬ間に福が訪れている。

「蓮の花の薫りだ」

千春の残り香だろうか。右衛門作にでも、香をもらったのかもしれない。楽しげに寄り添う三姉妹の後ろ姿を、弥十郎は、見えなくなるまで見送っていた。

この作品は書き下ろしです。原稿枚数６０７枚（４００字詰め）。

幻冬舎文庫

●好評既刊
御家人風来抄 天は長く
六道 慧

●好評既刊
御家人風来抄 日月の花
六道 慧

●最新刊
風雲伝 十兵衛の影
秋山香乃

●最新刊
船手奉行うたかた日記 花涼み
井川香四郎

●最新刊
爺いとひよこの捕物帳 弾丸の眼
風野真知雄

緒方弥十郎が二夜をともにしたおりょうが謎の死を遂げた。別れ際に彼女が発した言葉を手がかりに、弥十郎は調べに乗り出す。捜査はやがて過去に闇へ葬られたある事件へつながっていく――。

人には、誰にでも見せる「日の顔」と、心を許した者だけに見せる「月の顔」がある。色白の美女・志づかと金貸しのおらく。二人の女が見せた月の顔に隠された過去とは？

将軍家光の密命により、旅をしていた十兵衛が、瀕死の男から託された小さな菓子には、恐るべき幕府転覆の謀略が隠されていた――。青年剣士・柳生十兵衛の姿を描く活劇時代小説！

「屋形船を爆破する」。船手奉行所の朱門に張りつけられた脅し文。試すかのように爆破された猪牙舟には、時限装置と思しき巧妙な仕掛けが。一体誰が？　何のために？　好評シリーズ第五弾！

岡っ引きの下働き・喬太は、不思議な老人・和五助と共に、消えた大店の若旦那と嫁の行方を追う。事件には、かつて大店で働いていた二人の娘の悲劇が隠されていた――。傑作捕物帳第二弾。

幻冬舎文庫

●最新刊
公事宿事件書留帳十五
女衒の供養
澤田ふじ子

忽然と姿を消した夫の消息を二十五年ぶりに知ったお定。情報を寄せた娘から引き取ってもらえないかと懇願されるが、それを拒んだ矢先、予期せぬ話を聞かされる。人気時代小説、第十五集！

●最新刊
大奥
鈴木由紀子

女としてのあらゆる武器を使い、ただひとりの男をめぐって争った江戸城大奥は、さまざまな出自の側室を抱えていた。お静の方、お万の方、右衛門佐をとおして大奥の真実を描いた異色時代小説。

●最新刊
絆
山田浅右衛門斬日譚
鳥羽　亮

土壇場に引き出された罪人から今生への未練を密かに聞き、それを全うさせる処刑人・山田浅右衛門。彼の苦悩と、罪人の哀切極まりない半生を通して「人生の意味」を描ききる感動の連作時代小説。

●最新刊
闇魔亭事件草紙
迷い花
藤井邦夫

高級料理屋『八百善』に、悲鳴が響いた。そこには中年武士の斬殺死体。そして、消えた女……。戯作者〝闇魔亭居候〟として難事件の真相を探る夏目倫太郎の活躍を描く好評シリーズ第二弾！

●最新刊
紅無威おとめ組
南総里見白珠伝
米村圭伍

脇差の下げ緒に結んだ白い珠に突如、浮かび上がった文字、〆。奇怪な現象を目にした桔梗が館山藩内で突き止めた謎めく白珠伝承の真相とは？大江戸チャーリーズエンジェル、白熱の第二弾！

幻冬舎文庫

●最新刊
第三の買収
牛島　信

一部上場企業・龍神商事の社長はMBOを決意するが、強欲ハゲタカファンドの出現で絶体絶命！その時、社内から思わぬ救い手が現れた――。壮絶な企業買収劇を描く衝撃の企業法律小説。

●最新刊
余命三カ月のラブレター
鈴木ヒロミツ

余命三カ月の宣告を受け、鈴木ヒロミツは妻に、息子に、猛烈な勢いで手紙を綴り始める。延命治療を拒み、残された家族との時間を大切にすることを選んだ彼の、愛と感謝のラストメッセージ！

●最新刊
食べてきれいにやせる！
伊達式脂肪燃焼ダイエット
伊達友美

自らも20kg減を達成した人気カウンセラーが、〝栄養をプラスしてやせる〟驚きのノウハウを伝授。体脂肪はシソ油で撃退、朝の果物で排泄力アップ……など、大反響の成功バイブル、ついに文庫化！

●最新刊
アメリカ・カナダ物語紀行
松本侑子

「赤毛のアン」シリーズ『若草物語』『森の生活』「大草原の小さな家」シリーズ。懐かしい名作の舞台を訪れ、作者の生涯をたどり、物語の世界を心ゆくまで旅する、ロマンチックな文学紀行。

●最新刊
ヒーリング・ハイ
オーラ体験と精神世界
山川健一

ある日突然オーラが見えるようになった著者が徹底探求し、辿り着いた精神世界の極意とは？様様な現象を解説し、現代特有の不安の中を生きる私たちを救うセルフ・ヒーリングのすすめ。

御家人風来抄

風雲あり

六道慧

平成21年6月10日　初版発行

発行人――石原正康
編集人――菊地朱雅子
発行所――株式会社幻冬舎
〒151-0051東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7
電話　03(5411)6222(営業)
　　03(5411)6211(編集)
　　振替00120-8-767643
印刷・製本――中央精版印刷株式会社
装丁者――高橋雅之

万一、落丁乱丁のある場合は送料小社負担でお取替致します。小社宛にお送り下さい。
定価はカバーに表示してあります。
Printed in Japan © Kei Rikudo 2009

幻冬舎文庫

ISBN978-4-344-41323-8　C0193　り-2-3

江戸では運座が流行、誰もが風流を気取って句を詠む中、弥十郎が用心棒を頼まれた佐兵衛の家でも「運座のようなもの」が開かれる。だがその夜、何者かに毒を盛られた佐兵衛は、「長谷川平蔵」という言葉を遺して事切れた。佐兵衛を襲った賊の背後にちらつく水戸家の影。一計を案じた弥十郎はある噂を市中に流す。敵は動くのか。人気シリーズ第三弾！





定価（本体648円＋税）

ISBN978-4-344-41323-8

C0193 ¥648E